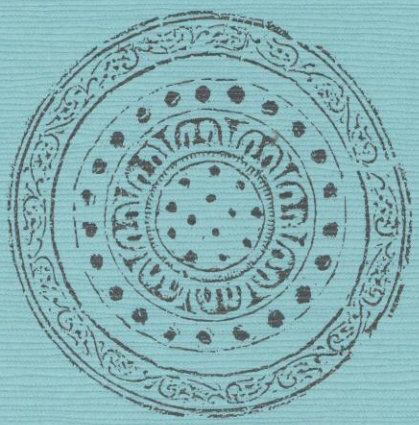
大分廃寺

筑穂町文化財調査報告書

第3集



1997

筑穂町教育委員会

大分廃寺

筑穂町文化財調査報告書

第3集

1997

筑穂町教育委員会



大分廃寺周辺航空写真（平成 5 年撮影）



大分廃寺周辺航空写真（平成 5 年撮影）



塔　跡



塔心礎

序

福岡県のほぼ中央部に位置する筑穂町は、三方を山に囲まれ、筑後・福岡方面から当町に至るには、難所である峠越えをしなければなりません。このことは昔も今も変わりませんが、古代においては、米の山峠を越える道は当時「西の都」と称された大宰府と豊前地方を結ぶ「官道」に比定されており、この地は交通の要所として重要な位置にありました。

この官道筋にあった大分地区には神亀3年創建と伝わる大分八幡宮があり、この大分八幡宮とも深い関係があったといわれる大分廃寺は、それから約0.5kmのところに位置しております。大分廃寺の塔跡は稀にみる良好な保存状況と学術的な価値は多くの関係者の知る所であり、昭和16年には国の史跡に指定され、今日に至っております。

今度、この貴重な塔跡を広く後世に伝えるため国庫補助を得て、史跡整備を行うことになりました。整備に先だちその実態を把握するため平成3年度から平成7年度の5か年にわたって発掘調査を実施いたしました。その結果、これまで不明であった寺の創建とその範囲について手掛かりを得ることができましたことは大きな成果であったと思われます。また一方、今後に残された課題も多く、それについては可能な限りの努力をするつもりであります。

末尾になりましたが、地元にあって当廃寺の研究・保存に尽力され、また、調査指導委員長をつとめて頂いた児島隆人先生が調査終了を俟たずにご逝去された事は誠に残念に思う次第であります。

また、調査実施にあたって、ご協力、ご理解を頂いた地権者並びに地域の方々に深く感謝を申しあげる次第であります。

本調査報告書が文化財の理解と保護のため、さらには研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。

1997年3月31日

筑穂町教育委員会

教育長　吉原　洋一

例　言

1．本書は、筑穂町教育委員会が国、県の補助を受けて平成3年度から平成7年度まで発掘調査を実施した国指定史跡「大分廃寺塔跡」の報告書である。

2．発掘調査は、平成3年度と平成4年度は塔跡整備の資料を得るための調査、平成5年度から平成7年度までは寺域確認のための調査である。

3．検出遺構及び出土遺物については、大分廃寺調査指導委員のご指導とご教示を得た。

4．筑穂町では、昭和61（1986）年度に『木下遺跡』（新原正典他編）が、昭和63（1988）年度に『米ノ山遺跡』（新原正典編）をそれぞれ刊行しており、本書が筑穂町文化財調査報告書の第3集にあたる。

5．発掘調査は、筑穂町教育委員会が主体になり、九州歴史資料館及び福岡県教育庁筑豊教育事務所の援助を受けた。

6．本書の地形図と遺構図は国土調査法第II座標系をもとに基準点を設け作成した。

7．本書に掲載した遺構写真と遺物写真は、九州歴史資料館の石丸洋が撮影した。

8．本書に掲載した空中写真はフォト・オオツカに依頼した。

9．出土遺物の整理、図面の浄書は九州歴史資料館において栗原・横田の指導で今井涼子・小田美和が行った。また、平成3年度分についての遺物整理は福岡県教育庁指導第2部文化課の岩瀬正信が行った。

10．本書の執筆は、（第Ⅰ章）山田誠（第II章）山田誠（第III章）新原正典・緒方泉・水ノ江和同・山田誠（第IV章）横田賢次郎（第Ⅴ章）1.「瓦類」栗原和彦　2.「土器類」横田賢次郎（第VI章）横田賢次郎がそれぞれ分担し、本書の編集は横田が行った。

なお、遺物整理作業は九州歴史資料館の大宰府史跡坂本事務所において大田千賀子・市川千香枝・中田千枝子と筑穂町教育委員会の整理作業棟において平畑恵美子・岡松和代・川上福美の協力を得た。

目　次

序
Ⅰ．はじめに……1
　1．調査に至った経緯……1
　2．調査関係者……2
Ⅱ．遺跡の位置と環境……3
Ⅲ．調査の経過……5
　1．発掘調査の概要……5
　　（1）平成3年度の概要……5
　　（2）平成4年度の概要……6
　　（3）平成5年度の概要……7
　　（4）平成6年度の概要……8
　　（5）平成7年度の概要……9
　2．調査日誌……10
Ⅳ．遺　構……13
　1．塔　跡……13
　　（1）建　物……13
　　（2）心　礎……14
　　（3）基　壇……15
　　（4）基壇上の近世の遺構……16
　2．各トレンチ検出の遺構……16
　　（1）南北溝……16
　　（2）東西溝……16
　　（3）瓦溜り……17
　　（4）柵列状遺構……18
　　（5）鋳造関連遺構……18
　　（6）不明遺構……18
Ⅴ．遺　物……19
　1．瓦　類……19
　2．土器類……36
　3．近世遺構に伴う遺物……47
Ⅵ．結　語……49

挿　図　目　次

第１図　大分廃寺周辺遺跡分布図
第２図　Ａトレンチ遺構配置図……5
第３図　Ｂトレンチ遺構配置図……6
第４図　Ｅトレンチ遺構配置図……6
第５図　Ｃ・Ｊトレンチ、Ｄ・Ｆトレンチ遺構配置図……折込み
第６図　Ｇトレンチ遺構配置図……7
第７図　Ｈ・Ｉトレンチ遺構配置図……8
第８図　Ｎトレンチ遺構配置図……8
第９図　Ｌトレンチ遺構配置図……8
第10図　Ｍトレンチ遺構配置図……8
第11図　Ｋトレンチ遺構配置図……9
第12図　Ｏトレンチ遺構配置図……9
第13図　大分廃寺遺構配置図……12
第14図　塔建物ＳＢ001遺構実測図・基壇断面図……13
第15図　塔心礎実測図……14
第16図　塔礎石実測図……15
第17図　溝ＳＤ050土層図……16
第18図　溝ＳＤ060土層図……17
第19図　大分廃寺出土軒丸瓦……20
第20図　大分廃寺出土軒丸瓦Ⅳ類と大宰府跡出土同笵例……21
第21図　大分廃寺出土軒平瓦（１）……23
第22図　大分廃寺出土軒平瓦Ⅱ類と椿市廃寺出土同笵例……24
第23図　大分廃寺出土軒平瓦（２）……25
第24図　大分廃寺出土文字瓦……27
第25図　瓦溜りＳＫ025出土軒瓦・鬼瓦　拓影・実測図……28
第26図　瓦溜りＳＫ025出土丸瓦・平瓦　拓影・実測図……29
第27図　大分廃寺出土丸瓦・平瓦片　拓影・実測図……32
第28図　塔跡ＳＢ001・Ａトレンチ出土土器・陶磁器実測図……37
第29図　Ｄトレンチ出土土器・鉄製品実測図……39
第30図　Ｆトレンチ出土土器実測図……41
第31図　Ｇ・Ｈトレンチ出土土器・陶磁器実測図……42
第32図　Ｈ・Ｊ・Ｌトレンチ出土土器・石製品実測図……44
第33図　Ｍトレンチ出土土器・石製品実測図……46
第34図　銅銭拓影……47
第35図　塔建物ＳＢ001推定復原図……49

第36図　大分廃寺伽藍配置復原案……51
第37図　大分廃寺伽藍配置推定復原図……53
第38図　大分廃寺実測基準点配置図……54

附　図　大分地区字図

表　目　次

第１表　軒丸瓦出土点数表……22
第２表　軒平瓦出土点数表……26
第３表　瓦溜りSK025出土瓦計測表……31
第４表　瓦溜りSK025出土丸瓦・平瓦全長値度数分布表……31

図　版　目　次

巻頭図版１　大分廃寺周辺航空写真（平成５年撮影）
巻頭図版２　（上）塔跡
（下）塔心礎
図版１　（上）大分廃寺周辺航空写真（平成５年撮影）
（下）塔跡整備状況（西から）平成４年撮影
図版２　（上）大分廃寺全景（南東から）昭和30年代後半頃撮影
（下）塔跡（北西から）昭和35年頃撮影
図版３　（上）塔跡（北西から）昭和30年畠中大三郎氏撮影
（中）塔跡（西から）昭和44年石丸洋撮影
（下）塔跡心礎（昭和44年石丸洋撮影）
図版４　（上）大分廃寺全景（空中写真）
（下）塔跡全景（空中写真）
図版５　（上）塔跡全景（東から）
（中）塔跡全景（北から）
（下）塔跡全景（西から）
図版６　（右上）塔心礎・四天柱礎石
（右中）塔心礎全景
（右下）塔心礎細部

（左）　塔心礎側面の線刻
図版７　（右上）塔跡南側階段部調査区全景（西から）
（右中）柱穴と掘り込み地業断面
（右下）塔跡掘り込み地業と版築状況
（左上）塔跡西側階段部調査区全景（北から）
（左下）塔跡基壇版築状況（断面）
図版８　（上）　Ａトレンチ全景（西から）
（下右）Ａトレンチ部分（南から）
（下左）Ａトレンチ部分（北から）
図版９　（上右）Ｃトレンチ全景（西から）
（上左）Ｂトレンチ全景（北から）
（下）　Ｄトレンチ全景（南から）
図版10　（上）　Ｄトレンチ北半部（南から）
（下）　Ｄトレンチ柵状遺構ＳＡ030（東から）
図版11　（上）　Ｄトレンチ瓦溜りＳＫ025瓦出土状況（西から）
（中）　Ｄトレンチ瓦溜りＳＫ025完掘状況（東から）
（下）　Ｄトレンチ鋳造関連遺構ＳＸ035（南から）
図版12　（上右）Ｆトレンチ全景（南から）
（上左）Ｅトレンチ全景（西から）
（下右）Ｈトレンチ全景（西から）
（下左）Ｇトレンチ全景（北から）
図版13　（上）　Ｈトレンチ南北溝ＳＤ050（南から）
（中）　Ｊトレンチ東西溝ＳＤ060（東から）
（下右）Ｉトレンチ全景（南から）
（下左）Ｊトレンチ全景（北から）
図版14　（上右）Ｌトレンチ全景（東から）
（上左）Ｋトレンチ全景（西から）
（中）　Ｍトレンチ東西溝ＳＤ060（西から）
（下）　Ｏトレンチ東西溝ＳＤ060（北東から）
図版15　出土軒丸瓦
図版16　出土軒丸瓦および参考資料
図版17　出土軒平瓦
図版18　（上）　出土軒平瓦類と文字瓦
（下）　瓦溜りＳＫ025出土瓦（１）
図版19　瓦溜りＳＫ025出土瓦（２）
図版20　瓦溜りＳＫ025出土瓦（３）
図版21　出土丸瓦片・平瓦片（１）
図版22　出土平瓦片（２）

図版23　大分廃寺出土軒瓦（大分八幡宮所蔵主要資料）
図版24　大分廃寺出土軒瓦（養源寺所蔵資料、塚本権一氏所蔵資料）
図版25　（上）　大分廃寺出土軒瓦（畠中大三郎氏所蔵資料）
（下）　大分廃寺出土軒瓦（筑穂町教育委員会保管資料・穂波町教育委員会所蔵（左下））
図版26　（右上）大分廃寺出土軒瓦（九州大学所蔵資料）
（右下）参考資料　天台寺跡出土軒平瓦（奈良国立博物館所蔵資料）
（左）　大分廃寺出土軒瓦（筑穂町教育委員会保管資料）
図版27　塔跡ＳＢ001・瓦溜りＳＫ025出土土器・陶磁器
図版28　瓦溜りＳＫ025出土土器
図版29　瓦溜りＳＫ025・Ｆトレンチ出土土器・鉄製品
図版30　Ｇトレンチ・Ｈトレンチ出土土器・陶磁器・石製品
図版31　Ｊトレンチ・Ｌトレンチ出土土器・石製品
鋳造関連遺跡ＳＸ035出土鋳造関連遺物
図版32　（左上）宝篋印塔全景
（右上）宝篋印塔部分
（左下）宝篋印塔基礎部
（下左）一字一石経出土状況
（下右）宝篋印塔部分
図版33　一字一石経



第１図　大分廃寺周辺遺跡分布図（50,000分の１）

1．大分廃寺　2．日上遺跡　3．スダレ遺跡　4．王塚古墳　5．北古賀遺跡　6．天神山古墳　7．ホウケントウ古墳
8．出雲百穴・九郎丸横穴群　9．木下遺跡　10．桜が丘遺跡　11．鳥バミ遺跡　12．小瀬隈遺跡　13．久手遺跡
14．大分八幡宮　15．中野山遺跡　16．米ノ山城跡　17．小正西古墳

Ⅰ　はじめに

1．調査に至った経緯

筑穂町は福岡県の中央部、筑豊地方の奥まったところにあり、古代においては大宰府政庁から豊前地方へ抜ける大宰府官道が通じ、交通の要所として重要な位置にあった。そして、近世には長崎街道筑前六宿の一つ内野宿が栄え、今も峠の旧道には石畳が残り、その面影を偲ぶことができる。また、大分廃寺の近くにはこの廃寺とも密接な関係があったとみられる神亀3年(726年) 創建と伝わる大分八幡宮が所在している。

大分廃寺に関連して、次のように古くから記録にみえている。東大寺所蔵文書に「依大分寺所領公験明白也」とあり、文中の「大分寺」とはこの廃寺をさすのか定かではないが、当時穂波郡に大分寺と称される寺院が存在していたことは事実のようであり、この記載記事については、早くから関係者によって指摘されていた。また、『筑前国続風土記』の大分八幡宮の項には「社僧の坊を妙現山長楽寺と云、天台宗也。むかしは社僧の家も栄へて、大寺なりしにや。其時の小寺の名、今も畠の字に残れり。八幡宮より七八町東の方、田の中に輪蔵の址あり。大なる礎石多し。大石を切て柱をすへたる跡あり」と、塔跡に関すると思われる記述がある。この塔跡について当時から関心がもたれていたようで、『太宰管内誌』や『筑前国続風土記拾遺』にも同様の記載がみられる。

大分廃寺塔跡の文化財指定にいたる経緯として、その発端となったのは郷土史愛好家の梅澤廣氏が当時の東京帝国大学の高橋健自氏へ大分廃寺から出土した古瓦の拓本・写真等を送付したことによる。数度の資料・写真・手紙のやりとりの後に、高橋健自氏が『考古学雑誌』に「筑前国大分廃寺址及同所発見古瓦」として発表され、世に知られるようになった。その後、当時嘉穂東高等学校の教諭だった児島隆人氏もここを幾度となく訪れ大分廃寺に関して、『考古学』に「筑前国大分廃寺創立に関する一考察」を発表されるに至り、文部省技官文化財保護委員斎藤忠氏の調査にすすんで、塔跡は昭和16年12月13日に国指定史跡になった。そして、斎藤忠氏はその調査の成果をふまえ、『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』に「大分廃寺趾とその出土古瓦」を発表され、さらに、鏡山猛氏それに小田富士雄氏によって出土瓦を中心とした研究がなされ、北部九州のなかでも著名な特色ある古代寺院としての位置づけがなされ、現在に至っている。

塔跡は国指定史跡に指定された後、そのまま今日まで保存されていたが、平成3年度になり塔跡の整備を実施することになった。その資料を得る目的で平成3、4年度の2箇年にわたって発掘調査を行った。調査を実施するにあたっては「大分廃寺調査指導委員会」を設置し、この指導・助言のもとに調査を進めていくことになった。そして、この2箇年の調査の結果、塔の基壇の規模が44尺であることが判明し、現在の指定地よりも当時の基壇は一回り大きく、現状のままでの整備をすることは本来の整備ではないとの結論を得ることとなった。このため、今回は西側にずり落ちている4個の礎石を創建時の位置に復原し、周囲に芝を張り、真砂土で盛土をするだけの仮整備とし、今後、塔の周辺部の調査を実施し、その結果をまって本格的な整備を実施すべきとの意見が提出された。

塔跡の周囲は現在では田地として残っている部分が多いが、近くにはＪＲ筑前大分駅があり、福岡市に近いところから周辺は近年宅地開発がすすんでおり、文化財保護のため早急な対応が望まれ

ているところであった。このため、塔跡の調査のみならず寺域の範囲の確認をして何らかの対応をとるべきとの「委員会」の指導を受け、平成5年度から平成7年度までの3箇年について寺域の確認調査を実施することになった。平成7年度に報告書の刊行を予定していたが、部分的な補足調査が必要になり、報告書の刊行は平成8年度に繰り延べることとなった。

関係文献

・貝原益軒『筑前国続風土記』『福岡県史資料』続第四輯　1943.3
・青柳種信『筑前国続風土記拾遺』筑前国続風土記刊行会編　1973.10
・伊藤常足『太宰管内誌』(上) 歴史図書社刊　1969.2
・高橋健自「筑前国大分廃寺址及同所発見古瓦」『考古学雑誌』10巻9号　1920.5
・鏡山　猛「北九州古瓦の一様式について」綜合古瓦研究第2分冊『夢殿』19　1939
・児島隆人「筑前国大分廃寺創立に関する一考察」『考古学』10巻12号　1939.11
・斎藤忠「大分廃寺趾とその出土古瓦」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』17集8号　1942.8
・小田富士雄『九州考古学研究－歴史時代編』学生社　1977.1
・九州歴史資料館編『九州古瓦図録』柏書房　1981.11
・筑穂町誌編纂委員会『筑穂町誌』1962.11

2．調査関係者

（1）大分廃寺調査指導委員会（平成3年度～8年度）

澤　村　　仁	前九州芸術工科大学教授
小　田　富士雄	福岡大学人文学部教授
山　本　輝　雄	九州大学工学部助手
石　松　好　雄	前九州歴史資料館副館長（現福岡県教育庁指導第二部文化課長）
児　島　隆　人	前飯塚市歴史資料館館長　平成6年度まで
嶋　田　光　一	飯塚市歴史資料館学芸員　平成7年度から

（2）筑穂町教育委員会

	教　育　長	社会教育課長	社会教育係長	係（調査担当）
平成3年度	芳野　　學	芳野　誠介 森本　秀幸	鬼丸　市朗	新原　正典 （筑豊教育事務所派遣）
平成4年度	芳野　　學	森本　秀幸	鬼丸　市朗	山田　　誠
平成5年度	山本　誠二	芳野　誠介	鬼丸　市朗	山田　　誠
平成6年度	山本　誠二	曲渕　新記	吉原　文明	山田　　誠
平成7年度	山本　誠二 吉原　洋一	曲渕　新記 木村　光良	吉原　文明	山田　　誠 杉内　　郷
平成8年度	吉原　洋一	木村　光良	吉原　文明	山田　　誠　荻村　昇二 杉内　　郷　森　　昭紀

（3）筑豊教育事務所・九州歴史資料館

①筑豊教育事務所

新原正典（平成3年度）・緒方泉（平成4年度～平成6年度）・水ノ江和同（平成7年度～平成8年度）

②九州歴史資料館

栗原和彦・横田賢次郎・石丸洋・小田和利・小川泰樹・杉原敏之

II　遺跡の位置と環境

大分廃寺は、福岡県嘉穂郡筑穂町大字大分字塔床718番に所在している。

筑穂町は福岡県の中央部に位置し、当地方のある嘉穂・飯塚・山田地域は三方を山々に囲まれ、開けているのは北側の三郡山地や夜須高原を源流にした穂波川の本流の遠賀川が流れる北九州地方のみで、他の地域との連絡はすべて峠越えをしなければならない。特に本町はこの地域の最も奥まったところに立地しており、西にある標高936mの三郡山に連なる三郡山地を背景に南に冷水峠、南西に米の山峠、北西にはショウケ越えの各峠がある。そして、これらの峠は各時代において重要な交通路としての役割を果たしてきた。

このうち、米の山峠には、古代においては大宰府政庁から豊前地方へ抜ける主要な幹線道路である大宰府官道が通じていた。そして、この官道の道筋には太宰府市の観世音寺をはじめ、当町の大分廃寺、田川市の天台寺跡、行橋市の椿市廃寺、新吉富村の垂水廃寺などの古代寺院が点在する。これらの寺院跡からは共通する瓦が出土し、大分廃寺をはじめとするこれらの寺院跡から出土する新羅系や大宰府系の瓦は渡来系氏族との関係や豊前地方と大宰府の関係を考える上で以前から注目されてきた。

塔跡のある大分字塔床は、標高約52mに位置し北東には標高616mの竜王山がそびえ、南西には三郡山が遠望できる。廃寺の北側には小山があり、周囲は近年の宅地開発による住宅化が進んでいるものの、今のところ田地として多く残っている。塔跡の周囲は地形的に東側に向かってだんだんと低くなっており、南には穂波川の支流である大分川が流れ、その前の田の中には児島氏が南門跡に推定されている「大門」（だいもん）と呼称されているところがある。塔跡周辺は平坦であり、その周囲は一段高くなり、東に向かって舌状に突き出した台地状になっている。廃寺の存在を示す塔跡はこの舌状になった台地のほぼ中央部付近にあり、現在、この壇上には近世に建てられた宝篋印塔が１基と石祠が１基あり、地域住民の信仰の対象となっている。

塔跡の周辺の農地は昭和50年代になって同和対策事業により基盤整備（圃場整備）が実施されることになった。しかしながら、遺跡の重要性からこの時点で事業の計画変更を行い、その結果、塔跡の北方一帯は基盤整備の対象地区から除かれることになり、現在に至っている。

また、塔跡の南方約0.5kmの所に瓦窯跡に推定されている所がある。廃寺に使用された瓦を焼いたと思われる場所はいまだ確認されていないが、塔跡の南側を横切るように石炭を運び出すための石炭運搬専用鉄道の引込線の敷設工事がなされた折、瓦窯跡推定地付近の山裾の工事現場から古代のものと思われる瓦が発見されたとの伝聞がある。この引込線も今は廃線となり、草木が生い茂り、伝聞の場所を踏査したが、それらしき古瓦や痕跡は確認できなかった。

町内には、縄文時代の遺跡として、塔跡の東南約1.5kmの丘陵端の北古賀にはこの地方を代表する北古賀遺跡と、南西約４kmには鳥バミ遺跡があり、採集資料であるが縄文時代後晩期の多くの土器、石鏃、切目石錘などが知られている。

弥生時代になると、嘉穂盆地内では遺跡数が多くなり、塔跡南東約2.5kmに中期の土器片を出土した阿恵遺跡、南東約２kmに硅化木製の磨製石剣を出土した桜が丘遺跡、東南約0.5kmには中期後半に比定される土壙墓から鉄製鉇を出土した小瀬隈遺跡がある。

古墳時代には、嘉穂盆地内の広範囲で古墳、横穴墓が築造された。北古賀遺跡の南側の丘陵に北古賀古墳、塔跡の南には小瀬隈古墳がある。また、この地域は平野部周辺の低丘陵を利用した横穴墓が顕著な地域であり、塔跡の南東約2.5kmには出雲百穴・九郎丸横穴墓群と呼ばれる横穴群がある。また、東へ約2.5kmの桂川町寿命には特別史跡王塚古墳がある。

歴史時代になると、安閑２年（535年）には『日本書紀』に「置筑紫穂波屯倉」とあり、屯倉が設置され、この地方は名の示すように豊かな土地だったらしい。さらに、大宰府官道も設置された。そして、この道筋には後に筥崎八幡宮に遷座した神亀３年創建と伝わる大分八幡宮がある。江戸時代になって、長崎街道の筑前六宿のひとつである内野宿が慶長17年（1612年）に開設され、近世においても重要な位置を占めた。

筑穂町は昭和30年３月に上穂波村・内野村・大分村の三村が合併して筑穂町になったが、町内には多くの遺跡があり、特に大分廃寺塔跡のある大分地区は廃寺が存続した時代に関連する貴重な遺跡が今後発見される可能性が大きいと言えよう。



大分八幡宮境内

III　調査の経過

1．発掘調査の概要

（1）平成3年度調査概要

・調査地点　嘉穂郡筑穂町大字大分字塔床718番

・調査期間

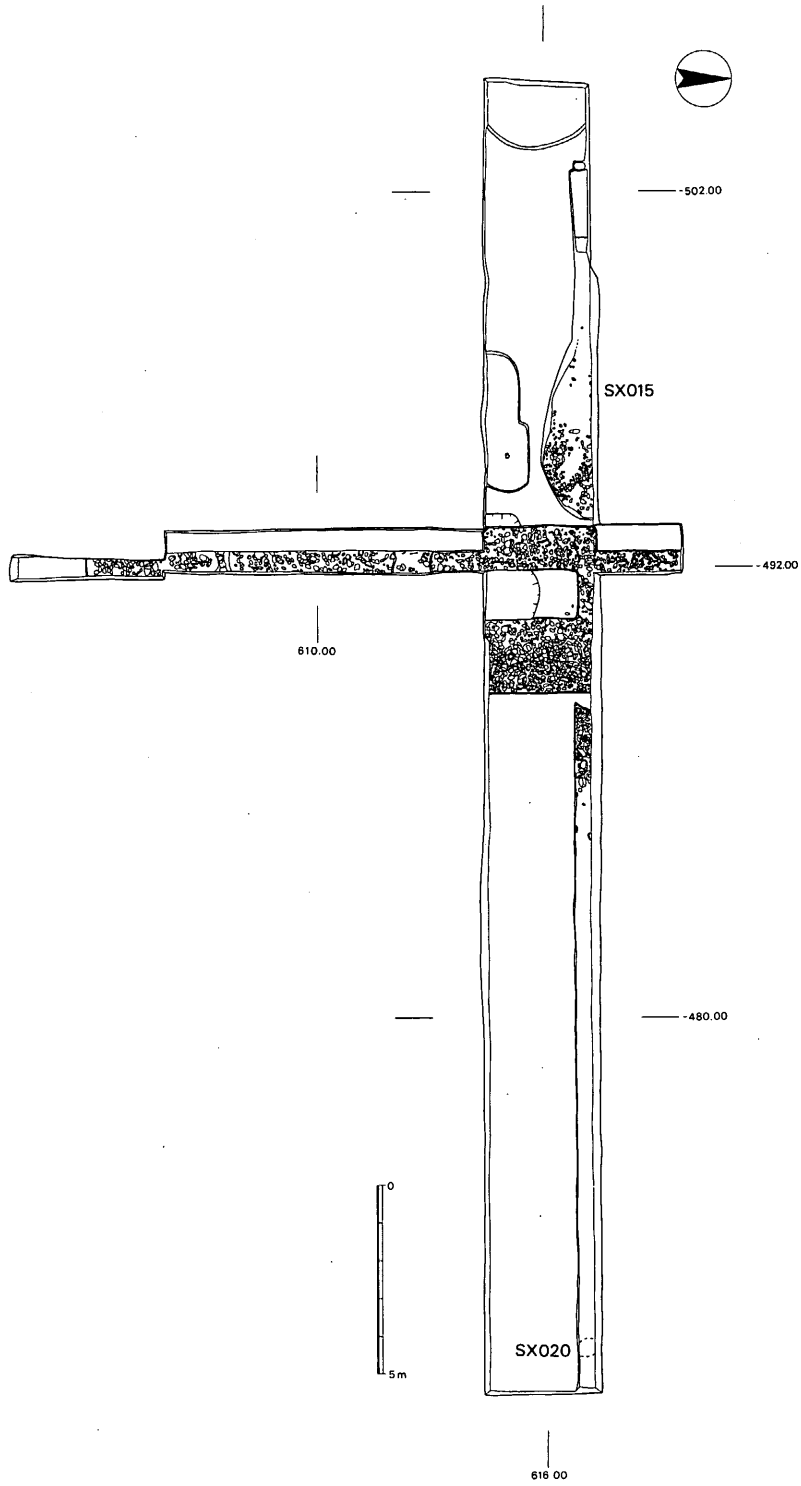
平成3年3月2日

～平成3年3月31日

・調査面積　約100㎡

平成3年度から始まる第1次調査の目的は、大分廃寺塔跡の環境整備事業の基礎資料を得るため、塔基壇の平面規模と構造についての解明であった。

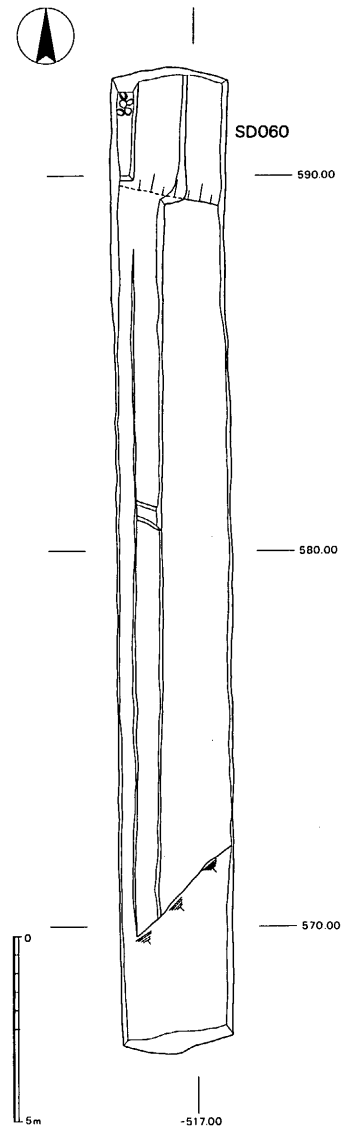
調査は平成4年3月2日から開始し、現況写真撮影の後、塔跡を囲っているコンクリート製角柱柵列の撤去を行った。発掘は、日程の関係で、塔心礎を中心として塔基壇を東西の2区に分割し、今年度はその東半部（I区）について行った。I区の表土下は暗褐色土の堆積層で、古銭や近世の染付片などとともに多数の瓦片が出土し、この面にて近世の一字一石経埋納遺構が確認



第2図　Aトレンチ遺構配置図

された。また、暗褐色土下で固い褐色の版築状基壇積土が確認され、東側柱礎石列から1.3～1.6mの距離にて礎石列とほぼ平行する小礫の石列を検出した。

塔基壇の東・南辺は、塔基壇保護の石垣で囲繞されている。基壇東端部の確認を行うため、この東辺石垣とその下段の畑地にトレンチを設けた。石垣の基礎には更に60cm高のコンクリート壁があって撹乱がひどく、基壇端部の確認はできなかったが、トレンチ底面にて掘込み地業にともなうとみられる礫敷層を確認した。調査の後半は悪天候に悩まされたが、実測・空中写真撮影・トレンチの埋め戻しを行い、3月31日に器材を撤収して調査を終了した。また、調査に併行して、今後の周辺地域の発掘調査のため、国土調査法第II座標系を基に、測量用2級基準点を塔跡基壇内に1か所と周辺地区3か所に設置した。(巻末に配点図を掲載)



第3図　Bトレンチ遺構配置図

(2) 平成4年度調査の概要

・調査地点　嘉穂郡筑穂町大字大分字塔床718番
・調査期間　平成4年10月15日～平成4年11月25日
・調査面積　約80m²

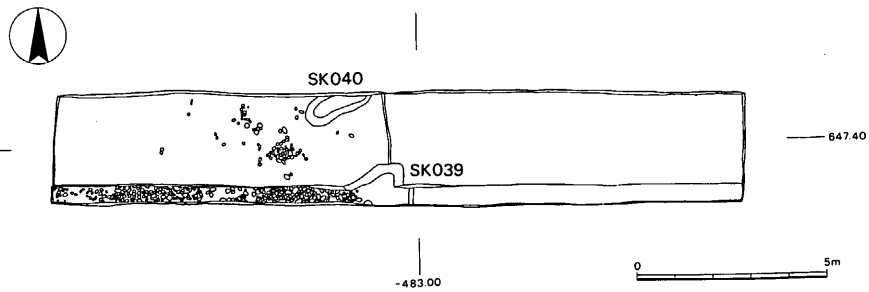
平成3年度には塔跡の東側半分を調査し、平成4年度には継続して、残りの西側半分(II区)の調査を行った。そして、保存整備事業として西側部分の転落した礎石を創建時の位置に復原し、全体に芝張りを実施した。その他、今後の寺域確認調査を実施するために使用する地形測量図(1/500)を作成した。

調査の結果については、以下のことが確認された。

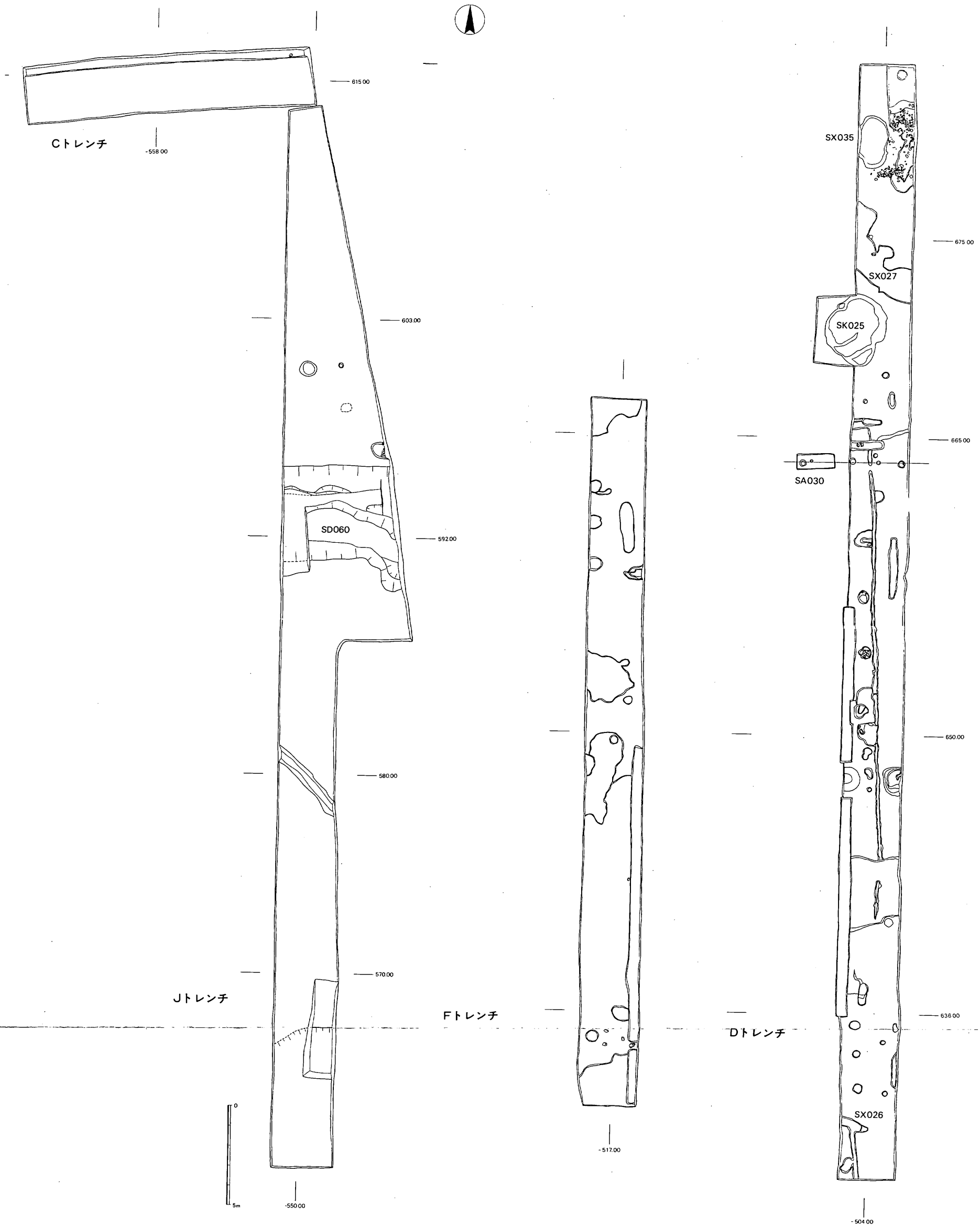
①平成3年度の調査において、基壇の範囲が東側柱礎石の心から東へほぼ10尺の距離で版築が確認されたが、今回の調査でも、西側柱礎石の中心から西へほぼ10尺の距離で同様に確認された。このことから、塔の基壇規模は約44尺と推定された。

②塔心礎の上面に中心から外側、8方向の線刻が検出され、それぞれを延長していくと各柱礎石の中心を通ることが確認された。

③階段部分の確認のため、南側及び西側部分にトレンチを設定したが、南側部分は基壇周囲のコンクリート擁壁工事のため破壊



第4図　Eトレンチ遺構配置図



第5図　C・Jトレンチ、D・Fトレンチ遺構配置図

され、西側部分も遺構は確認できなかった。

④平成３年度の調査で確認された版築面に並ぶ石列（東側柱礎石から1.3～1.6m）は、今回の調査でも南側柱礎石から1.2～1.4mの距離で検出された。

この石列は、区画を示すものとも考えられるが、東側柱礎石列及び南側柱礎石列と平行しておらず、また、面も合わせていないことから、版築の補強を目的としたものと考えられた。

⑤前記の石列とは別に、東側柱礎石、南側柱礎石から1.75mの距離に列石が検出された。これも④と同様に、版築の土止め補強の目的があったとみられる。

⑥遺構軸線は、現在の座標北よりほぼ1°25′西側にずれていることが確認された。

⑦版築の下層の積み土下部には、礫石を一面に敷き詰めていることが確認されたことから、掘り込み地業は約12.75×12.75mの範囲で行い、底部近くに礫石を一面に敷き詰め、さらに、その上に厚さ約50cmの積み土をし、その上から版築（厚さ約80cmが残存）を行っている。

⑧塔心礎東側で一辺1.10m、深さ40cmでの範囲で一字一石経が埋納されていたが、一辺の長さが宝篋印塔の底辺と一致することから、本来宝篋印塔の下部遺構であると推定された。その他、宝篋印塔の石の間に寛永通宝が検出されたが、賽銭として挟まれていたものと思われる。

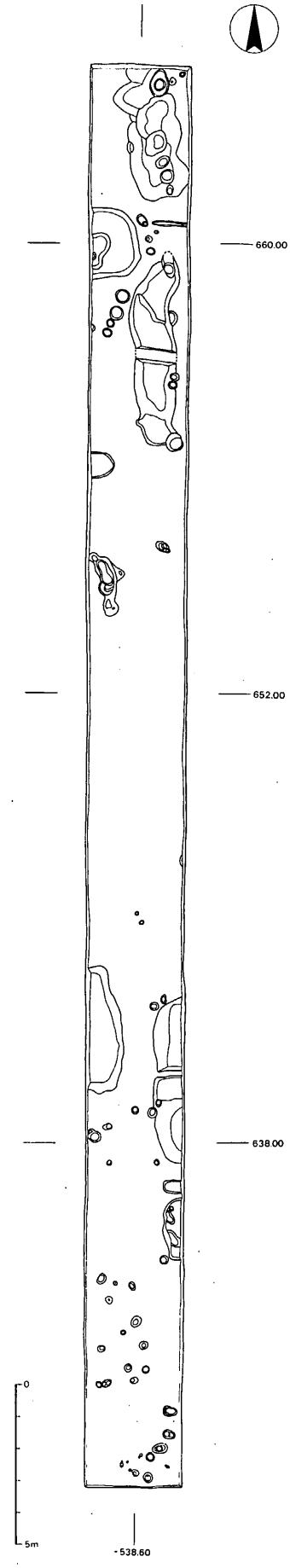
⑨出土遺物には、軒丸瓦・軒平瓦・平瓦片および若干の須恵器片、近世陶磁器片があった。

（３）平成５年度調査の概要

・調査地点　嘉穂郡筑穂町大字大分字塔床720番、725番、729番
・調査期間　平成６年２月７日～平成６年３月31日
・調査面積　約250㎡

平成５年度は、寺域確認のため塔跡を中心に東側にＡトレンチ（東西35m×幅３m、それと直交して、南北13.5m×幅0.5m）、南側にＢトレンチ（南北26m×幅３m）、西側にＣトレンチ（東西10m×幅３m）の３本のトレンチを設定し、金堂をはじめとする遺構の確認を行った。

その結果、東側（Ａトレンチ）で塔心礎の中心から約26.5mの地点で東西幅約11m、南北幅約9.5m（復原幅19m）の範囲で礫石群が確認された。これは、塔跡にみられた掘り込み地業に類似していることから、金堂の基壇の基礎工事に伴うものと考えられ、伽藍配置は



第６図　Ｇトレンチ遺構配置図



第7図　H・Iトレンチ遺構配置図

従来考えられていた「法起寺式」とは異なり、塔を西側に金堂を東に配置する「法隆寺式」の可能性がでてきた。しかし、塔跡の基壇にみられるような掘り込み地業は今回明確に確認できなかったものの、周囲の層位との関係、さらには礫石の状態から何らかの施設があった可能性も強く、この位置に金堂を推定することはあながち否定はできないことと思われた。

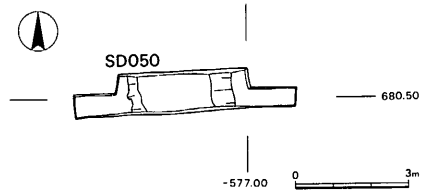
また、南側に設定したBトレンチでは中門・回廊等の確認を行ったが、北端部で一部掘り込みを確認しただけで明確な遺構はなかった。(この掘り込みは後の調査で東西溝であることが判明)

(4) 平成6年度の調査概要

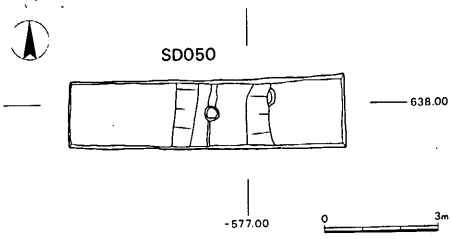
・調査地点　嘉穂郡筑穂町大字大分字塔床729番、1051番、1052番-1

・調査期間　平成7年2月17日～
平成7年3月31日

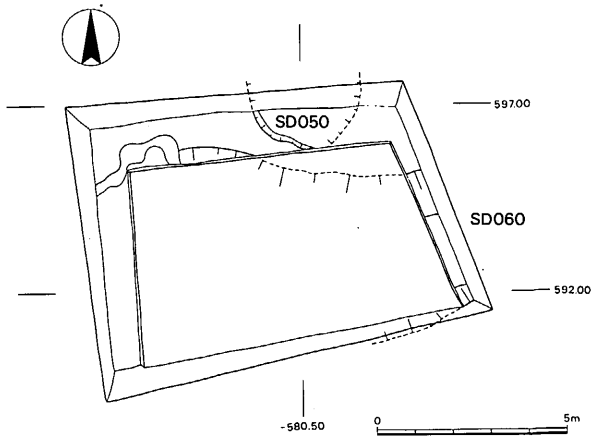
・調査面積　約320㎡



第8図　Nトレンチ遺構配置図



第9図　Lトレンチ遺構配置図

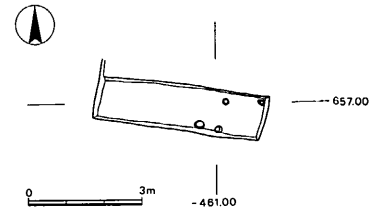


第10図　Mトレンチ遺構配置図

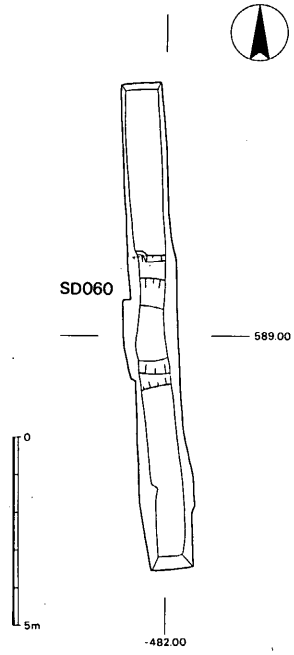
平成６年度は、伽藍配置を「法隆寺式」・「四天王寺式」を想定し、講堂の位置及び規模の確認、金堂跡の南北幅確認のため、Ｅ（東西18m×幅３m）・Ｆ（南北35m×幅３m）・Ｄ（南北35m×幅３m、土壙部のみ幅５mに拡幅、柵部は0.75×２mのトレンチ）の各トレンチを設定し調査した。

その結果、金堂跡及び講堂跡等の明確な遺構は確認できなかったが、北方寺域推定線付近で柵状遺構（SA030）、その外側の北方から鋳造関連遺構（SX035）、その他瓦溜り（SK025）等を検出した。

このうち、瓦溜り（SK025）からは、９世紀前半代の多量の瓦片や形の歪んだ軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦等や多量の土器片が出土し、大分廃寺の存続時期に関する貴重な資料を得ることができた。また、東側に設定したＥトレンチでは、礫石群を検出し、Ａトレンチ検出の礫石群の状況と考え合わせると自然堆積である可能性が強くなった。



第11図　Ｋトレンチ遺構配置図



第12図　Ｏトレンチ遺構配置図

（５）平成７年度の調査概要

・調査地点　嘉穂郡筑穂町大字大分字塔床720番、712番－２、729番、1052番－２、1052番－３

・調査期間　平成７年10月23日～平成８年３月31日

・調査面積　約550m²

平成７年度は北限の施設と考えられる柵状施設の確認と法起寺式（観世音寺式）を想定した時の金堂の再確認を主な目的として、Ｈ（南北24m×幅３m）・Ｉ（東西13m×幅３m）・Ｊ（南北53m×幅３m、一部２m～6.5m）の各トレンチを設定し調査した。調査の結果、Ｈトレンチで南北方向の溝を検出した。これがさらに南方に延長するのかどうかをみるためＬトレンチ（東西７m×幅２m）を設定し調査した。その結果、溝はほぼ南北方向に延びていることが確認された。金堂の位置を確認するためにＪトレンチを設定したが、金堂についてはその痕跡を確認することが出来なかった。しかしながら、Ｊトレンチのほぼ中央付近で東西方向の溝１条を検出した。５年度にＢトレンチ北端部で溝の一部を確認しているが、この溝はＪトレンチで検出した溝と連続するものであることが確認された。以上の結果から西側および南側で南北方向と東西方向の溝が確認されたことで、これが寺域と関連するものであることがほぼ確定的となった。しかしながら、大分廃寺調査指導委員会と福岡県教育庁文化課との協議において、まだ調査として不十分ではないかとの意見が出されたため、Ｈトレンチの北方にＮトレンチ（東西６m×幅0.5m、一部１m）、南北溝と東西溝との交点推定位置にＭトレンチ（南北10.5m×東西８m）、さらに東西方向の溝の東端部を確認するためＯトレンチ（南北13m×幅１m）を設定し調査した。調査の結果、各々のトレンチで延長部および交差する溝を確認することが出来た。

2．調査日誌

平成3年度調査（H4．3．2～3.31）

3．2～12　発掘調査開始。現状写真撮影を行う。塔跡のⅠ区、Ⅱ区の表土除去作業。
環境整理を行う。

3.13～23　階段部分と基壇の範囲を確認のため東側の畑地にトレンチを設定し調査する。
調査の結果、東側柱心より3mの所まで基壇が残っていることを確認。

3.24　筑穂町文化財保護審議会委員の視察。

3.25～30　実測および写真撮影を行う。

3.31　器材の撤収、発掘調査終了。

平成4年度調査（H4.10.15～11.25）

10.15～21　発掘調査開始。塔跡の西南区、西北区の表土除去作業。

10.22～11. 3　南側の階段部分の確認のためトレンチを設定し調査する。

11. 4～5　宝篋印塔の移動、写真撮影、出土した一字一石経の洗浄。

11.11～18　写真撮影と実測。

11.19　大分廃寺調査指導委員会を開催する。

11.25　器材の撤収、発掘調査終了。

平成5年度調査（H6．2．7～3.31）

2．7～22　発掘調査開始。A・B・Cの各トレンチを設定し調査する。
Aトレンチから礫層検出。

2.23～3.11　Aトレンチで検出した礫層の精査、B・Cトレンチにおける断ち割り調査。

3.15～25　A・B・Cの各トレンチの写真撮影と実測を行う。

3.25　筑穂町文化財保護審議会委員の視察。

3.26～30　Aトレンチの実測。

3.31　器材の撤収、発掘調査終了。

平成6年度調査（H7．2.17～3.31）

2.17～3．2　発掘調査開始。Dトレンチを設定し調査する。
鋳造関係の遺構を検出する。

3．6～8　瓦溜まり、柵状遺構を検出、拡張調査の後写真撮影をする。

3．9～14　Aトレンチ補足、E・Fトレンチを設定し調査。

3.15　大分廃寺調査指導委員会を開催する。

3.16～23　Aトレンチで検出した礫層の補足調査、Eトレンチで同様の礫層を検出。地山であることを確認。

3.27～30　A・D・E・F各トレンチの写真撮影と実測を行う。

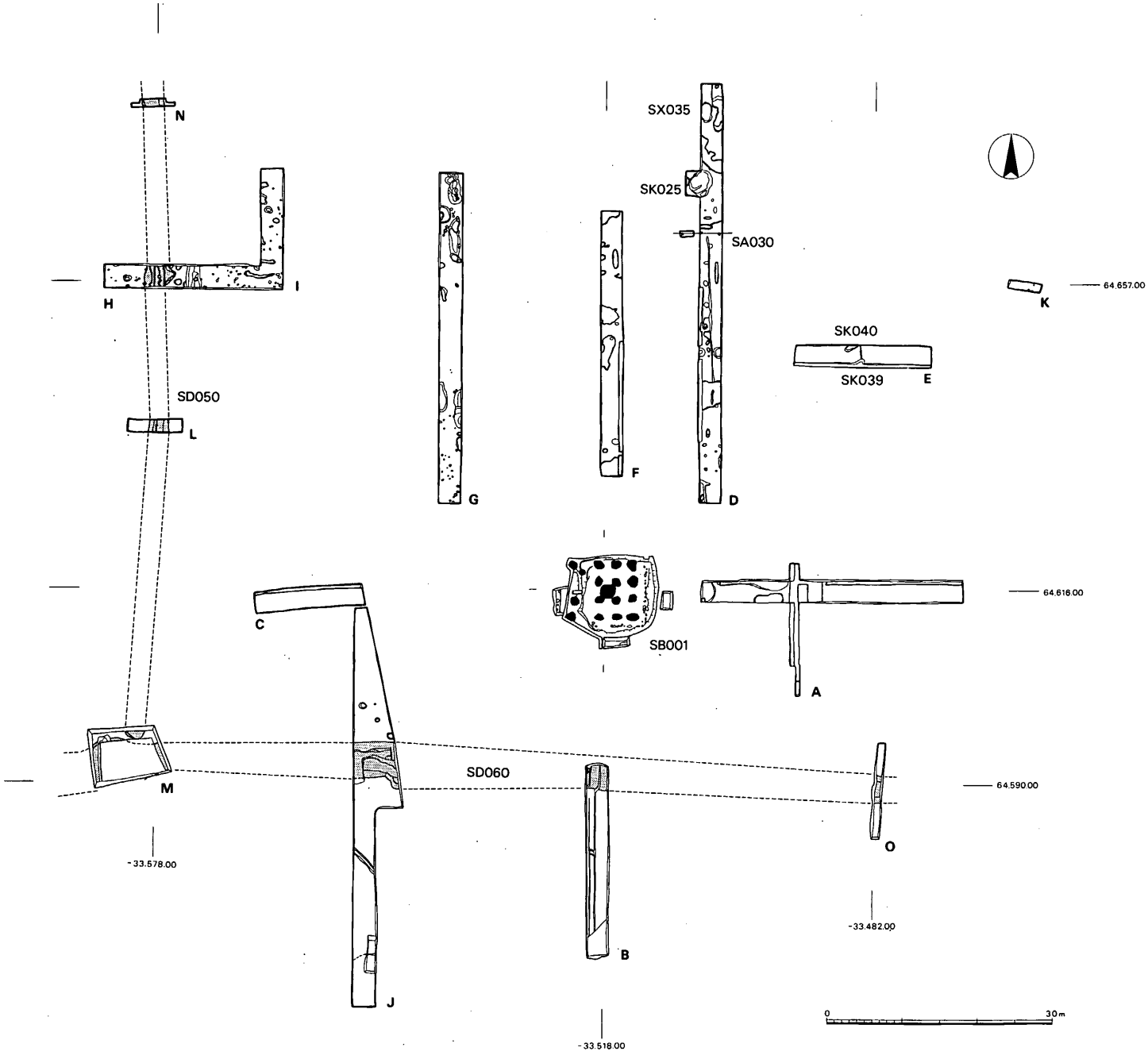
3.31　器材の撤収、発掘調査終了。

平成７年度調査（Ｈ７．10.23～Ｈ８．３．31）

10.23～31　発掘調査開始。Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｊ・Ｋ各トレンチの調査区を設定し調査する。
11. ２～26　各トレンチの調査を行う。
11.27～12. ７　各トレンチの写真撮影。
12.11　大分廃寺調査指導委員会を開催する。
12.18～３．13　Ｍ、Ｎ、Ｏトレンチを設定し調査する。
３．19～27　各トレンチの写真撮影と実測を行う。
３．31　器材の撤収、発掘調査終了。



瓦溜りSK025発掘作業風景



第13図　大分廃寺遺構配置図

Ⅳ 遺 構

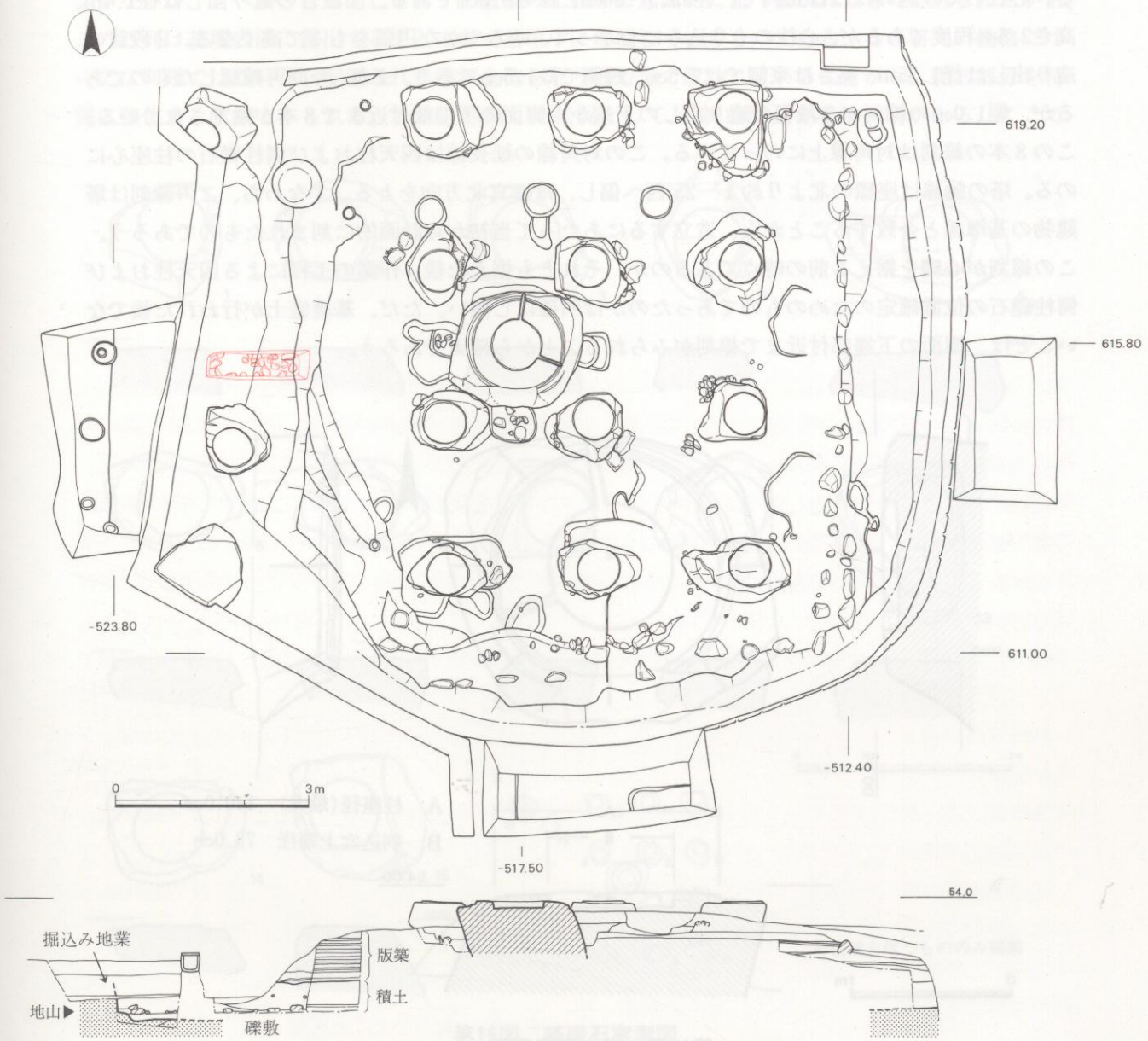
1．塔 跡

平成３年度に塔基壇の東半部について調査を実施した。そして、指定地外では塔基壇に隣接した東側部分にトレンチを設定し階段部の確認を目的として調査を行った。

平成４年度にはその西半部を、指定地外では西・南側の階段部を確認するためトレンチを設定し調査した。ここでは、この両年度で実施した調査結果を合わせ報告することとする。

（１）建 物（ＳＢ001）

現状では地表面で確認できる礎石は心礎を含め15個である。また、基壇の西斜面には礎石を石臼

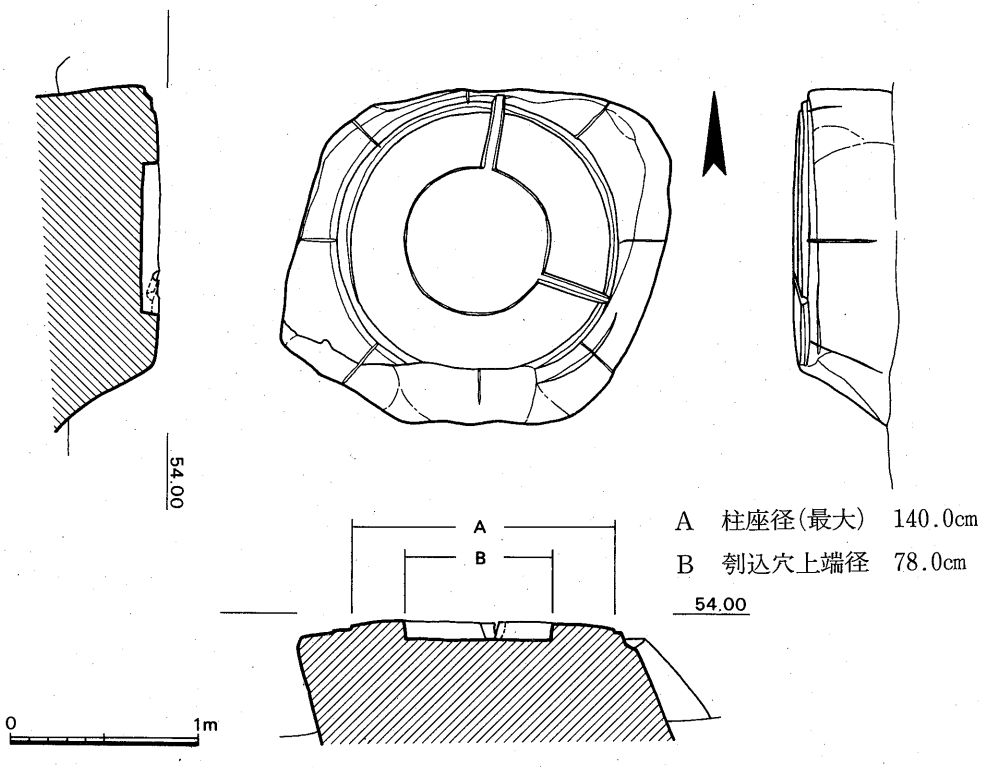


第14図 塔建物ＳＢ001遺構実測図・基壇断面図

として加工したといわれる石１個があり、これを含めると16個が確認できる。そして調査の結果、新たに礎石１個を検出したことにより、塔に使用された礎石は全て塔基壇の部分に存在することが確認された。しかしながら、そのうち動かないで原位置を保っている礎石は心礎を含めて13個である。すなわち、西側柱礎石４個が後世崩れ落ちた状態である。この13個の礎石は極めて保存状況が良好で、礎石柱座の上面もほぼ水平で、レベルも平均値から１cmの範囲の中での差しか認められない。このことは築造時において、いかに厳密に置かれたか、さらにその後、沈下が進行していないことの証明でもある。四天柱礎石および側柱礎石の柱座の径は60～65cmのほぼ正円に近いものであり、柱座の造り出しは1.0cm前後である。柱間は四天柱・側柱とも礎石の心心で2.35mで、建物の規模は梁行・桁行7.05mである。

（２）心礎

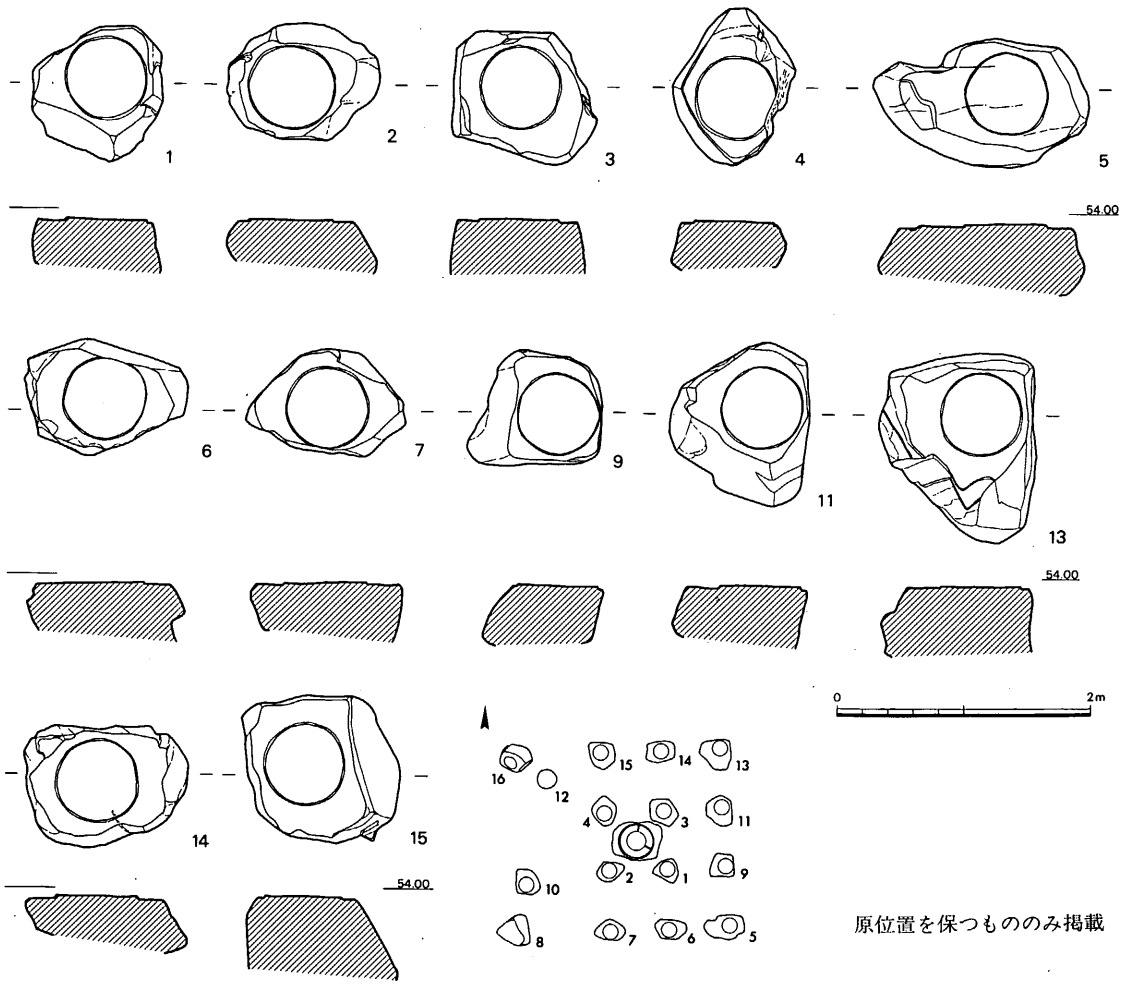
２段の造り出しを有し、心柱のくり込みから２本の排水溝を設ける非常に丁寧な造りのものである。心柱のくり込みはほぼ正円で、径75.5～80cm、深さ9.0cmである。１段目の造り出しは径1.4m、高さ2.5cm程度であるが、心柱のくり込みにむかって、ゆるやかな円弧をもって高くなる。２段目の造り出しは径1.55m、高さは東側では7.5cm、西側では1.5cmである。また、今回再確認したものであるが、幅1.0cmの線刻が２段目の造り出しの下端から側面の下端部付近まで８本が陰刻されている。この８本の線刻は対角線上にのっている。この対角線の延長線は四天柱および側柱礎石の柱座心にのる。塔の軸線は座標の北より約１°25′西へ偏し、ほぼ真北方向をとる。すなわち、この線刻は塔建物の基準線と合致することから、造立するにあたって当初から計画的に刻まれたものであろう。この線刻が心礎を据える前の時点であるのか、それとも据えた後、作業の工程による四天柱および側柱礎石の位置確定のためのものであったのかは明確にし難い。ただ、基壇盛土が行われた後でないことは、側面の下端部付近まで線刻がみられることから確実であろう。



第15図　塔心礎実測図

（3）基壇

塔の基壇については西側階段部の推定位置に設定したトレンチにより、地業の掘り込みを確認した。この掘り込み線をもとに、塔基壇を復原すると約12.75m方形の基壇規模が考えられる。ただ、この掘り込みは深さが僅か30cm位残っているだけで、必ずしも基壇の規模を示しているとは言い難いが、ほぼ近い数値とみてよかろう。掘り込みの底部から10cm上位部分に礫敷層があって、その上に小礫混じりの灰褐色粘質土の積み土が約50cm前後ある。この積み土は版築ではなく積み土であるが、小礫が混じる粘土質でかなり堅く締まっている。版築はこの層の上から始まる。版築は厚さ約80cmほどが残存している。したがって、残存する基壇の高さは掘り込み底から1.40mで、掘り込みが始まる面から1.10mである。礎石根石の検出面（この面まで撹乱を受け版築は残存しない）で、東側と南側で側柱の礎石心から約1.60mの位置で、大きさには大小あるが、ほぼ30cm前後の栗石を若干の間隔をおいて線状に並べたものが検出された。ただ、この栗石列は面を揃えるなどの考慮はなされていないが、レベルとして同じであり、版築の工程中に意識的に並べ置かれたものである。だから、この石列は基壇表面に露出することはなく基壇中に埋没しているものである。この石列の性格については明確ではないが、配置された礎石全体を取り囲む形で置かれていることから、礎石部分を特別に強化する工法とみられる。これと類似した状況として、「筑前国分寺塔跡」例がある。ここで



第16図　塔礎石実測図

は、礎石の根石の周囲を栗石で円く囲んで版築中に埋め込まれていた。

因みに、礎石の上面と掘り込み地業の掘り込み面までの高さは1.50m、版築が始まる線からの高さは1.20mである。

（4）基壇上の近世の遺構

基壇上には塔が廃絶した後、壇を利用して供養塔等を造立し、祀りの場として使用されている。現在、天明年間に建立された法篋印塔1基（図版32）と文化4年在銘の石製の石祠（石龕）1基（いずれも両者の銘文は風化が著しいため判読不可能である。銘文の判読は斉藤忠氏報文による）が壇の南辺中央付近にある。いずれも部分的に失われて完存していないが、現在でも信仰の対象となっている。宝篋印塔には後世（明治以降か）に刻まれた詩歌（漢詩）が部分的に読みとれるが全文は風化のため定かではない。

これに関連する遺構が検出されたので、ここで報告しておきたい。

〔一字一石経の埋納壙〕（図版32）

塔心礎の約60cm東側で一辺1.10mの正方形のプランを有し深さ40cmの一字一石経を埋納した土壙を検出した。一石経の量はかなりあり、今回はその一部を取り上げ、残りは原位置に戻し保存することとした。抽出した資料であるが、「法華経」を書写したものが含まれている。

現在、基壇上にある法篋印塔は当初はこの土壙上にあった可能性が考えられる。

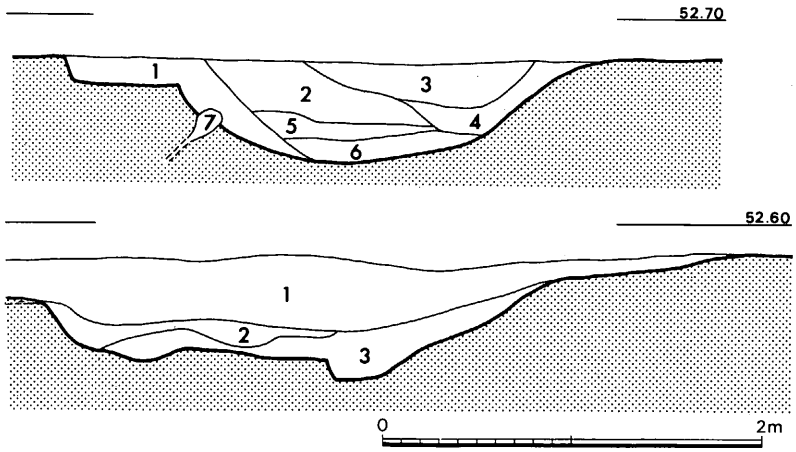
2．各トレンチ検出の遺構

（1）南北溝　（SD050）

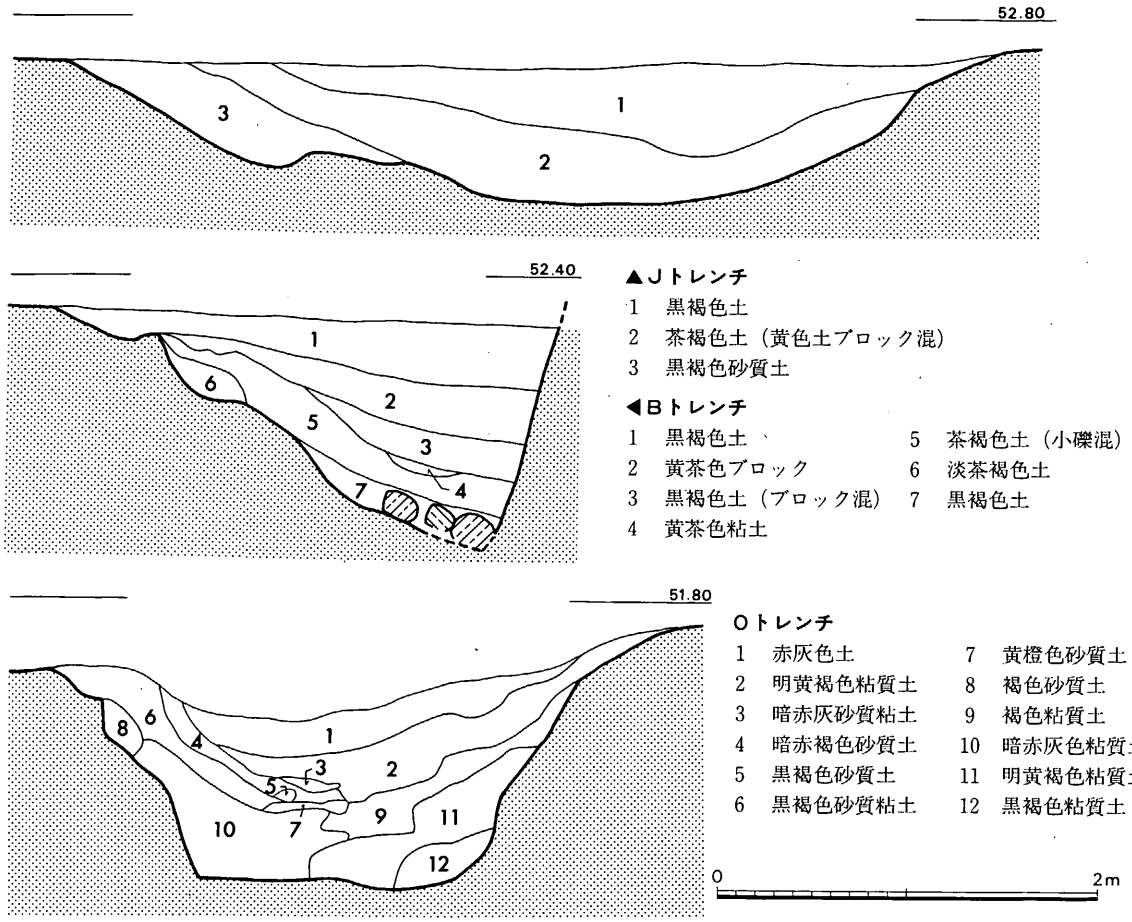
寺院の西側を限ると思われる南北方向の溝1条がある。N、H、L、Mの各トレンチで確認し、その線を結ぶとほぼ真南北の方位となり、推定伽藍の軸線とほぼ一致する。溝の幅は平均2.6mで深さは50cmである。しかし北端のNトレンチでは幅1.50mでやや狭くなり、深さは約15cmで浅くなる。溝の底は南端と北端では約10cmの高低差があり、北方へ向かって流路があり、北方の一段下がった部分へ排水する。溝底に近いところでは砂礫層となり、また底面は抉られたように凸凹になっており、流水のあとがみられる。出土遺物は瓦・土器類など比較的多く、年代的には9世紀前半代のものが中心であるが、7世紀代～11世紀前半代のものを含んでおり、かなり長い期間存続していたと思われる。埋没年代は11世紀前半代で、寺の廃絶後も何らかの形で残っていたようである。総延長は約90mである。

（2）東西溝（SD060）

東西方向の溝1条を検出した。この溝はB、J、Oのトレンチで検出し、溝肩の線を結ぶと、多少の広狭はあるが、推定伽藍の軸線に直交す



第17図　溝SD050土層図



▲Jトレンチ
1 黒褐色土
2 茶褐色土（黄色土ブロック混）
3 黒褐色砂質土

◀Bトレンチ
1 黒褐色土
2 黄茶色ブロック
3 黒褐色土（ブロック混）
4 黄茶色粘土
5 茶褐色土（小礫混）
6 淡茶褐色土
7 黒褐色土

Oトレンチ
1 赤灰色土
2 明黄褐色粘質土
3 暗赤灰砂質粘土
4 暗赤褐色砂質土
5 黒褐色砂質土
6 黒褐色砂質粘土
7 黄橙色砂質土
8 褐色砂質土
9 褐色粘質土
10 暗赤灰色粘質土
11 明黄褐色粘質土
12 黒褐色粘質土

第18図　溝ＳＤ060土層図

るほぼ真東西方向の溝になる。幅4.00～4.50m、深さ30～60cmであり、東端に設定したOトレンチで溝の幅は3.00mと狭くなり、深さも1.30mと深くなる。西端のMトレンチの溝底とOトレンチの溝底の高低差は約1.60mあり、西方から東方へ流路をとる溝である。また、Mトレンチでの溝の状況は南北溝ＳＤ050と直角に折れ曲がって連続するのではなく、ＳＤ060はさらに西方に延びており、溝の幅からすると、西から東へ排水する重要な溝と思われる。この溝は出土遺物から、当廃寺の創建の時期とほぼ一致した年代に存在し、推定復原伽藍の中門のすぐ前面に位置することになる。通常では考えられない状況であり、当時においては避けられない地形的制約があったと考えられる。出土遺物からみると、南北溝（ＳＤ050）よりもかなり早い時期に廃絶したとみられる（おそくとも８世紀後半代）。

（３）瓦溜り（ＳＫ025・039・040）

Ｄトレンチで１基とＥトレンチで２基を検出した。

ＳＫ025　Ｄトレンチで検出した瓦溜りである。平面形は円形に近く、長径3.60m×短径3.00m前後のなだらかな凹みである。土壙中には多量の瓦が投棄されていた。瓦は全て焼きヒズミがあり、また数枚が溶着していたりしており、瓦窯から不良品を集めて一括して捨てたような状況である。このような不良品を窯で廃棄処分しないで、供給先で処分した理由については明らかでないが、当時の生産体制の一端を知る上でも貴重な資料といえる。これらの瓦は、文様・形態的に同一時期のもので、同じ窯で焼かれたものである。ここからは、土器片も出土しており、それからすると９世

紀前半代のものと考えられる。

ＳＫ039　Ｅトレンチ検出の瓦溜りである。平面形は長円形を呈する不整形の土壙で、半分程を検出した。深さ60cmのものである。層位と埋土からみて新期のものと考えられた。

ＳＫ040　Ｅトレンチ検出でＳＫ039と接する位置で検出した。やはりＳＫ039と同じ長円形の不整形を呈し、検出の状況や埋土の状況などをみると、両者は類似している。

（４）柵状遺構（ＳＡ030）

Ｄトレンチの北辺部で東西方向に並ぶ柱穴３個を検出した。これが、さらに西側へ延びるかどうかについては、西側に設定したＦトレンチで柱穴を検出出来なかったことから柵とは確定できなかったが、掘形がしっかりしていること、いずれも径30cmで揃っていること、そして深さは23cm、33.5cmと不揃いであるが、柱間距離は2.50m、2.45mでほぼ等間であること、削平されている可能性もあり得ること、などを考慮すると２間のみの検出であるが柵状遺構として報告した。また、これの北側には瓦溜りや鋳造遺構があることから、部分的に遮蔽するものであったとも考えられる。いずれにしても、この柵状遺構の内側と外側とは遺構の状況が異なる点が注意される。

（５）鋳造関連遺構（ＳＸ035）

Ｄトレンチの北端部で鋳造に関連すると思われる浅い土壙を伴う遺構を検出した。残存する遺構からは明確に鋳造施設を認め得る痕跡はみられなかったが、周辺に炭と焼土が混じった浅い窪みや、炉壁の残片や銅滓等が散らばっており、このあたりで鋳造工房が営まれたようである。確実に鋳型と言えるものは出土しなかったが、炉壁片よりも粒子の細かい胎土のものがあり、鋳型に使われた中真土・粗真土にあたるものが出土している。この遺構の年代については必ずしも明確でないが、下限の時期を９世紀前半代とすることができる。

（６）不明遺構（ＳＸ015・020・026・027）

ＳＸ015　Ａトレンチで検出した径５m前後、深さ50cm前後の長円形の土壙状の落ち込みである。全体の約半分を検出したが大部分は発掘区外にのびる。黒褐色の埋土で土器と瓦の細片が若干出土した。

ＳＸ020　Ａトレンチの東端部付近で検出した径45cm、深さ20cmの小土壙で、土壙中には灰が混入していた。わずかの土器の細片が出土した。

ＳＸ026　Ｄトレンチ南端近くで検出した幅20cm、深さ２cmの浅く細い溝状の落ちである。上層の撹乱によるものか。

ＳＸ027　Ｄトレンチの鋳造関連の遺構の南側で検出した不整形の深さ２cmの浅い窪み状のものである。黒褐色の埋土で若干の土器の細片が出土した。

V 遺 物

1．瓦 類

5年間の調査で最も多量に出土したのは瓦類である。軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、丸瓦片、平瓦片等の出土があった。瓦類が最も集中して出土したのは塔跡地区であるが、この他でも平成6年度調査のDトレンチSK025、平成7年度調査のHトレンチなどで点数のうえで多い出土量が認められた。特にSK025については、瓦の質量ともに9世紀前半の資料としてまとまりをもち注目された。

残念なことには、軒瓦類などの優品は今回の発掘調査では小破片が多く、瓦当文様や顎面の文様の全貌を知り得ないので、大分八幡宮所蔵資料や養源寺所蔵資料、九州大学所蔵資料、畠中大三郎氏所蔵資料、塚本権一氏所蔵資料(現在、筑穂町所蔵)、穂波町教育委員会所蔵資料、筑穂町教育委員会所蔵資料、行橋市教育委員会所蔵資料、奈良国立博物館所蔵資料（九州歴史資料館借用資料)、九州歴史資料館所蔵資料などからその復原に努めるとともに、大分廃寺出土瓦の主要なものについては巻末に収録させて頂くこととした。以下、順次報告したい。

軒丸瓦（第19・20図、図版15・16）

今回の発掘調査では4型式6種類の軒丸瓦が出土した。これに、『九州古瓦図録』収録の九州大学所蔵の百済系単弁瓦を加えることとする。

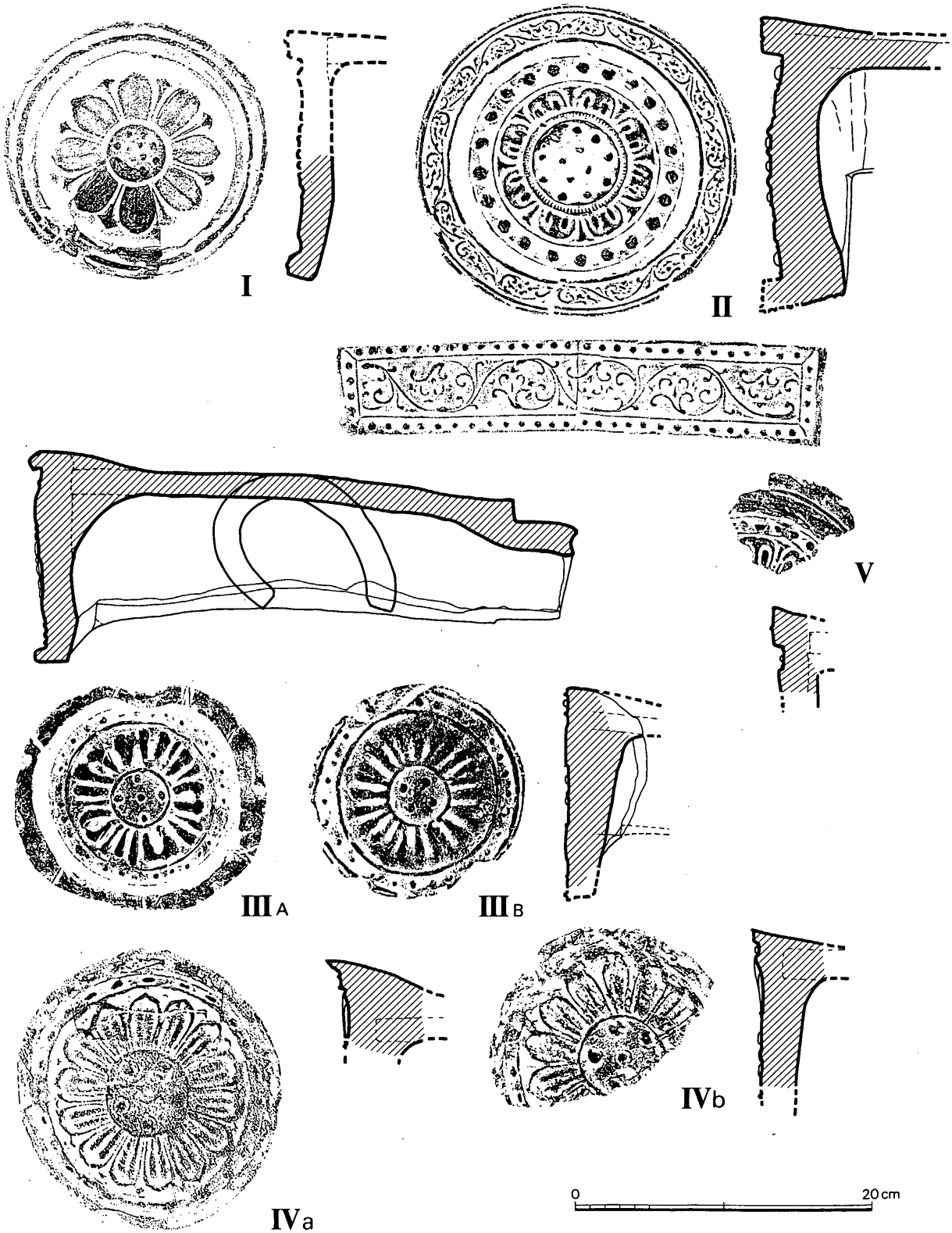
Ⅰ類 今回の発掘調査では出土していない。この軒丸瓦は天台寺跡出土軒丸瓦Ⅰ類とされたものと同笵と想定される。蓮弁は浅い匙面をなし、中央部に稜線がはしる。弁端は尖り気味。外縁は直立縁で圏線がめぐる。(図版26 右上) 天台寺跡出土例では丸瓦部凸面に格子目叩打具痕と凹面に竹状模骨痕を残すものがある。

Ⅱ類 天台寺跡Ⅴ類[註1]として報告されている複弁八弁蓮華文軒丸瓦で、いわゆる新羅系軒丸瓦である。中房には4＋9の蓮子[註2]を配し、周囲に芯帯をめぐらしている。複弁八弁蓮華文は短くずんぐりとしている。外区内縁には大粒の珠文22子が配置される。外区外縁は直立縁で、顎面に配置される偏行忍冬唐草文が小型化され、右廻りに18回の反転をしめす。下顎面は幅広く、左から右に5回反転する偏行忍冬唐草文が珠文縁にかこまれる。珠文縁の珠文数は左右脇区で4子ずつ、瓦当面側で29子、裏面側で27子が配置されている。瓦当はその破片から見ると、上・下面とも枷枠型を使用したもので、下面の枷枠型に偏行唐草文が配置されている。瓦当の製作にあたっては、直立する外縁部分から粘土を指で強く押し込んでいて、その指痕が剝がれ目となって残っている例がある。丸瓦には、特に接合のために加工された痕はない。丸瓦の接合位置は比較的高い。

出土点数のうえでは、55点（軒丸瓦総量の67%）と最も多い[註3]。出土状況からは、塔跡で25点（Ⅱ類の45%)、Hトレンチで33点（同41%）であるのが注目される。ただ、いずれも小破片であり、一個体分になおして考えれば、塔跡で10点ほど、Hトレンチでは2～3個体分にとどまるものと考えられる。

ⅢA類 中房には1＋4の蓮子を配置する。弁区では、桜弁状に先端がくぼみをみせる五弁の間に1～3のくさび状の間弁（間弁として数えたものの中には、蓮弁状のものもある。）を配置する。外区内縁には界線に囲まれた32子の珠文が配置され、外区外縁は直立縁で素文である。なお、外区

外縁は、その外周をヘラ削りされるため、外縁幅は一定でない。ＳＫ025から一括投棄された状況で８点の出土があったがこれについては、別途記述したい。この他では塔跡、Ｅトレンチで４点ずつの出土があった。ＳＫ025の年代観から、塔はすくなくとも９世紀前半までは存在し、ⅢＡ類はその

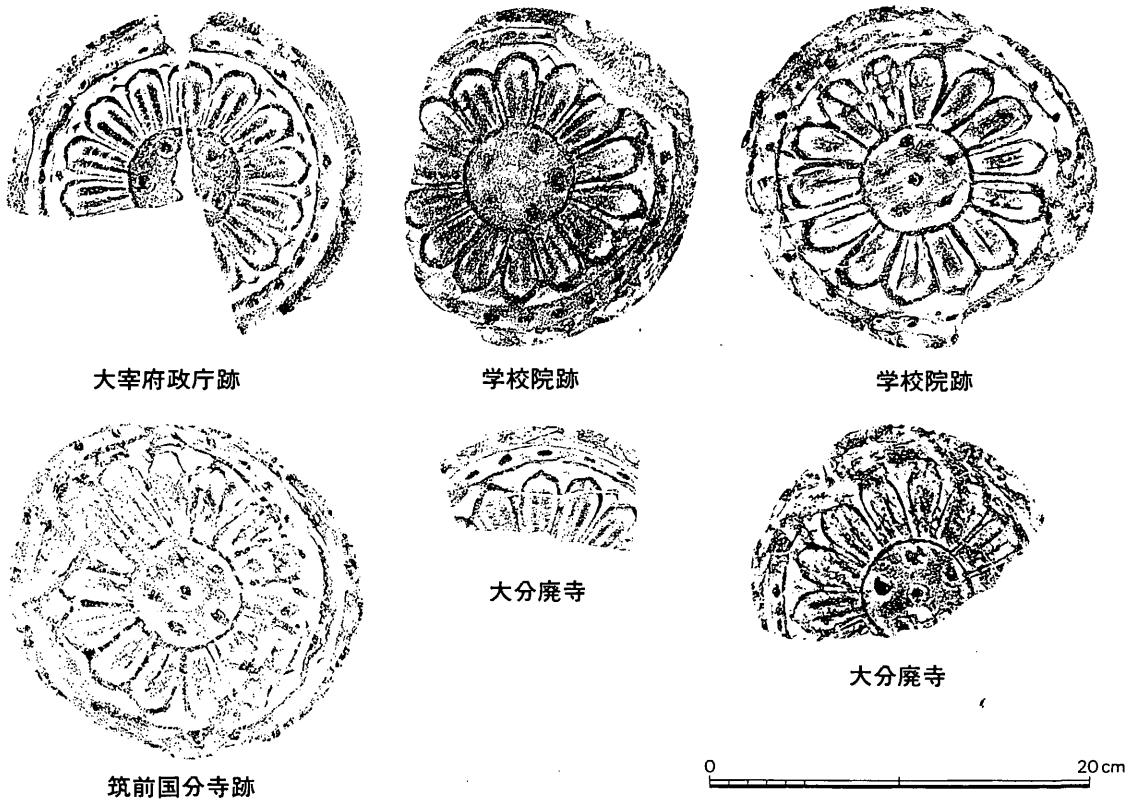


第19図　大分廃寺出土軒丸瓦

差し替え瓦であった可能性が強い。

ⅢB類　A類と文様構成の点で同じ型式と考えた。中房の蓮子は１＋４とA類と同じであるが、外側の４子がA類のそれより内側に寄っている。弁区の蓮弁は、A類のそれが一本ずつ切り離されたかのように見え、くさび状の弁23枚が配置された蓮華文軒丸瓦ともとれる。外区の珠文は26子となる。外区外縁は、A類と異なり、珠文帯の外の界線外は低い圏線状の縁となる。A類に比較して全体に偏平な瓦当である。丸瓦の接合方法もA類より深く、この点でも異なる。出土状況は、塔跡、Eトレンチ、Lトレンチからそれぞれ１点ずつ出土している。

Ⅳ類　単弁十四弁蓮華文軒丸瓦である。笵の彫り直しから、a、bの２種がある。中房は弁区よりやや高く、１＋５の蓮子を配置する。特徴は蓮弁にあって、先端が尖り、内側に２枚の子葉を配置する。間弁は山型で、aでは蓮弁の先端と先端の間に配置されているが、bでは部分的に残るものの大半は省略されている。外区内縁は、幅が狭く弁区より一段高い。その中に杏仁様の珠文24子を置く。珠文は、aでは楕円状の形状であるが、bでは円形に近い。珠文帯の外側は素文の外縁がある。外縁は、aでは先端が尖り、bでは平坦に変化する。以上の状況から、bはaの笵の彫り直しと考えられる。この蓮華文軒丸瓦は、大宰府跡でも出土している。第20図に、大宰府跡、学校院跡、筑前国分寺跡の出土例を参考として掲載したが、笵型は２～３回にわたって、この順序で彫り直されている。大分廃寺出土例は、このうち、大宰府政庁跡出土例と学校院跡出土例にそれぞれa、bを置けるものと考える。大宰府の工房で製作された軒丸瓦が大分廃寺に運ばれた例と考えてよいだろう。出土状況は、EトレンチSK039で５点、Fトレンチ１点、Hトレンチ２点と塔跡北側の調



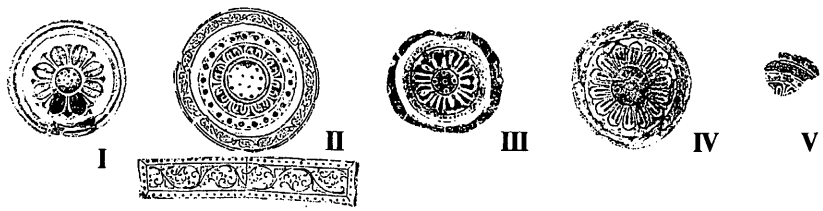
第20図　大分廃寺出土軒丸瓦Ⅳ類と大宰府跡出土同笵例

査区からであった。

V類　複弁蓮華文軒丸瓦である。小破片1点が塔跡から出土したが、新出資料として注目される。外区内縁に珠文を、外縁は直立縁で一段高く、一条の圏線を配置している。

	塔跡	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	合計(%)
I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0 (0)
II	25	2	0	0	0	0	1	1	23	1	2	0	0	0	0	0	55 (67)
III	1	0	0	0	13	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	16 (20)
IV	0	0	0	0	0	5	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	8 (10)
V	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1 (1)
不明	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2 (2)
合計	27	2	0	0	13	6	2	1	27	1	2	0	1	0	0	0	82 (100)

第1表　軒丸瓦出土点数表



軒平瓦（第21・22・23図、図版17・18）

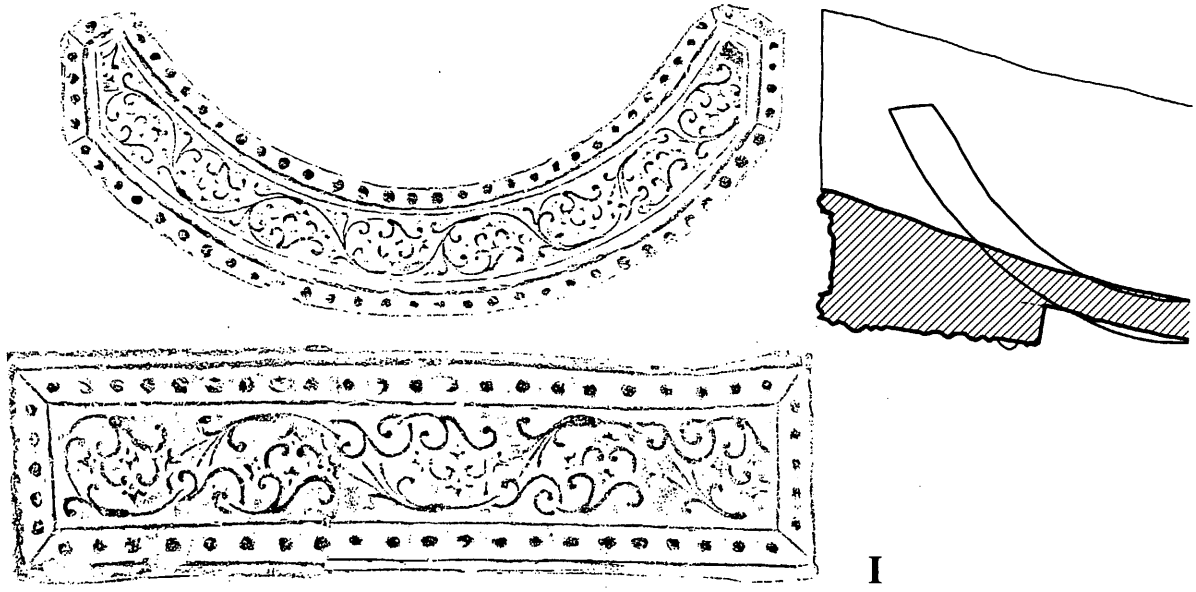
大分廃寺からは天台寺跡、垂水廃寺、椿市廃寺と同笵関係にある3種の新羅系軒平瓦が出土していることが著名であるが、これを含めて6型式の軒平瓦の出土があった。

I類　天台寺跡IIIa類[註4]がこれにあたる。作図にあたっては、奈良国立博物館所蔵資料をベースに筑穂町公民館資料（旧梅沢啓孝氏所蔵資料）を利用した。瓦当面の文様は、向かって右から左に8回反転する偏行忍冬唐草文を一条の界線で囲み、その外側に一段高い外区を形作って珠文帯としている。連珠文は界線によって囲まれ、さらに上下脇区それぞれに仕切られて6間に分割されている。上外区29子、下外区30子、脇区で2＋4子が配置されている。

顎面の文様区は段顎の形成部分全面に配置される。文様は右から左に偏行する忍冬唐草文を4転半内区に配置し、周囲を珠文帯が囲む。珠文数は、瓦当面側外区22子、顎側21子、脇区に5子ずつが置かれている。瓦当と顎面の偏行忍冬唐草文を比較すると顎面の文様では、反転を繰り返す主幹から左右に巻き込む葉の表現、さらにそこから3枝が派生する表現、つぼみをつける3枝部の表現など、瓦当面の唐草文の表現よりも繊細である。

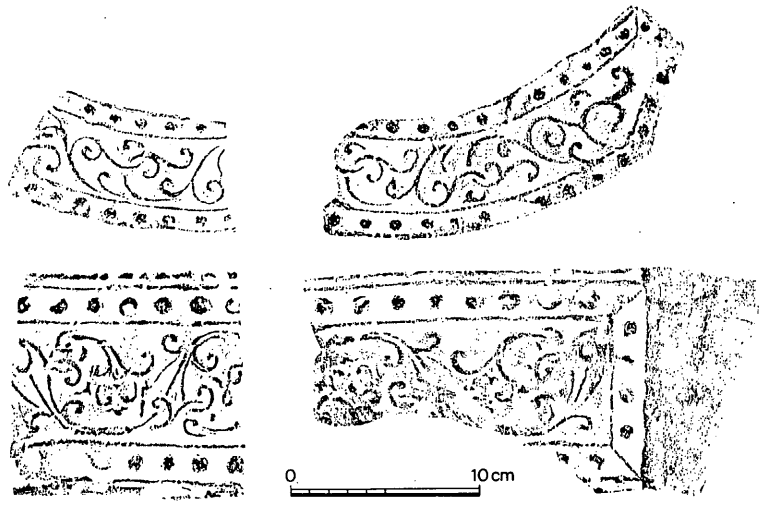
今回の調査では、塔跡、Gトレンチから小破片が1点ずつ出土している。なお、I、II類の判別が出来ない資料2点がLトレンチから出土している。

II類　椿市廃寺出土軒平瓦II類[註5]と同笵である。ただ、椿市廃寺出土資料にも左半部の資料がなく、瓦当文様、顎部の文様とも全体を知ることはできていない。瓦当面の文様は、I類の偏行忍冬唐草



第21図　大分廃寺出土軒平瓦（１）

文の便化が進み、花のつぼみや子葉の写実的部分が除かれたものと考えられる。従って、その文様は偏行忍冬唐草文の一種と認めておくべきものと思う。拓本の復原でも右から左へ3回反転分までを確かめ得たにすぎない。外区の珠文帯はⅠ類と異なり、内区唐草文と同一平面に配置されている。上下の外区に配置された珠文数は確定出来ないが、脇区では2＋3と下脇区の珠文数がⅠ類よりも一つ少ない。顎部の偏行忍冬唐草文は、Ⅰ類顎部の文様に近いが、若干便化された部分がある。



第22図　大分廃寺出土軒平瓦Ⅱ類と椿市廃寺出土同笵例

Ⅱ類の顎部の偏行忍冬唐草文は、Ⅰ類とは逆に左から右へ反転している。また、脇区の珠文数も一つ減じて4子となっている。

今回の発掘調査では、塔跡で4点、Dトレンチで1点の出土があった。5点とも破片資料である。

なお、瓦当と平瓦の剝離部分からの判定ではあるが、椿市廃寺例には縄目の圧痕が、大分廃寺例では格子目の圧痕が残る。[註6]

Ⅲ類　垂水廃寺出土軒平瓦Ⅱ類と同笵である。たまたま、出土点数が多かったこと、既出土資料の大きめの破片資料が存在したことから、大分廃寺出土資料だけで作図出来た。[註7]なお、最大の破片を実測し、やや濃い拓本として重ねたが、これは大分八幡宮所蔵資料である。

瓦当面の文様は、左から右に6回反転する偏行唐草文である。老司Ⅱ式偏行唐草文を左右逆転させた文様にやや似ている。この偏行唐草文外周をやや高い幅狭の素文縁で囲んでいる。顎面の文様は幅19cmを越すもので、一段高く作りだされた下辺の珠文帯が段顎を形成しているかに見える。内区には二つの宝相華文と外区界線にそわせて半截、4分截された覗華文を配置している。外区珠文帯のうち瓦当縁および脇区珠文帯は内区文様と同一平面に配置されている。珠文は瓦当側・顎部側で16子ずつ、脇区には7子ずつある。

今回の調査では、33点（51%）と最も多く出土している。このうち、27点が塔跡からである。この他では、Aトレンチで4点、D、Eトレンチで1点ずつ出土している。

今回出土の軒平瓦Ⅲ類の平瓦部分では、叩打具の痕は擦り消されたようではっきりとしたものはない。垂水廃寺出土例の中には、正格子文、平行線文の叩打具痕が平瓦部に残っているものがある。[註8]

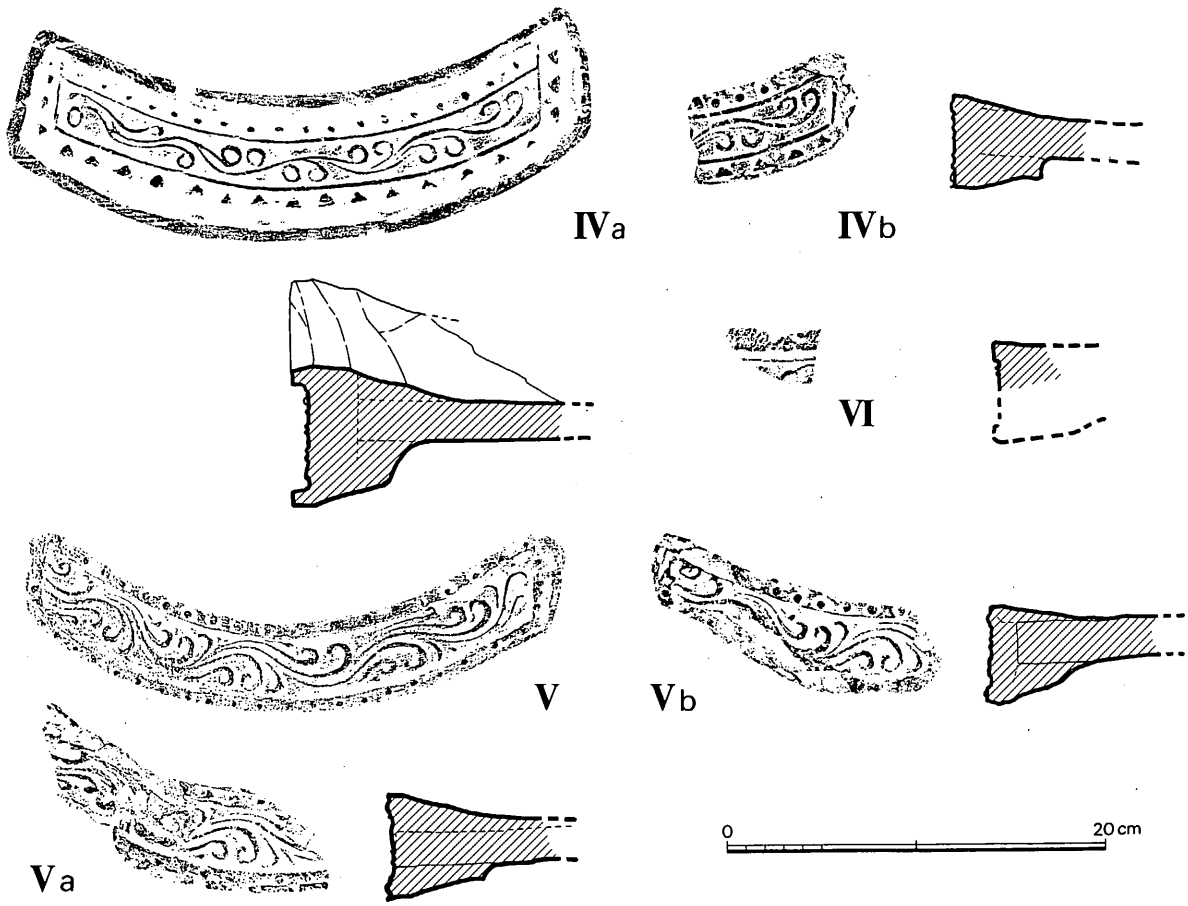
Ⅳ類　大宰府跡から出土する老司式軒平瓦の影響下で成立した偏行唐草文軒平瓦である。ただ、唐草文が左から右に反転すること、脇区と下外区に配置された凸鋸歯文が内側を向いている点が異なっている。内区の偏行唐草文は6回反転するが、その左端で唐草の巻き込みが反対になった部分がある。内外区の間には界線が配置されるが、上外区では、脇区から上端まで界線が延びて、珠文

帯と凸鋸歯文帯を分けている。上外区の珠文数18子、右脇区の鋸歯文３、左脇区では４、下外区では15が配置される。なお、Ⅳ類について外区外縁および彫りの深浅により、ａとｂとの２種が認められる。外区外縁は、ａでは外区内縁部から一段高い素文縁を形成するが、ｂでは珠文帯、鋸歯文帯の外側には外区外縁がない。また、彫りについてはｂが浅い。ａとｂとは笵の彫りなおしによるものとは考えにくく、ａの外区外縁内側に瓦笵の端部と見られるものがあることから、ｂの笵はａの外区外縁の立ち上がり部を削り取っただけとも考えられる。

Ⅳ類は、今回の調査で17点（27％）出土した。このうち、８点は軒丸瓦ⅢＡ類とともにＳＫ025で出土している。すべてａである。このＳＫ025出土瓦については、項を改めて記述する。ａは塔跡で２点、Ｅトレンチで４点が出土し、ｂは塔跡で２点、Ｅトレンチで１点が出土している。

Ｖ類　内区では左から右へ偏行反転する唐草文を配置し、内区よりやや高い外区内縁と、さらに一段高い素文縁を外区外縁とするものａと、外区外縁の削りとられたものｂとがある。

この軒平瓦は、大宰府跡でも出土している。大宰府跡出土資料についてはいまだ十分な分析を行っていないが、ａ、ｂ両者とも出土している。



第23図　大分廃寺出土軒平瓦（２）

大宰府跡出土資料によって瓦当文様の欠を補えば、内区に6回反転する偏行唐草文を配置し、さらに右端には小さい反転唐草文をおく。外区内縁の珠文は小さく、上外区で19子、下外区で21子、脇区3子ずつが配置されている。外区外縁が残る大宰府跡出土資料で0.6cmと幅広いものが残っている。

今回の調査では、aが塔跡とE・Hトレンチで、bがFトレンチでそれぞれ1点ずつ出土している。

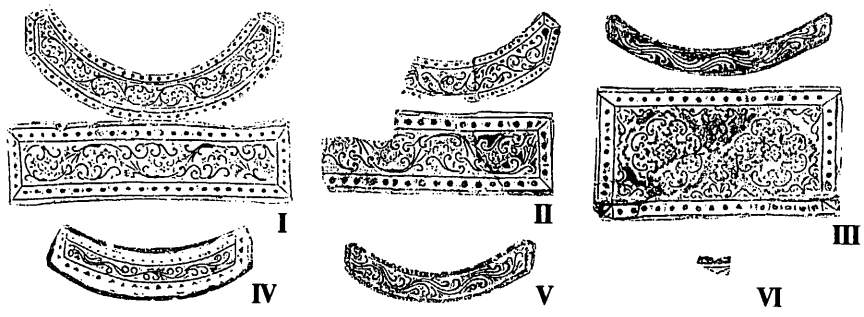
軒丸瓦IV類とともに、大宰府の工房で製作された瓦が搬入されたものと考える。

VI類　内区の一部と内外区の界線、やや幅広く一段高い上外区素文縁の一部の小破片1点が塔跡から出土した。瓦当文様の部分資料であるが、新出資料である。今後の資料の増加を俟ちたい。

以上、軒丸瓦、軒平瓦の文様構成や出土状況について報告してきたが、軒瓦の出土点数は第1・2表のとおりである。しかし、大型の新羅系古瓦の出土状況は、小破片で1.5cm程度のものから10.0

	塔跡	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	合計 (%)
I	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2 (3)
II	3	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4 (6)
III	27	4	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	33 (51)
IV	4	0	0	0	8	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	17 (27)
V	1	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	4 (6)
VI	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1 (2)
不明	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	3 (5)
合計	37	4	0	0	10	8	1	1	1	0	0	0	2	0	0	0	64 (100)

第2表　軒平瓦出土点数表



cmを越えるものまでそれぞれ1点と数えざるを得ない状況もあって正確にその頻度を物語るものではない。

しかし、出土瓦全体のなかに占める数字は、それぞれの軒瓦の組み合わせを推定させる。すなわち、軒丸瓦II類と軒平瓦III類とは出土点数のうえで最も多く、創建期の軒瓦セットとしたい。ただ、軒丸瓦II類が55点（67%）に対して軒平瓦III類は33点（51%）に留まっている。これに軒平瓦I・II類の出土量を加えるとき39点（60%）となることを考慮すれば、軒平瓦I、II、III類は創建期に同時に用いられた可能性も考えておくべきだろう。

軒丸瓦III類と軒平瓦IV類とは、SK025で一括投棄された状況からセットと考えてよい。

さらに、軒丸瓦IV類と軒平瓦V類はともに大宰府の工房で製作されたものが搬入されたものと考えた。これも一つの軒瓦のセットと考えてよいだろう。

また、小破片1点ずつの出土であり可能性の範囲に留まるが、軒丸瓦V類と軒平瓦VI類もセットと考えられよう。

以上のことから、

A　軒丸瓦II類と軒平瓦III類を主体とする組み合わせ

B　軒丸瓦III類と軒平瓦IV類の組み合わせ

C　軒丸瓦IV類と軒平瓦V類の組み合わせ

D　軒丸瓦V類と軒平瓦VI類の組み合わせ

の4つの組み合わせが想定される。

今回の発掘調査では、それぞれの軒瓦の年代観を明確にする資料は、Bの軒瓦セットを伴出したSK025出土の土器が9世紀前半代であることが唯一である。従って、従前からの年代観を記すにとどまるが、Aの組み合わせの年代観を7世紀末～8世紀初と考え、この瓦を使って大分廃寺は創建されたものとする。B・Cの組み合わせは年代的にもそう時期差のないものと考えられるから、9世紀前半までは寺院として存在し、B・Cの組み合わせは改修に用いられたものとしたい。

Dの軒瓦の組み合わせは、両方とも小破片であり軽々な推定は避けるべきであるが、軒丸瓦VI類の蓮弁が比較的整っていること、外区外縁の圏線をめぐらす手法は比較的古い文様構成であることを考えれば8世紀末ごろにおくことはできないだろうか。

文字瓦（第24図、図版18）

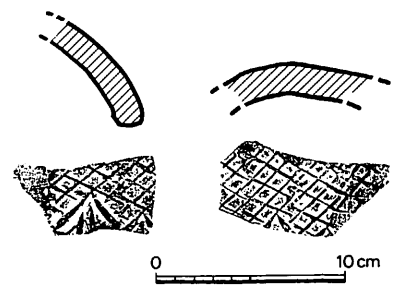
Hトレンチの調査で、叩打具に「介」の文字を刻んだ叩打具痕が残る丸瓦の小破片2片が出土している。この文字瓦は大宰府周辺の各地から出土するが、筑前国分寺跡で比較的多く出土している。[註9] 大宰府から搬入されたものだろう。

SK025出土瓦類（第25・26図、図版18・19・20）

この土壙には、軒丸瓦IIIA類13点、軒平瓦IVa類8点、鬼瓦片1点、丸瓦20点以上、平瓦10点以上の不良品が、土器類とともに一括投棄されていた。土壙から出土した瓦のなかには、正格子文、縄目文の叩打具痕を残す瓦片もあったが、これを除けばすべての軒瓦、丸瓦、平瓦は、共通の斜格子文を残していること、共通して窯内の熱で変形していること、なかには軒瓦と丸・平瓦が窯内の熱で癒着していることから、同一工房で製作され、同一の窯内で焼成されたものと想定できるものであった。さらに、これらの不良品が大分廃寺の寺域内から出土したことは、この瓦生産工房は、大分廃寺の極めて近くに存在したものとも考えられる。鬼瓦片も割れて大きく変形し、焼成や胎土なども共通しているから、同一工房で作成、焼成されたものである。

以下にSK025出土瓦について順次報告をするが、軒瓦については前項で文様や出土状況については記してきた。ここでは、特に製作手法の点での特徴を中心に報告する。

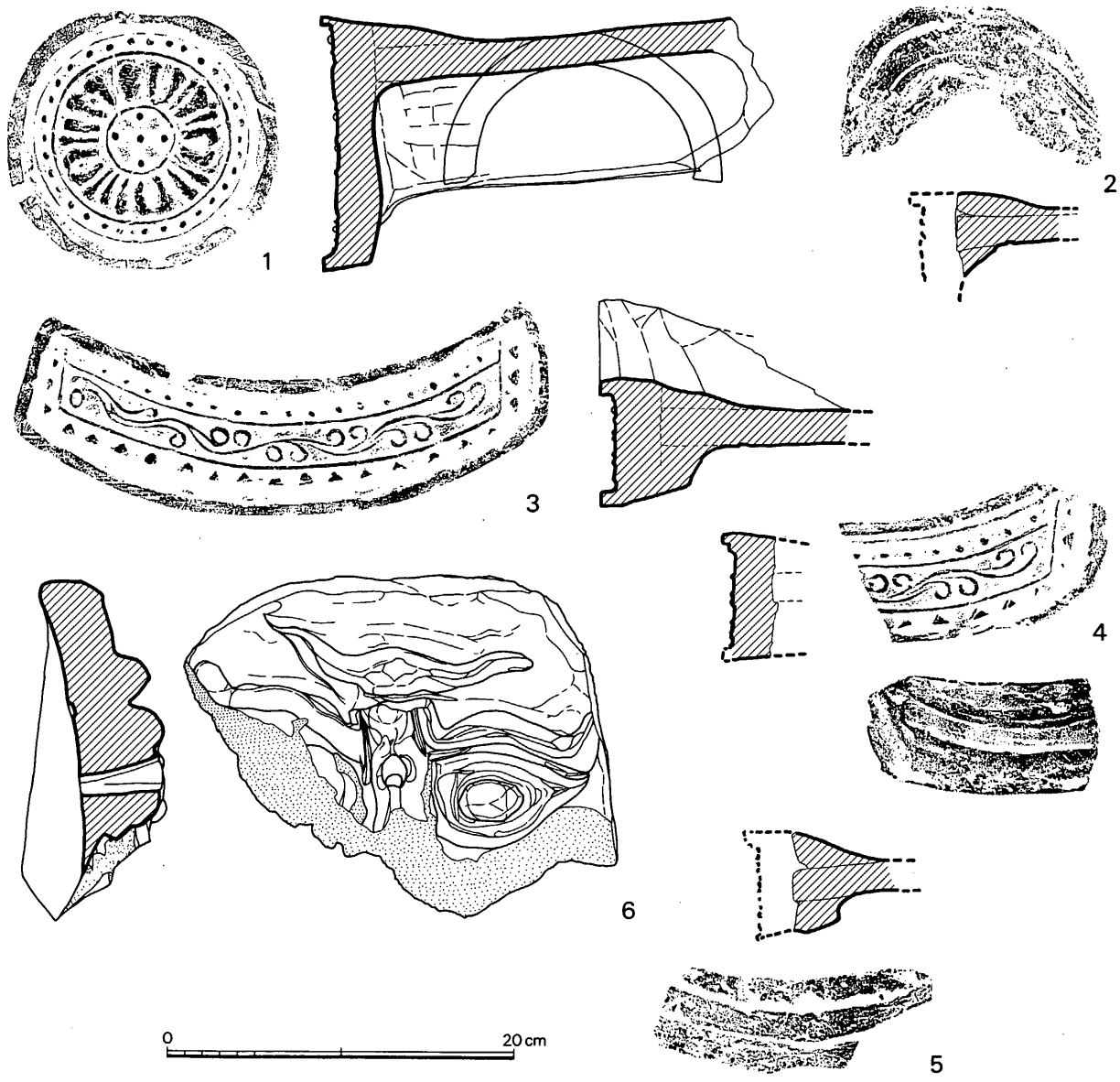
軒丸瓦IIIA類（1、2）　瓦当と丸瓦の接合方法に特徴がある。瓦当笵に一気に粘土を詰め込んだようで、瓦当部分が何枚かに剝がれたような状況のものはない。瓦当は、粘土を厚さ2.0cm前後に



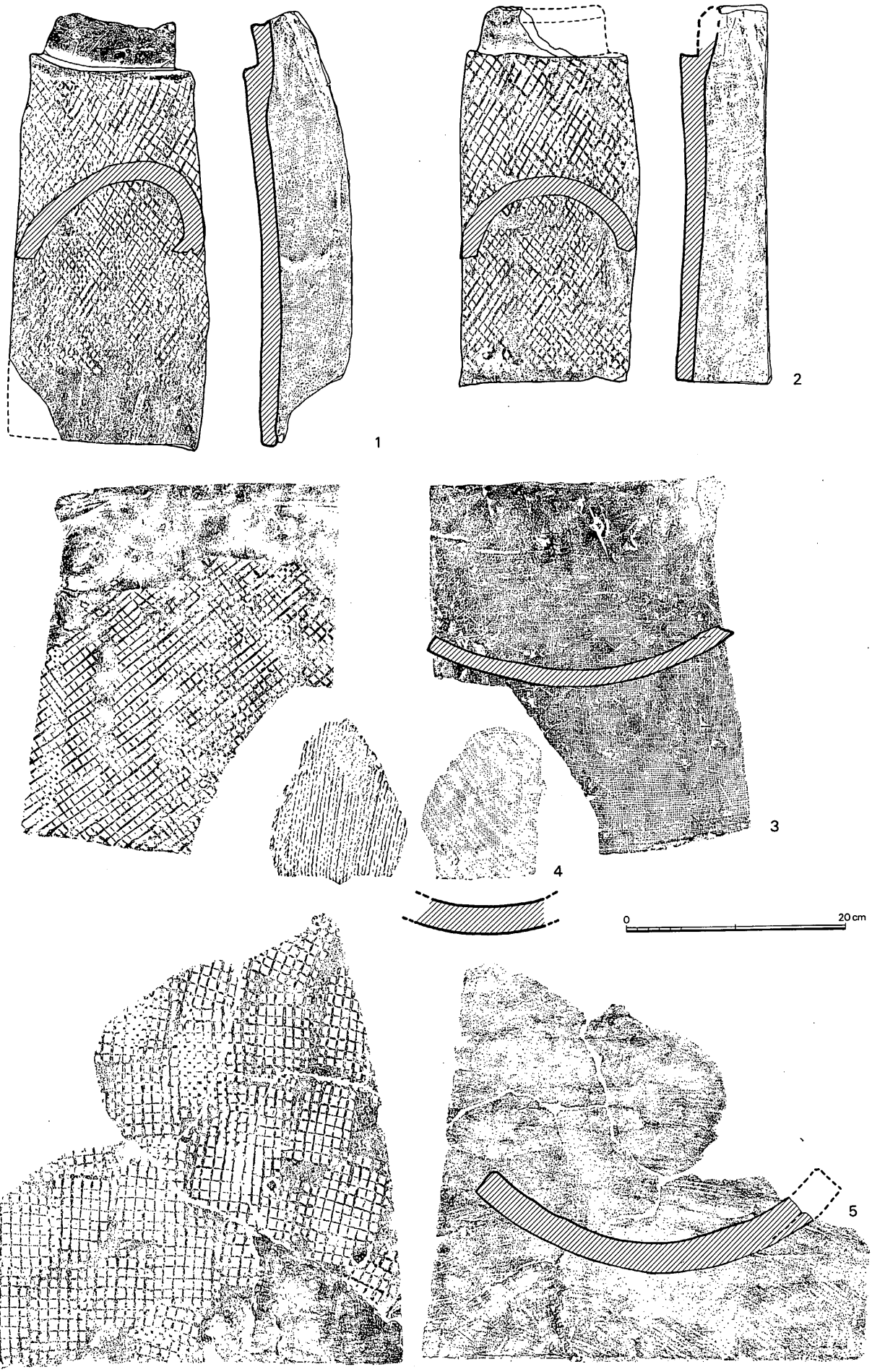
第24図　大分廃寺出土文字瓦

詰め込んだ後、裏面を平坦に整える。丸瓦はこの整えられた瓦当裏面上に置かれる。丸瓦を置いた後、凸面および瓦当裏面から丸瓦凹面にかけて接合用粘土を盛りつけ、指で押さえる。瓦当上面および丸瓦部上面にあてられた粘土は縦方向にヘラ削りされる。瓦当顎面では横方向にヘラ削りして形を整えている。第25図の２は、丸瓦が瓦当裏面で剥離した状況の資料を拓影、実測したものである。丸瓦の広端面の上部、下部に接合用の粘土が付着したまま剥離した状況であるが、瓦当面に丸瓦先端があたる部分の上下にすきまが生じている。瓦当面に対する丸瓦の接合位置は概ね瓦当上面から４分の１程の位置にある。

軒平瓦Ⅳａ類（３～５）　顎部は、瓦当面から4.0～5.5cmの位置で2.0cm程の深い段顎を呈するものや丸みをおびた曲線顎に近い形状を呈するものなどあり一様でない。これは、瓦当に平瓦を接合する方法として、接合用の粘土を平瓦を包み込むようにして用いる手法（いわゆる包み込み技法）による。



第25図　瓦溜りＳＫ025出土軒瓦・鬼瓦　拓影・実測図



第26図　瓦溜りＳＫ025出土丸瓦・平瓦　拓影・実測図

瓦当笵には2㎝前後の厚さに粘土をつめ、この部分を平坦に整える。この平坦面に平瓦をあて、周囲から接合用の支持土をあて接合している。この後、瓦当上面をヘラ削りし、脇面から下面にかけては、ヘラ削りやナデつけによって形を整え、横方向の指ナデやヘラ削りで段顎部を形成している。第25図4は瓦当部分の資料で、平瓦の接合面で剝離したものである。瓦当裏面に平瓦の先端が圧痕となり凹みとなって残っている。第25図5は平瓦先端部分と支持用粘土が剝離面となって残った資料である。

鬼瓦（6）　鬼面のみを手作りした鬼瓦である。粘土内の空気が焼成時に膨張、破砕し、鬼面下半分が欠損している。同時にその形も変形している。頂部をカマボコ形につくり、脚部までやや広がる形状であったと思われる。額部には鼻柱の上部から怒り皺が突起状に表現され左右にのびる。眉間は球状で、その左右に眉が高く配置されている。鼻柱には釘穴が上面から穿たれている。眼球は丸く高く表現され、その周囲を突出した粘土帯でかこみ、目を形成している。

裏面には、製作時に下敷きとなった台の木目が写しとられた部分と、糸切り痕とが残っている。また、破片の中央やや下部に釘穴が小さく開く。厚さは、薄い部分で3.5㎝、文様の高い部分で6.0㎝程ある。この鬼瓦も、軒丸瓦IIIA類や軒平瓦IVa類と同時に製作されたものと考えられる。手作りの鬼瓦としては、西海道では最も古い資料の一つと考えられよう。

丸瓦・平瓦（第26図、図版19　第3・4表）　丸瓦1・2、平瓦3は、いずれも凸面に幅5.2㎝、長さ27.5㎝程の叩打面をもつ叩打具で打たれた斜格子文を残している。さらに両者に共通して、凹面に糸切り痕、布目痕を残すものの模骨の痕跡は認められない。また、側面には截面と破面を残している。

丸瓦の製作台は、円柱状の台木の上部を円錐台状に削りこんだ形状が想定される。この形状の製作台は、大宰府跡出土の丸瓦のものとほぼ同じである。1・2の丸瓦で特徴的なことは玉縁の作りだしにある。大宰府跡出土の丸瓦では大脇潔氏のいうCタイプ(玉縁の作りだしにあたって、粘土帯を丸瓦の凸面につぎたしたうえで玉縁を形成する)であるのに対し、今回出土した丸瓦では玉縁部での剝離した状況が認められない。この点、今後の研究課題としたいが、氏のいうA・Bのタイプでもなくタイプのようだ。丸瓦の広端面はヘラ削り、玉縁部先端には指ナデのあとが凹みとなって残る例が多い。

平瓦3の凹面に模骨板の形状を残さない例は大宰府跡出土資料にも多く見られる。これらは粘土板の合わせ目痕跡を残し、分割面に截面、破面が残る状況からは4枚作りであることは間違いのない事実であるが、その製作台の形状や製作方法等、今後の課題として残る。

第3・4表は、軒丸瓦、丸瓦、平瓦の長さが計測可能な資料の計測値および度数分布状況である。(軒平瓦には長さの計測可能な資料がない)計測可能資料の量において問題はあるが、丸瓦を長さで分けるならば、A群(全長38㎝以上のもの3点)、B群(34～35㎝のもの4点)、C群(32～33㎝前後のもの8点)となる。この度数分布図から、やや大胆ではあるが、B群の長さで製作された丸瓦が全長37㎝の軒丸瓦に用いられたものであること、平瓦で丸瓦B群に相当する長さをもつ資料が3点あることから、丸瓦、平瓦の粘土板を切り出す粘土角材が同一のものであった可能性を指摘しておきたい。

4の平瓦は、縄目文の瓦で5とともに、SK025出土瓦としてここまでに報告した一群の瓦より古い資料である。4では図の下端が広端面にあたるものと思われる。凸面に残る縄目は細かい。縄目のうえに「はなれ砂」と思われる砂が付着する。凹面には、明瞭な糸切り痕と布目を残す。厚さ2.5

cm、橙灰色で少量の砂粒を含み、焼き上がりも硬い。

5は正格子文の平瓦である。左側縁の大部分が残る。凹面の正格子文の叩打具の原体の大きさは、7.5×5.5cm程が測れる。叩き締めの円弧は狭端縁方向が角度がつくことから、製作台の高さが腰のあたりまであったものと思われる。凹面は擦り消されているが、糸切り痕と模骨痕がわずかに残る。厚さ3.0cm程あり、破片の右側に粘土板の合わせ目がある。石英粒を含み、やや焼成は甘い。淡茶灰色を呈している。

丸瓦・平瓦片（第27図、図版21・22）

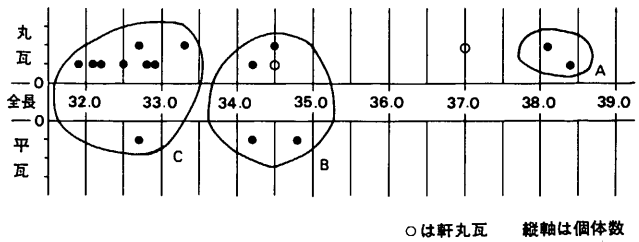
丸瓦・平瓦片については、土嚢袋に収納している。その大部分は軒瓦の出土状況と同様、塔跡周辺からの出土である。塔跡周辺からの出土量全体の8割以上を占めているものと思われる。調査開始当初においては、出土瓦片全体を対象とした整理、分析を意図したが、今日まで整理を行えたものは、塔跡出土瓦片でパンコンテナ25箱である。この量は、目算であるが出土量全体の1割程度である。とはいえ、大分廃寺所用瓦の種類や叩打具、製作手法の大要を知るうえでは満足できる量と判断している。

整理作業は、筑穂町教育委員会の遺物整理棟で山田の指導によって実施したが、その整理の手順として

1．破片の最大長5cm未満の資料については点数の確認に留めること
2．5cm以上ある破片については、丸瓦、平瓦の判別を行うこと
3．丸瓦・平瓦片ともに凸面の叩打具痕跡（正格子文、斜格子文、縄目文）や成形痕跡（擦り消し）によって、それぞれを分類する。（叩打具文が部分的であっても、確定できるものについてはその叩打具文に分類する。）
4．丸瓦片については、玉縁のあるものはその点数を数えること

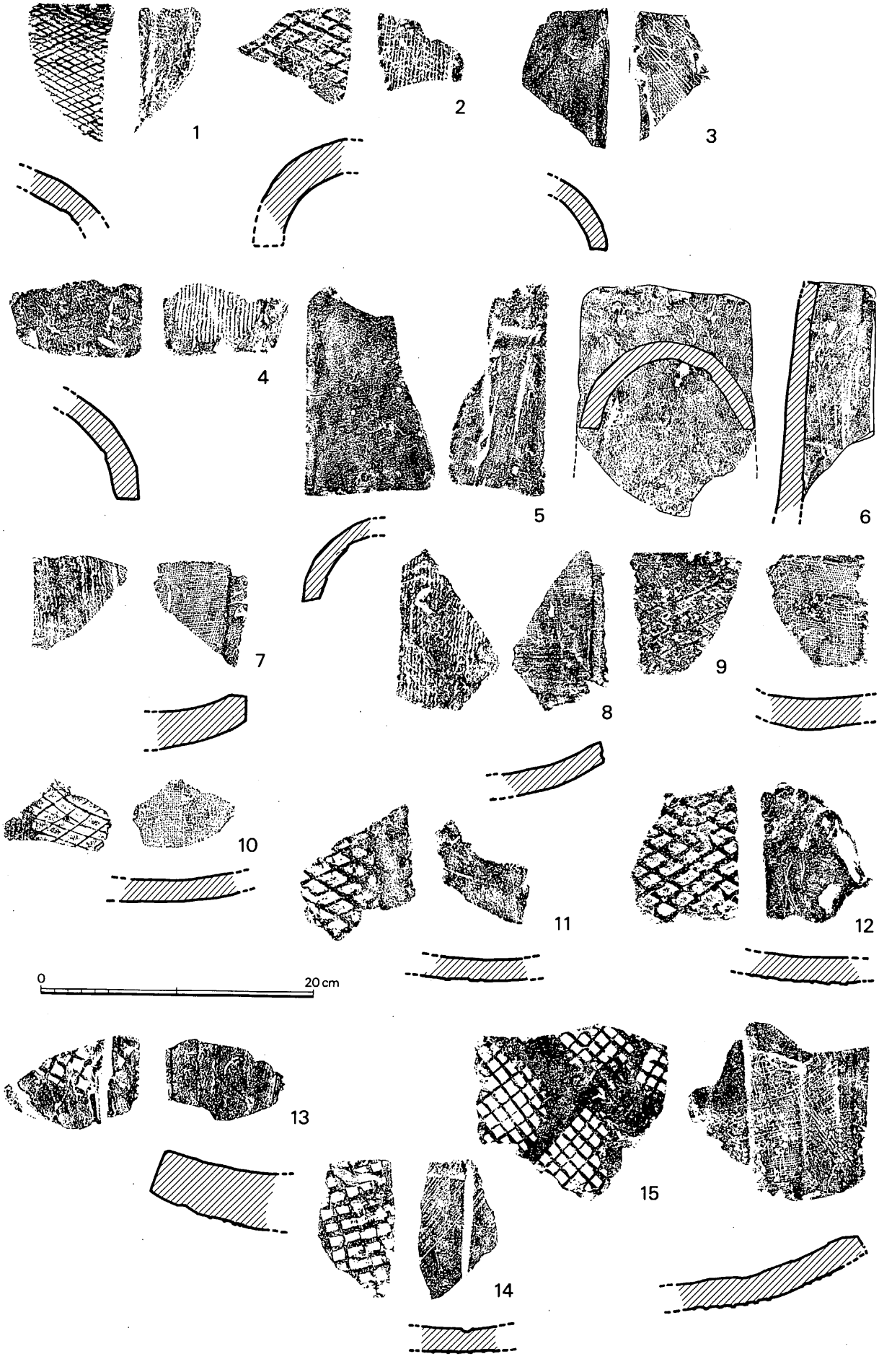
	No.	A（全　長）	B（丸瓦長）	C（玉縁長）
軒丸瓦	1	37.0 cm	32.2cm	4.8cm
	2	37.0	32.7	4.3
	3	34.5	30.2	4.3
	平均	36.2	35.0	4.5
丸瓦	1	33.1	33.8	4.3
	2	38.1	33.9	4.2
	3	38.4	34.0	4.4
	4	34.5	30.2	4.3
	5	32.9	28.3	4.6
	6	32.7	28.5	4.2
	7	33.3	29.0	4.3
	8	34.2	30.1	4.1
	9	32.8	28.5	4.3
	10	31.9	27.4	4.5
	11	34.5	30.3	4.2
	12	32.2	28.5	3.7
	13	32.5	28.6	3.9
	14	33.3	28.8	4.5
	15	32.1	28.2	3.9
	16	32.7	28.2	4.5
	平均	34.01	29.8	4.2
		A（全　長）	B（狭　端）	C（広　端）
平瓦	1	34.1	27.5	—
	2	32.7	—	—
	3	34.8	—	—
	4	34.2	—	—
	平均	33.95	27.5	—

第3表　大分廃寺出土瓦計測表



○は軒丸瓦　　縦軸は個体数

第4表　出土丸・平瓦全長値度数分布表



第27図　大分廃寺出土丸瓦・平瓦片　拓影・実測図

5．側縁部が残る資料については、分割方法、面取りの状況について分類し、点数を数える。以上を原則として実施した。

整理を実施した瓦片の総点数は15,449点である。このうち、10,474点（67.8%）は5cm以下の破片で、1,625点（10.5%）が丸瓦片、3,350点（21.7%）が平瓦片であった。

丸瓦片1,625点のうち、斜格子文のもの77点、正格子文のもの9点、縄目文のもの1点、擦り消されたもの1,537点であった。この内容をそれぞれの破片で検討したところ、斜格子文の破片では2～3種の叩打具痕が認められるが、SK025出土の軒丸瓦III類の丸瓦の叩打具痕と同一のものが主体を占めている。凸面が擦り消された破片資料では、大半が行基式で正格子文が擦り消されたものと推定された。正格子文を残す丸瓦片と凸面擦り消しの瓦片を合計すれば、1,546点（丸瓦片の95%近く）となる。この数字と平瓦片の分析の結果を見るとき、縄目文平瓦片90点があることに気づく。従って、縄目叩打具痕の丸瓦でも凸面を擦り消したものが含まれていると見なければならないが、縄目平瓦片90点（平瓦総数の2.8%）であるから、丸瓦片総数の9割以上が正格子文で行基式丸瓦であり、創建時のものと考えてよいだろう。

平瓦片では、斜格子文21点（0.6%）、正格子文3,084点（95.7%）、縄目文90点、擦り消し34点（1%）であった。平瓦片の叩打具痕等の状況も、ほぼ丸瓦片で考えられる状況に近いものとみてよいだろう。従って、丸・平瓦は創建時のものは、正格子のものが使用されたと考えられよう。

第27図は、叩打具痕を中心に選びだした破片資料である。1～6は丸瓦片である。1は斜格子目の比較的小さなもの。2は大きい斜格子文で、玉縁近くの破片である。3～6は凸面擦り消しの瓦片である。3は凹面左端が分割部分であるが、同時に粘土板の合わせ目となっていて糸切り痕跡が接合面にもぐる。表面は縦方向のヘラによるナデである。4は行基式丸瓦の広端部である。凸面の整形は荒れており判然としない。凹面の縦方向の平行線は糸切りの痕跡である。通常の糸切り痕跡と異なり凹凸の状況が深い。5は行基式丸瓦の狭端部付近の破片である。凸面は縦方向のヘラ削り。凹面の図の上端では製作台の圧痕が直接写し取られている。6も5と同様の破片であるが、狭端径が12cmであることがわかる。5・6の資料から見れば、その製作台は模骨状のものではなく、円錐台状のものと想定できよう。

7～15は平瓦片である。7・8は縄目叩打具痕の破片で、凸面にはわずかながら「はなれ砂」ではないかと思われる砂が付着する。7・8とも厚さ1.5cm程で石英粒を含み、暗灰色の須恵質に焼成された資料であるが、SK025出土の縄目文平瓦は2.0cm以上の厚さで橙灰色に焼かれていた。7・8とは異なるものと考えたい。7・8の凹面には模骨状の痕跡は認められない。側縁部凹面側をヘラ削りした資料が多い。9～12は斜格子文を凸面に残す。9・10の斜格子文は、丸瓦片1とも異なる。いずれもSK025の軒丸瓦IIIA類、軒平瓦IVa類の丸・平瓦部に認められた斜格子文とは別のものと思われるが、時期的には同時期と考えたい。図示は出来ていないが、同種のものの側面は、截面と破面を残すものがある。暗灰色に焼き上げられている。11・12は、橙灰色に焼き上げられた大きめの斜格子文の破片である。明確には出来ないものの、縄目文や、9・10の斜格子文の瓦片より古いものではないかと思われる。11の凸面斜格子文のなかに縦線が入るのは、叩打具に木目があらわれているものである。また、11・12の凹面でみる限り、模骨の痕は認められない。13～15の平瓦片は、凸面に正格子文を残す。13の資料は、特別に厚く4.0cmを測る。凹面は縦方向にナデられているが、わずかに模骨の痕が認められる。側縁を残す資料で、この部分凹面側が幅狭く面取りされて

いる。14の凹面には、模骨につけられた分割突起の痕と思われる幅0.6cm、深さ0.3cmの溝状の凹みが縦方向に残る。15の凸面には正格子文と明らかにわかる格子文が残り、凹面には模骨の痕が認められる。上部で布の上端部は直接模骨の圧痕を写し取っている。

以上、破片資料からではあるが、大分廃寺出土瓦を概観した。同種の軒瓦を出す天台寺跡や垂水廃寺の丸・平瓦と比較するとき、

1．百済系単弁軒丸瓦に伴う竹状模骨の丸瓦片が認められない。

2．天台寺跡では、2枚割り、3枚割りの熨斗瓦や、切り離し計画線だけであったが隅切瓦など道具瓦が存在したが、今回整理した範囲では認められなかった。

3．叩打具痕の種類から、正格子文、斜格子文、縄目文は天台寺跡、垂水廃寺、椿市廃寺の三者および大分廃寺に共通するものの、大分廃寺の場合、叩打具の種類はやや少ない。

などの点が注意された。これらの点について総合的な結果を出すためには、(軒瓦片の例にも見るとおり、軒丸瓦、軒平瓦1点ずつの新出資料を認めたように）丸・平瓦片全体の整理、分析が必要である。今後に期待したい。

小　結

大分廃寺出土の瓦類についての事実関係は報告したとおりである。一応のまとめとして報告した内容を若干整理しておきたい。

軒　瓦　まず、天台寺跡・椿市廃寺・垂水廃寺では、その創建時に用いられた主要な軒瓦は、百済系単弁の軒丸瓦および、九州式重弧文とも言うべき二重弧文軒平瓦が、その組合せとして用いられているのに対して、大分廃寺では、軒丸瓦II類と軒平瓦III類を主流とした新羅系軒瓦の組合せが創建時の軒瓦の組合せと推定されたことである。軒丸瓦では、九州大学所蔵の軒丸瓦Ⅰ類（天台寺跡軒丸瓦Ⅰ類と同笵）の出土が1点もなかったこと、この軒丸瓦の丸瓦は、天台寺例では凸面格子文・凹面竹状模骨の痕を残す例があるのに対し、大分廃寺出土の整理済丸瓦片のなかには、竹状模骨痕跡を残す丸瓦片を見い出していないこと。また、平瓦片の中にも重弧文軒平瓦片を見い出していないことである。もちろん、今後、丸・平瓦片の整理が進み、その中に竹状模骨痕跡や重弧文軒平瓦が、見い出される可能性は皆無であるとは言えないが、大分廃寺の創建時の軒瓦の組合せは新羅系軒瓦であったものと考えてまちがいないだろう。

このことから、大分廃寺にⅠ類とした百済系単弁八弁軒丸瓦が存在しないとすれば、さらに大分廃寺軒丸瓦第II類より百済系単弁八弁軒丸瓦が古いとすれば天台寺の建立が大分廃寺よりも先行して着手したものと判断されよう。

大分廃寺出土の軒瓦の組合せは、4とおりを推定したが、B・Cの組合せについて若干の感想を記すとすれば、

1．いずれも、平安時代の軒瓦であって奈良時代の明確な軒瓦は出土しなかったこと。

2．二つの組合せは、いずれも大宰府系の軒瓦と言うべきものである。Bは大宰府から出土していないが瓦当文様の系譜のもとは大宰府にあったと思われ、Cは同笵例が大宰府にあり製品が搬入されたものと考えられる。

1の現象については、土器類でも8世紀のものは少ないとされることと一致することで、大分廃寺の8世紀の状況に踏み込める資料を欠くことになる。

8世紀の大分廃寺の状況がはっきりとはしないが、2のことから9世紀初には大分廃寺は存続していて、2つの軒瓦セットで改修をした。大宰府はこの段階では、大分廃寺改修事業の主要な役割を果たした。椿市廃寺では、2～3種の8世紀の軒瓦が存在するのに対して、天台寺跡、垂水廃寺においては大分廃寺と同様、明確な8世紀の軒瓦が出土していない。天台寺跡では、8世紀の瓦資料として、縄目叩打文の丸・平瓦の存在を考えた。大分廃寺でも一定の出土量がある縄目文丸瓦・平瓦が用いられた可能性が高いと考えたい。

道具瓦　SK025から鬼瓦1点の出土があった。天台寺跡からは、熨斗瓦・隅切瓦・瓦質の環状土製品・筒型土製品が、椿市廃寺からは鴟尾などが出土しているが、両廃寺のこれ等は、創建時のものに考え得る資料である。大分廃寺出土の鬼瓦は9世紀初と考えられるから、垂水廃寺の例とともに、道具瓦として、最初から製作されたものは、極めて少なかったようだ。

丸瓦・平瓦　瓦片に残された叩打具文から見る限り、3つの廃寺出土の丸瓦・平瓦の破片資料よりも、叩打具の種類のうえで少ない。大分廃寺瓦類の時間的な流れを叩打具痕に置き換えれば、大きくは正格子文→縄目文→斜格子文の3種に置きかえられる。これら3種の叩打具痕にも、それぞれ、2～3種あるものとしても、天台寺跡・椿市廃寺・垂水廃寺の瓦に見られる叩打具痕の種類よりも少ない。やや、飛躍した見通しではあるが、大分廃寺の瓦製作の工房は、比較的数少ない工房であったもののように思われる。

高橋健自・鏡山猛・児島隆人・小田富士雄氏等の諸先学により、学会に紹介され著名となった大分廃寺出土の瓦である。特に、それが生産された背景として小田富士雄氏の研究により指摘されているとおり宣化朝に設置された屯倉や大宰府から豊前への官道の関係、さらには新羅系軒瓦を生産した帰化人との関係等の証明素材としての大分廃寺出土瓦の重要性は認識していたつもりであったが、天台寺跡・椿市廃寺・垂水廃寺と同笵関係にある瓦相互のつきあわせも満足に行っていない。今後の機会を見て取り組んでみるつもりであるが、現段階では、お侘びを申しあげるしかない。

註1　『天台寺跡』田川市文化財報告書第6集　1990　図版22

註2　前掲書　P25

註3　前掲書　P24～26・43によれば本書Ⅰ類が天台寺跡では89点（82%）の出土量であるのに対し同笵例である天台寺例Ⅴ類は10点（9%）の出土率であり、天台寺跡では本書でII類とした軒瓦は創建期の軒丸瓦の主流とはなっていない。

註4　前掲書　P26・27

註5　A、『椿市廃寺』行橋市文化財報告書　1980　行橋市教育委員会　P16・17
B、『椿市廃寺II』行橋市文化財報告書第24集　1996　行橋市教育委員会　P30・32

註6　前掲書　P32及び図版17の26-2

註7　『垂水廃寺』新吉富村文化財報告書第2集　1976　新吉富村教育委員会　P21・22

註8　前掲書　図版24のE-8

註9　石松好雄・高橋章「大宰府出土の瓦について（二）」『九州歴史資料館研究論集4』
九州歴史資料館　1978　P79

註10　大脇潔「研究ノート　丸瓦の製作技術」奈良国立文化財研究所学報　第49冊
『研究論集IX』　1991　P31・32

参考文献

狭川　真一　「大宰府からみた豊前の寺院と古瓦」『古文化談叢　第34集』九州古文化研究会　1995
毛利光俊彦　「軒丸瓦の製作に関する一考察」『畿内と東国の瓦』京都国立博物館　1990.2
児島　隆人　A「大分廃寺」『九州古瓦図録』　九州歴史資料館　1981
B「筑前大分廃寺創立に関する一考察」『考古学』　10巻12号　1939
高橋　健自　「筑前国大分廃寺阯及同所発見古瓦」『考古学雑誌』　10巻９号　1920
鏡山　　猛　「北九州古瓦の一様式について」　綜合古瓦研究第２分冊　『夢殿』　19　1939
小田富士雄　「豊前における新羅系古瓦とその意義」『九州考古学研究』　歴史時代編　学生社　1977　（『史淵』85　1961）

２．土器類

塔跡出土土器・陶磁器（第28図、図版27）第１次調査

塔跡については２箇年にわたって調査を実施したので、都合上、出土した土器については第１次調査分と第２次調査分に分けて報告する。今回報告する土器はいずれも表土中からの出土で、遺構に伴うものはない。しかも土器・陶磁器類の出土はきわめて少量で、大部分は瓦類である。

須恵器

小壷（１）　小壷の底部と体部の一部が残っている。体部の外面はヘラケズリ、内面はヨコナデで、ロクロ目が明瞭である。底部の切り離しはヘラによる。胎土には砂粒の混入は少なく、精製されている。底部の径は6,0cm。

中国製輸入陶磁器

白　磁

椀（２）　白磁の椀Ⅷ類の口縁部の少片である。端部を平坦にするタイプである。口径については小片であるため正確ではない。

青　磁

椀（３）　竜泉窯系青磁椀Ⅰ類の底部片である。底部は露胎である。釉は風化し、部分的に剝落しており、黄茶色を呈する。

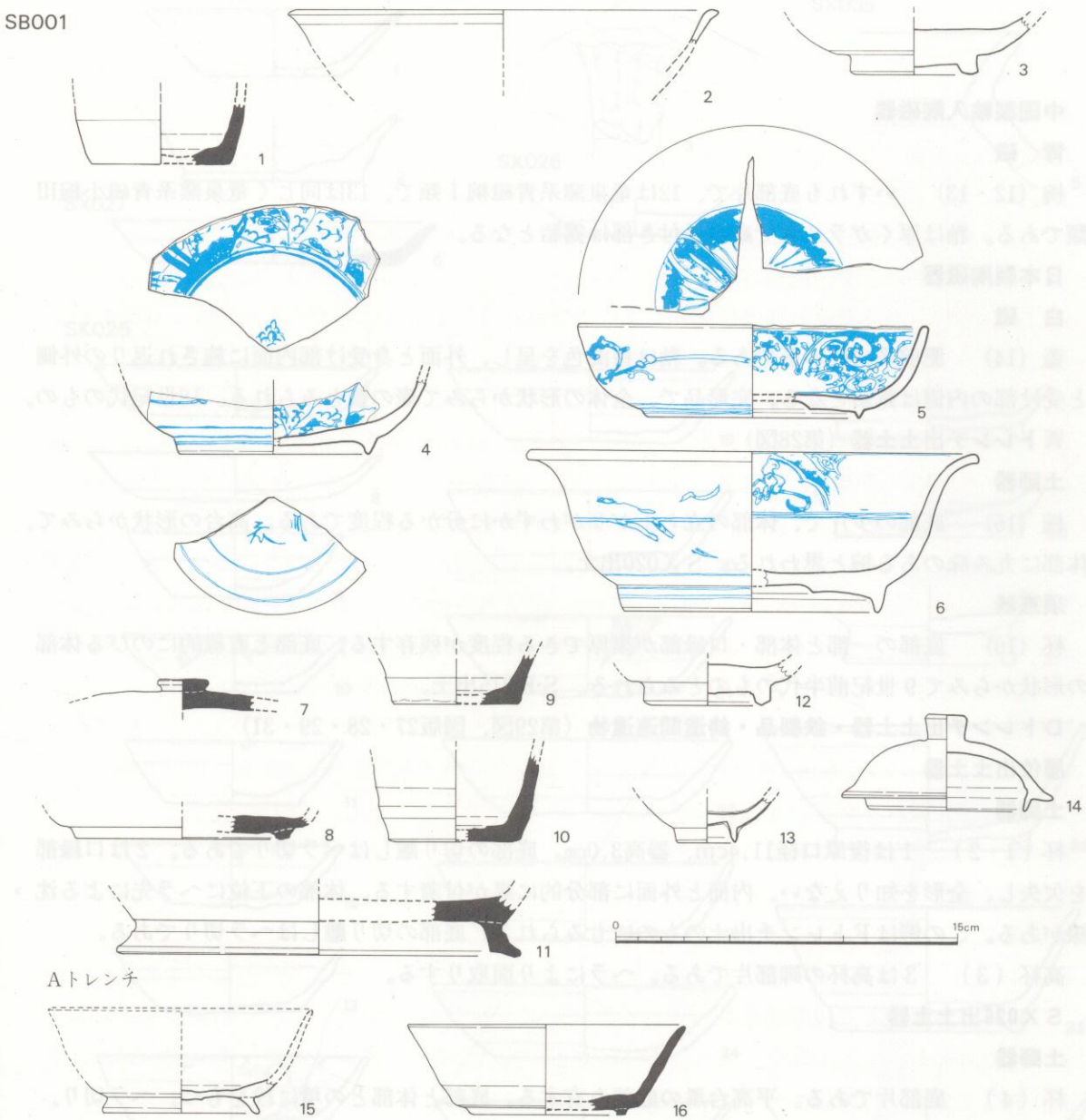
日本製陶磁器

染　付

皿（４～６）　４は肥前系の皿で、口縁部を欠失するが、体部の内・外面には唐草文と竹の文様を施文する。内底には５弁花のコンニャク印判をもつ。外底部には「明」「製」がみえる。おそらく「大明年製」であろう。18世紀の前半から中頃。５は底に段を有するいわゆる蛇の目高台のもので、体部の内・外面に通称「蛸唐草文」と呼ばれる文様を描く。内面の文様は密であるが、外面は粗である。18世紀の第４四半期のものである。６は大形の皿で、口縁部を大きく外反させる。高台の内面は５と同じく蛇の目高台である。明治期のものである。ａは型紙による文様を有する。

塔跡出土土器・陶磁器（第28図、図版27）第２次調査

２次調査においても、土器の量は極めて少なく、小片が多い。全てが表土出土である。若干の陶磁器も近世陶磁器が多く、わずかに中国製の陶磁器片がみられるのみである。



第28図　塔跡ＳＢ001・Ａトレンチ出土土器・陶磁器実測図

須恵器

蓋（７）　蓋の少片で、摘みと天井部がわずかにわかる。天井部の外面はヘラ削りし、塔跡出土の８世紀代の蓋としては唯一である。

杯（８）　杯の少片である。低い高台で、体部への立ち上がりが僅かに知れる。外底はヘラ削りしているようである。

小壷（９・10）　いずれも底部と体部の一部が残存する。９の底部径からすると、やや小振りである。底部と体部下位はヘラ削り、他はヨコナデである。砂粒の混入は少なく硬質である。

壷（11）　高台部がわずかに残り、径がかろうじて復原できる程度の少片である。高台は底部端に貼付され、横に張り安定感がある。外底の残存部にはヘラ削りの痕跡がみられる。高台の径と大きさから、短頸壷ないし長頸壷の底部とみられる。

中国製輸入陶磁器

青　磁

椀（12・13）　いずれも底部片で、12は竜泉窯系青磁椀Ⅰ類で、13は同じく竜泉窯系青磁小椀Ⅲ類である。釉は厚くガラス質で高台畳付き部は露胎となる。

日本製陶磁器

白　磁

蓋（14）　肥前系白磁の蓋である。釉は白濁色を呈し、外面と身受け部内面に施され返りの外側と受け部の内側は露胎となる。完形品で、全体の形状からみて壷の蓋とみられる。18世紀代のもの。

Ａトレンチ出土土器（第28図）

土師器

椀（15）　底部の少片で、体部の立ち上がりがわずかに分かる程度である。高台の形状からみて、体部に丸み味のある椀と思われる。ＳＸ020出土。

須恵器

杯（16）　底部の一部と体部・口縁部が復原できる程度が残存する。底部と直線的にのびる体部の形状からみて９世紀前半代のものとみられる。ＳＫ015出土。

Ｄトレンチ出土土器・鉄製品・鋳造関連遺物（第29図、図版27・28・29・31）

層位出土土器

土師器

杯（１・２）　１は復原口径11.4cm、器高3.0cm。底部の切り離しはヘラ切りである。２は口縁部を欠失し、全形を知りえない。内面と外面に部分的に煤が付着する。体部の下位にヘラ先による沈線がある。この例はＦトレンチ出土のものにもみられる。底部の切り離しはヘラ切りである。

高杯（３）　３は高杯の脚部片である。ヘラにより面取りする。

ＳＸ026出土土器

土師器

杯（４）　底部片である。平高台風の底部を有する。底部と体部との境に段をもつ。ヘラ切り。

ＳＸ027出土土器

須恵器

皿（６）　復原口径14.2cm、器高1.8cm、底部の切り離しはヘラ切りである。

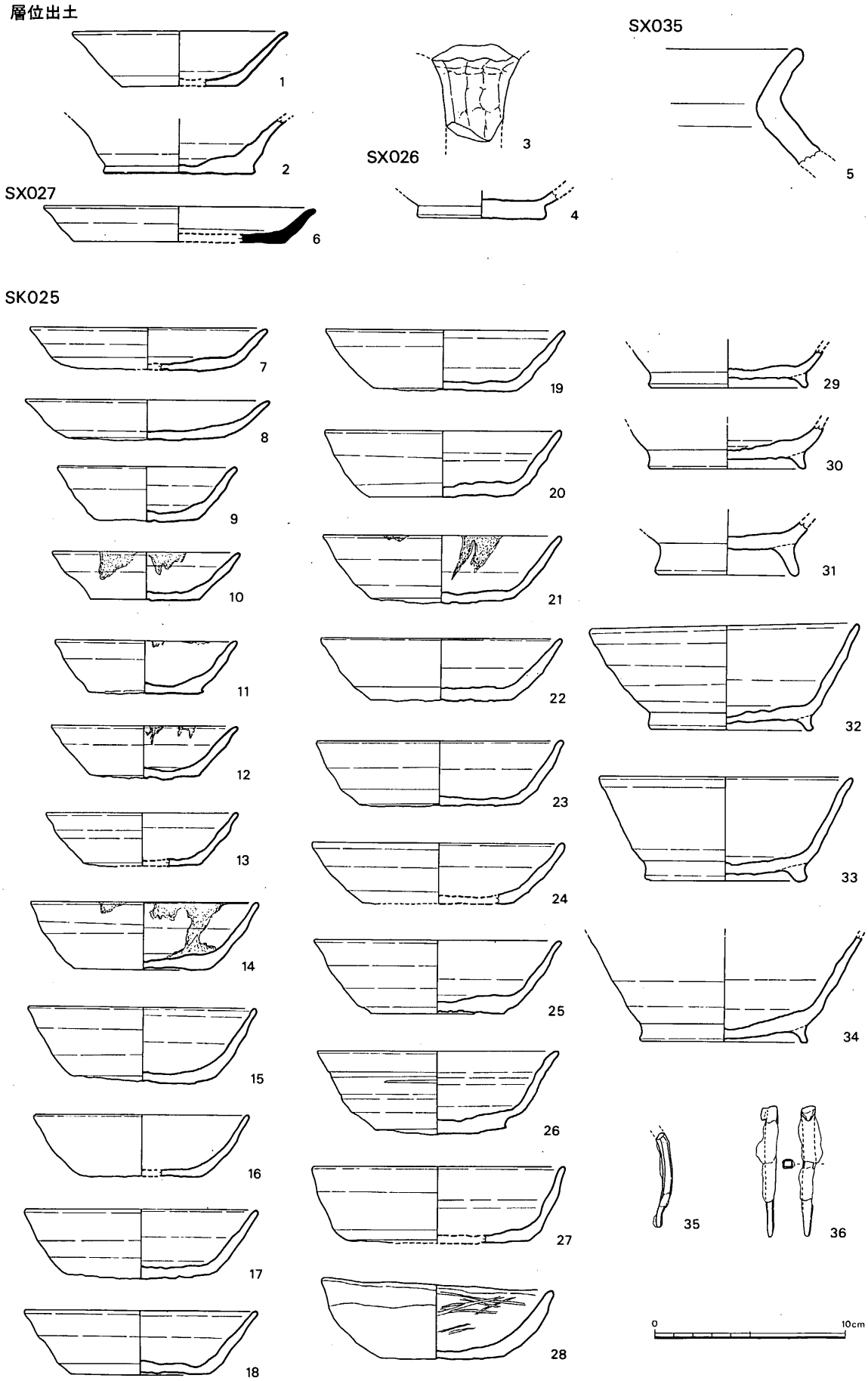
ＳＸ035出土土器・鋳造関連遺物

土師器

甕（５）　甕の口縁部小片である。「く」字に折り曲げた口縁部は厚い。口縁部の外面に煤が付着する。口縁部の内面はヨコナデで、外面は指押さえによる調整を行い、肩部の内面はヘラ削り後ヨコナデする。胎土は砂粒の混入が目立ち粗い。

鋳造関連遺物（図版31－ａ・ｂ）

SX035から、鋳造に関連する炉壁片とそれに溶解した付着物が出土している。細片になっているため、鋳型片であるのか炉壁片であるのかは明瞭に区別できないが、胎土の粒子が細かいことから鋳型片と考えられるものがある。しかしながら、鋳面が残存していないため、何を製作したものかは不明である。



第29図　Dトレンチ出土土器・鉄製品実測図

ＳＫ025出土土器

当遺跡では土器がまとまって出土した遺構である。器種として、皿・杯・椀がある。

土師器

皿（７・８）　口径12.6～12.8cm、器高2.1～2.2cm。底部の境界が明瞭でなく、丸味をもっている全体はヨコナデするが、底部はヘラ切りである。

杯（９～34）　９～28は口径と器高から大小の２種に分けられる。小型の９～13は口径9.4～10.2cm、器高2.5～2.9cm。いずれも、口径に比較して底径が小さい。平坦な底部から体部は斜め外方に延び、口縁端を軽く外反させる。10、11、12の口縁部には油煙が付着する。灯火器として使用している。底部はヘラ切り離しである。胎土は若干の砂粒を含むが、比較的精製されている。14～27は口径12.0～13.3cm、器高3.2～4.4cm。底部はヘラ切りであるが、14、15、18、20～24、27は体部下位をヘラ削りする。14、21には油煙が付着する。灯火器として使用している。28は手捏ねで、口径12.3cm、器高3.5～4.2cmを測る。全体的には歪みがある。内面には粗いミガキを施す。29～34は高台の径から、小（29～31）、中（32・33）、大（34）の３種がみられる。29～31は底部片のみで全形が分からないが31は高台が高い。32～34は断面四角の高台で比較的がっしりしている。32、33の体部は直線的で斜め外方にのびる。一括投棄されたもので、９世紀前半代のものである。

鉄製品

鉄釘（35･36）　35は頭部と先端部を欠失する。断面は四角で長さ6.9cmが残る。36は先端部が僅かに欠失するが、保存状況は比較的良好である。

Ｆトレンチ出土土器（第30図、図版29）

層位出土土器

土師器

杯（１～13）　口径11.2～12.8cm、器高2.4～3.3cmである。全てヘラ切りである。１～３、６、９～12は底部と体部との境界部分にヘラ先で切り込み（キズ）を入れている。この種のキズはＤトレンチ出土のものにもみられる。また、12は底部を円盤状に高くしている。７、９、10、12には油煙が付着しており、灯火器として使用されている。

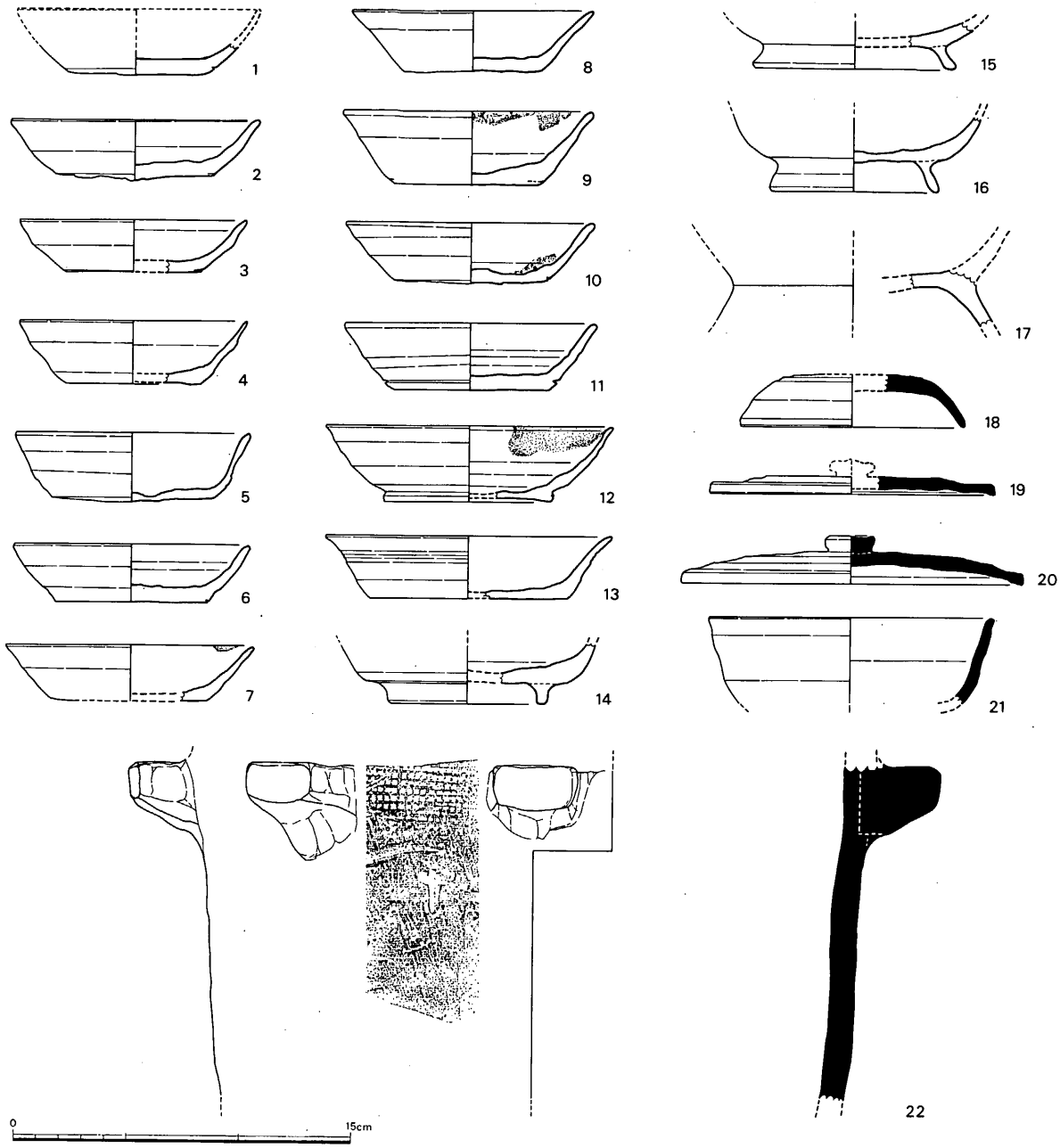
椀（14～17）　いずれも底部片で、全形は知り得ない。14は低く直立する高台を有する。底部から体部へは丸味をもち、体部は直立気味である。15、16は「八」字状に開く、やや、高めの高台を有する。底部から体部へは14に比べ、大きい丸味をもって立ち上がる。17は大形の椀で、高い高台を有する。体部は残っておらず形態については不明である。SK025出土のものと同時期のものである。

須恵器

蓋（18～20）　18は口縁部の形態から、ここでは蓋として報告する。口縁端は外面をわずかに直にする。19、20は断面三角形の口縁部で、内面の体部との境いには明瞭さを欠く。19の天井部はヘラ切り後、部分的に削りを行う。20の天井部は丁寧なヘラ削りを施す。胎土は精製され、砂粒の混入は少ない。

杯（21）　体部と口縁部の小片である。体部下位には僅かに丸味がみられる。

鉢（22）　体部片である。残存部の上位に把手様のものを貼付する。把手は差し込んでおり、さ



第30図　Ｆトレンチ出土土器実測図

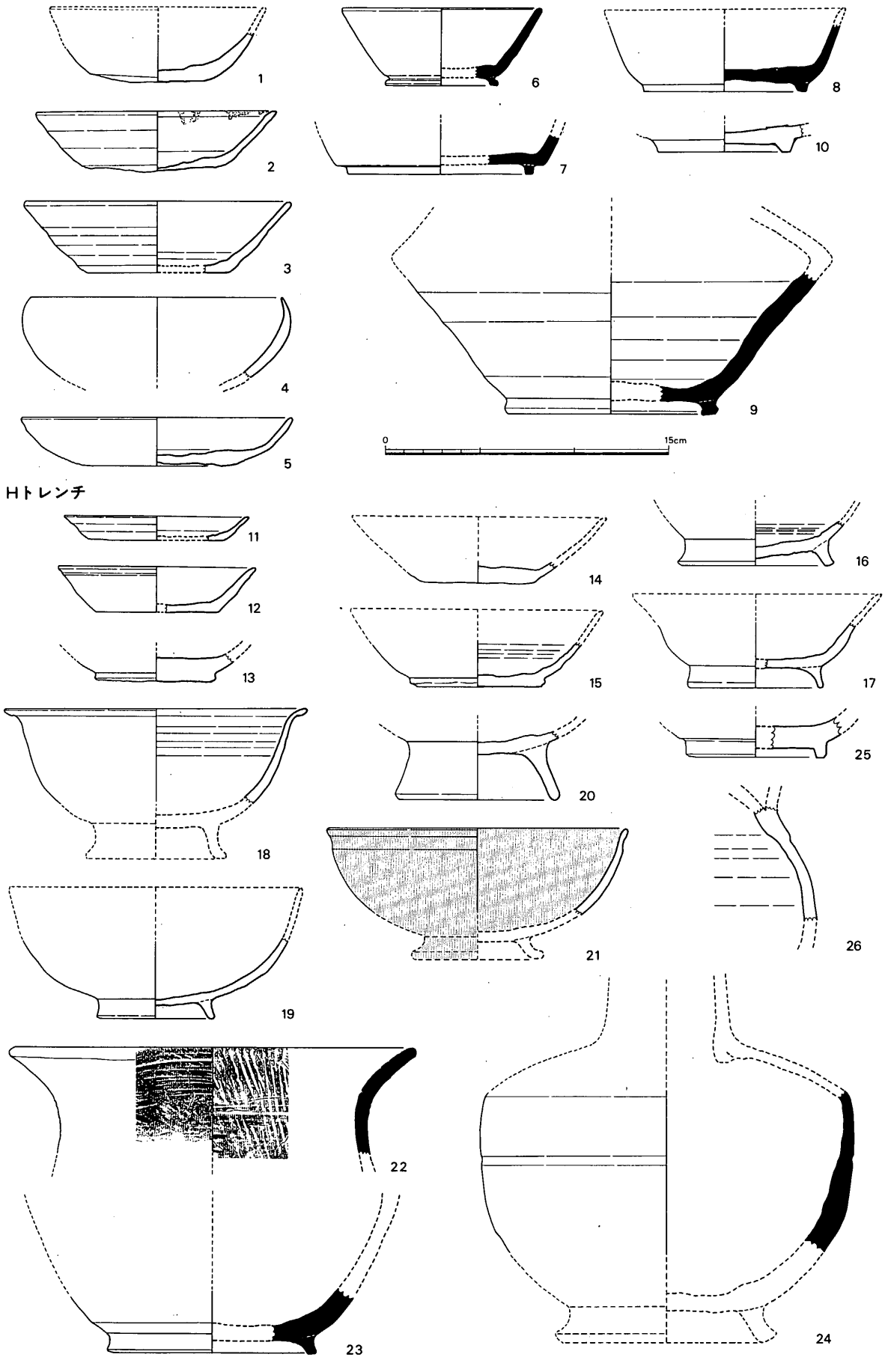
らに粘土を巻くように貼りつける。把手は１個が完存し、他の１個所に貼付痕を残す。

Ｇトレンチ出土土器（第31図、図版30）

このトレンチからは土師器・須恵器の杯・皿それに長頸壷の破片、越州窯系の青白磁の椀が出土。

土師器

杯（１～４）　１は口縁部を欠失するが、内外面ヨコナデで外底部はヘラ切りする。底部に板状圧痕を有する。２は口径13.0cm、器高3.2cmで、口縁部の内面に油煙が付着する。３は復原口径が14.3cm、器高3.8cmの小片である。底部はわずかしか残っていないため明瞭でないが、底部はヘラ削りし、体部下位も削りを施している。４は体部が丸く、口縁部が内弯するもので、口縁端は細くする。内面はヨコナデ後ヘラミガキを施すが、磨滅しているため、わずかしか痕跡を残していない。復原口径13.3cm。



第31図　G・Hトレンチ出土土器・陶磁器実測図

皿（5）　口径14.6cm、器高2.6cm。底部から体部は丸味があり、その境界は明瞭でない。ヘラ切り離し。

須恵器

杯（6～8）　6は底部から体部へ斜め外方に直線的にのびる体部を有する。低いが、やや開き気味の高台は底部端に貼付する。7、8は全形を知り得ないが、断面四角の高台を貼付する。

壷（9）　体部の下半の一部が残存する長頸壷の破片である。肩部は残存しないが、体部下位の傾斜からみると肩部が「く」字状に屈曲し、肩の張るものと思われる。高台は断面四角の幅広の高台を有し、安定感がある。

中国製輸入陶磁器

青白磁

椀（10）　青磁の椀の底部片である。台形様の低い高台を削り出す。見込みには目跡が残る。釉はやや青味をおびたガラス質である。畳付部は露胎となる。他は全面に施釉される。

Hトレンチ出土土器・陶磁器・石製品（第31・32図、図版30）

溝ＳＤ050から出土した土器が最も多い。

ＳＤ050出土土器（第31図）

土師器

皿（11）　11は小破片で口径9.8cm、器高1.8cm。底部はヘラ切り。

杯（12～15）　12は口径10.5cm、器高2.5cm。底部はヘラ切り。13は底部片であるが、高台風の円盤状の厚みのある底を有する。14は13、15程高くはないが、底部から体部の下位に段を有する。いずれもヘラ切りである。Dトレンチ SK025、Fトレンチ層位出土のものと同時期のものである。

椀（16～20）　いずれも底部、口縁部の破片で全形を知れるものはない。16、17は底部と体部の一部が残存する。16は厚めのしっかりした高台を貼付する。18は丸味のある体部から口縁部を大きく外反させる。19は底部から体部にかけて、全体に丸味があり、低い高台はやや開き気味である。磨滅して不明瞭であるが、内外面にはヘラミガキを施す。20は底部片である。高い高台は大きく開き、体部は高台を貼付した付近で欠失しているため不明であるが、大形の椀としても差し支えないかもしれない。

黒色土器

椀（21）　体部の一部と口縁部片で内・外面を黒色に燻すＢ類の椀である。丸味のある体部から口縁部は端部付近でわずかに外反させる。

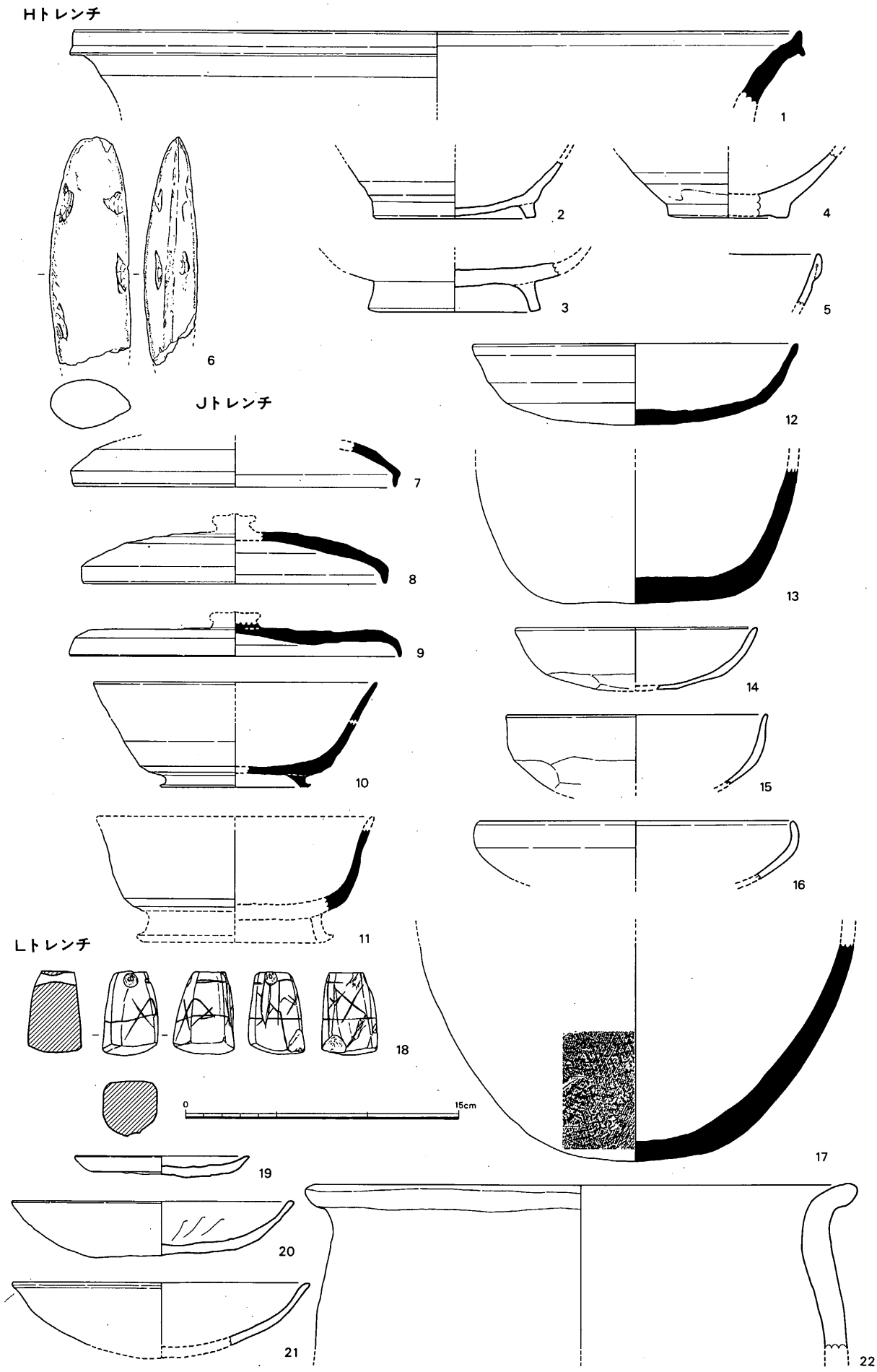
須恵器

甕（22）　口縁部が「く」字状に外反する。復原口径21.0cm。口縁部の内面にはヨコ方向と斜め方向に深い刷毛目調整がある。土師器のように刷毛目調整すること、形態的にみて、やや特異なものである。

壷（23・24）　いずれも壷の底部片と体部片である。23は短頸壷か長頸壷なのかは不明である。24は体部の形態からみて長頸壷と思われる。体部のほぼ中央部に幅広の沈線1条を巡らす。残存部の下位にはヘラ削りが残り、他はヨコナデである。体部と肩部が明瞭に陵をなす形態のものであろう。

中国製輸入陶磁器

青　磁



第32図　H・J・Lトレンチ出土土器・石製品実測図

椀（25）　越州窯系の椀II類である。釉は淡緑色を呈し、透明感があり高台畳付を除いて全面に施釉する。内底に重ねの目跡がある。

水注（26）　越州窯系青磁の水注片である。把手の貼付痕が残る。内面は露胎で、外面には黄色味の強い淡緑色の釉をかける。下地に化粧土を施す。

層位出土土器（第32図）

土師器

椀（２・３）　椀の底部片である。いずれも断面四角のがっしりした高台を貼付する。２は直線的に立ち上がる体部を有する。３はやや高めの高台で、残存する体部の状況から体部の下位はやや丸味をもつ形態のものとみられる。

須恵器

甕（１）　口縁部の小片である。口縁端部を直上につまみ上げる。復原口径40,0cm。

中国製輸入陶磁器

若干の中国陶磁器が出土している。

白　磁

椀（４・５　ａ・ｂ）　いずれも口縁部を玉縁状に肥厚させる白磁椀IV類である。４は底部と体部の一部が残存する。高台はわずかに削り出している。５の玉縁は余り厚くなく、折り曲げの痕跡が断面で明瞭に観察できる。ａは口禿の白磁皿IX類、ｂは白磁皿II類。

石製品

石斧（６）　刃部を大きく欠損する磨製石斧である。表裏面を磨いているほか、両側縁も磨いている。蛇文岩製で、残存長12.60cm、幅4.35cm、厚さ2.90cm。縄文中期以降のものである。

Ｊトレンチ出土土器（第32図、図版31）

ＳＤ060出土土器

寺域に関連する東西方向の溝から出土したもので、７世紀後半～８世紀初の時期を示す。

土師器

杯（14～16）　いずれも全形を知り得ないが、丸底風の杯である。底部と体部の境は明瞭でなく、胎土は精製され、底部はいずれも手持ちヘラ削りする。14、15の口縁部は外反気味である。16の口縁部はやや内弯する。内面は明瞭でないがヘラミガキを施す。

須恵器

蓋（７～９）　いずれも口縁部を「く」字状に内傾気味に直下に折り曲げ、身受部は高く明瞭である。７、８の天井部は完存しないが、高めの天井部の外面はヘラ削りし、他はヨコナデである。８の天井部の内面はナデである。７の復原口径は17.6cmで、８は16.6cmである。９は低い平坦な天井部であるが、外面は丁寧なヘラ削りを施す。復原口径18.0cm。

杯（10・11）　深めの杯である。10は口縁部と体部片があり、直接に接続しないが同一固体として復原した。高台は高めで開き気味である。ヘラ削りされた底部は体部下位まで及び、直線的な体部はわずかに外反する。復原口径15.0cm。11は底部と口縁部を欠失するが全体的には10に似ている。丸味のある体部下位はヘラ削りされる。

皿（12）　口径18.0cm、器高4.5cm。丸底風の底部の外面はヘラ削りで、底部と体部の境は丸味があり、明瞭でない。うすく直線的にのびる体部は斜め外方にひきあげる。

鉢（13）　平底の底部片があり、ここでは鉢と考えた。底部から体部へは丸味をもって立ち上がる。全形は知り得ない。全体に磨滅が著しいが底部はヘラ削りする。

Lトレンチ出土土器・石製品（第32図、図版31）

ＳＤ050から若干の土器と石製権が出土している。

ＳＤ050出土土器・石製品

土師器

小皿（19）　口径9.6cm、器高1.2cm。底部はヘラ切りである。

丸底杯（20・21）　20は口径8.6cm、器高3.0cm、底部はヘラ切り離し。内面はヨコナデ後ヘラミガキを施す。内底から体部に線状にコテ当て痕が残る。21は底部を欠失するが、復原口径16,4cm内面はヨコナデ後ヘラミガキを施す。

甕（22）　甕の口縁部と体部（上位）片である。器肉の厚い体部から口縁部は軽く折り曲げ、端部は丸くおさめるが、回転によるヨコナデでないため、わずかに波をうつ。胎土は砂粒の混入が目立ち粗い。茶褐色を呈する。

須恵器

甕（17）　底部と体部（中位以下）片が出土している。底部の外面には斜格子の叩き目が残り、内底には当て具痕があるが、カキ取りのため一部しか残らない。体部の内外面はヨコナデであるが部分的にヘラ削りする。

石製品

権（18）　頭部に紐穴を穿つ権（おもり）である。側面のうちの一面に部分的に煤が付着していることから滑石製石鍋の転用品とみられる。台形状を呈し、各面によって異なるが、上端幅1.7～2.2cm、下端幅3.0～3.3cm。４面に「××××」のジグザグの刻線文様と体部の中央と頭部付近に直線を連続的に巡らす。頭部に設けられた紐穴は両端が大きく径0.8cm、中央部径0.3cmである。吉村氏の権状製品の分類によるとII-b-2類になる。

Mトレンチ出土土器（第33図）

ＳＤ050出土土器・石製品

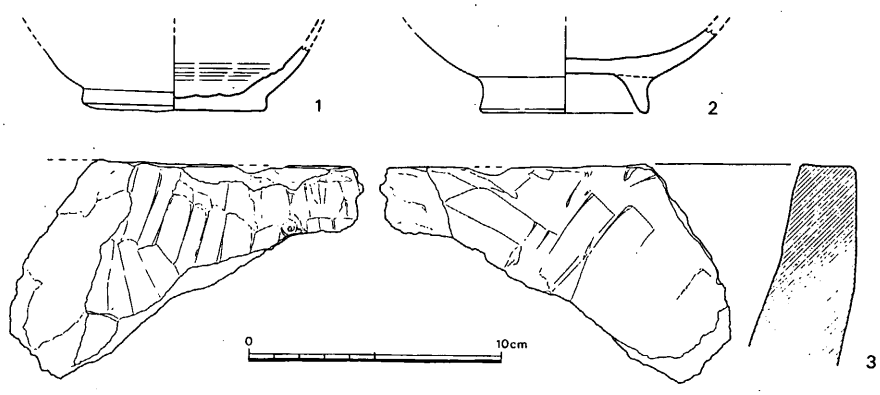
土師器

杯（１）　口縁部を欠失する。底部は平底であるが、平高台風に高くなる。内面にはヨコナデのロクロ目が明瞭に残る。底部はヘラ切り離し。

椀（２）　底部と体部の一部が残る。高台はやや高めで、開き気味である。底部から体部は丸味をもって立ち上がる。体部の全体はヨコナデである。

石製品

石鍋（３）　石鍋の口縁部と体部（上位）片である。全体に器肉が厚く、口縁部も同じ厚さで、上面を平坦に



第33図　Mトレンチ出土土器・石製品実測図

する。外面は平ノミで、斜めタテ方向に何段か削り調整する。内面は斜め方向に規則性はないが、削り調整する。全体の形状は不明であるが、プランとしては隅丸方形を呈する。タテの鍔（耳）を有する石鍋であろう。

3．近世遺構に伴う遺物

一字一石経（図版33）

塔の基壇中に埋納された経塚から多量の一字一石経が発見された。多くは文字が不鮮明であることから、調査後は埋納坑に埋め戻し保存することにした。ここで報告するのは比較的文字が鮮明で判読可能なものである。文字は小さいもので1㎝弱のものから、大きいのは10㎝前後のものまで様々で、一字ないし多字が表面のみ、表裏それに側面に書かれている。書かれている経典については『妙法蓮華経』である。経文の判読については九州歴史資料館学芸第一課の井形進の教示による。

1．一切諸疑
悔探心須叟信其福
為如比其有諸菩薩
無量却行道聞
（法華経　分別功徳品第十七）

2．發歓喜心
諸善男子
如来見諸衆生
樂於小法
徳薄垢重者
（法華経　如来寿量品　第十六）

3．三味得此
三味已心大勧喜
（法華経　薬王菩薩本事品　第二十三）

4．衆生常

5．神通
如来之力
（法華経　如来寿量品　第十六）

6．後　7．悪（表面）
随土（裏面）

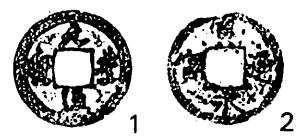
8．聞佛□音
（法華経　法師功徳品　第十九）

9．軍　10．園　11．徳　12．神　13．時　14．衆　15．足　16．无　17．善

18．阿人（裏面と側面にも文字）　19．坐　20．難　21．數　22．薩　23．龍　24．妙

銭貨（第34図）

宋銭と日本製銭貨が各一枚出土している。塔跡の表土および宝篋印塔の基礎部石組み中から発見した。1は「元豊通宝」（初鋳年代1078）2は「寛永通宝」（初鋳年代1636）である。いずれも近世以降に賽銭としてあげられたものであろう。



第34図　銅銭拓影

小　結

今回の調査で出土した土器は必ずしも多くはない。ここでは比較的良好な資料と言える瓦溜りSK025出土土器、それに当廃寺の伽藍および寺域と重要な関連を有するとみられる南北溝SD050、東西溝SD060の2条の溝から出土した土器について若干の検討を加えたいと思う。

瓦溜りSK025からは多量の瓦片が出土しているが、それには混りがみられず、ある時期に一括投棄されたものと考えられる。出土した土器も杯・皿・椀の3器種があるが、時期的に同一時期のものとみられ、混入はない。これら出土した土器類は形態・製作技法の上からみて、大宰府史跡から出土するものに類似しており、大宰府の土器編年の年代観から9世紀前半代（第Ⅰ四半期）に比定することが可能である。ここから出土した瓦は全て焼きヒズミがある不良品であるが、当廃寺に供給するために焼かれた瓦であり、少なくともこの時期までは寺が存在した事を示す貴重な資料と言える。

次に、2条の溝から出土した土器について検討してみよう。

南北溝SD050からはかなりの時期幅をもった土器が出土している。この溝はH・L・M・Nの各トレンチで確認されたが、出土した遺物はHトレンチで検出した溝ものが量的には最も多い。

この溝から出土した土器は8世紀代のものを若干含むが、中心となるのは9世紀代のものであり、最も新しい時期のものとしては11世紀前半代のもので、おそらく、この溝の埋没時期を示すものと考えられる。南北溝の開削の時期は詳らかでないが、出土土器からみると、最も盛行したのは9世紀代（前半代）とみられる。この溝の埋没の時期を最も新しい遺物である11世紀前半代とすると、寺が廃絶された後も何らかの形で存続していたことになる。

一方、東西溝SD060出土の土器についてみると、この溝が確認されたB・J・M・Oの各トレンチの中で、Jトレンチから若干の土器が出土している。この少ない資料から確定的なことは言えないが、溝の開削は遅くとも7世紀後半（末頃）から8世紀初頃ではないかとの推測が可能であり、その埋没（廃絶）の時期も南北溝に比べ、かなり早い年代（8世紀後半頃）と考えられる。

発掘範囲が狭かったこともあり、これらの出土土器資料で、確定的なことは控ておくが、この2条の溝が当廃寺の創設に大きく関った事は出土土器の年代からみて事実であろう。

以上の3遺構出土の土器を含め、今回の調査で出土した土器類を概観すると、8世紀代の年代を示す土器は少なく、9世紀代のものが目立っている。そして、これらの土器には豊前地方でみられる土器の製作なり形態の特徴と言うより大宰府周辺で出土する土器と類似している。先述した瓦にも大宰府の影響が強くみられることと一致していることも、当時の社会情勢を示していると言えよう。

参考文献

吉村靖徳　「権衡に関する一考察―福岡県内出土権状製品の検討と課題―」『九州歴史資料館論集20』
九州歴史資料館　1995.3

Ⅵ　結　語

以上、遺構と遺物の概略を記してきたが、ここで若干のまとめをしてみたい。

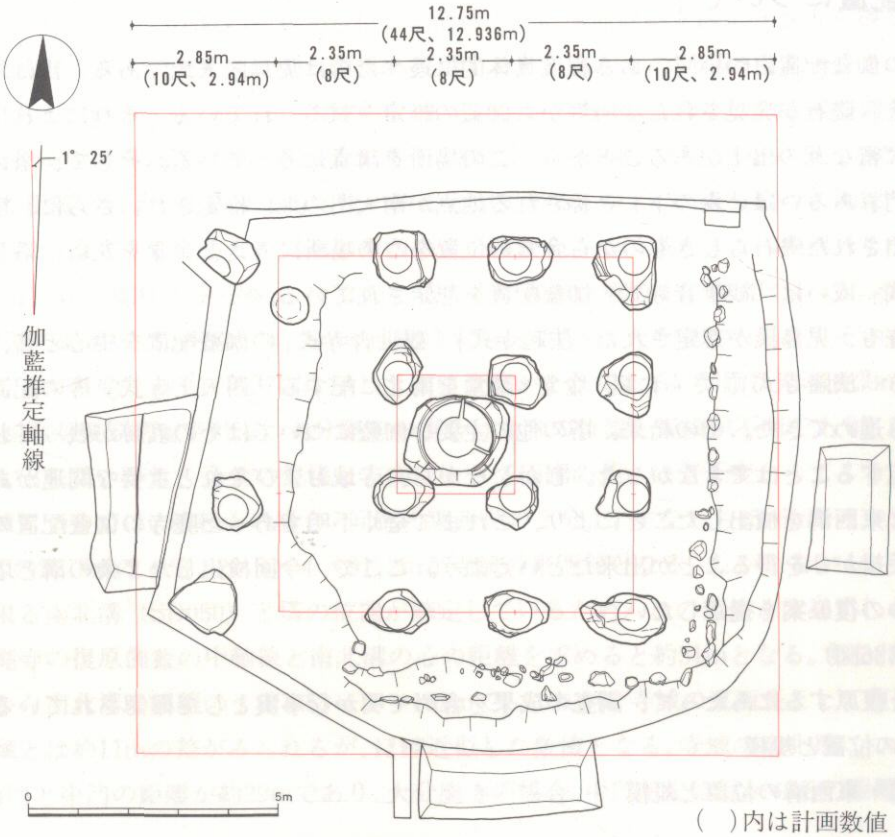
1．塔について

A．建物の規模と単位尺

塔跡については先に記した通り礎石13個が極めて良好な状況で残存しており、塔建物の平面復原が可能である。柱間は四天柱、側柱とも2.35m等間である。この柱間距離から単位尺をもとめると、整数値８尺等間とした場合、2.35÷8＝0.294となり、１尺＝0.294mが求められる。この単位尺で、塔建物の一辺長を求めると、2.35×3＝7.05m＝24尺となる。

B．基　壇

次に、塔基壇について検討してみよう。現状は基壇の規模を示しておらず、掘り込み地業の線から基壇規模を復原すると、一辺長12.75mが求められる。今、この数値を先の単位尺で求めると、12.75÷0.294＝43.367となり整数とはならない。この掘り込み地業の線は必ずしも基壇の規模と一致するとは言い難いので、これに近い整数値44尺＝12.936mをもって、基壇の一辺長とすることはあながち間違いではなかろう。石松好雄氏は近年、九州内の塔を集成し、建物一辺長と基壇一辺長の関係を検討され、基壇幅は一辺長の２±0.2倍の範囲内であり、おおよそ２倍とみてさしつかえないとの考えを出されている。当廃寺もこの例に近いものである。基壇の高さにについては、版築の始まる線と礎石上面のレベル差が約1.12mであり、４尺前後のものと推定される。



第35図　塔建物ＳＢ001推定復原図

C．塔心礎

ひときは目立つ心礎の立派さは大分廃寺を象徴するものであるが、心柱のくり込みは径0.755～0.80mである。心礎については石田茂作氏の研究があり、それによると心礎の柱座径と高さとの割合、塔建物平面の一辺長との割合によって、建物の規模が推定されることを示されている。このことから、当廃寺については従来より三重塔であることが認められており、今回もとくに否定する根拠もないが、再確認してみたい。これからすると、高さは柱座径の平均値0.778×40＝31.12mとなる。また、塔の一辺長7.05mを柱座径で割ると、7.05÷0.778＝9.062となり、石田氏が言われる、塔の一辺長が柱座径の9または10倍は三重塔と推定されるとする説に従えば、当廃寺の塔は三重塔であったといえよう。

また、心礎の側面にみられる線刻は伽藍造営の基準線と密接に関連するものとみられる。今回検出した南北溝と東西溝の方向は、この心礎の線刻を延長した線と一致する。近年の寺院跡の調査成果によると、この時期の寺院は金堂が最初に建てられた例が多いことが判明している。当廃寺の場合はこれに反して、塔が最初に建てられた可能性を示唆することは出来ないであろうか。

以上の検討結果をまとめると、下記のようになる。

a．単位尺　　1尺＝0.294m
b．塔建物一辺長　24尺（7.05m）
c．基壇一辺長　44尺（12.936m）
d．基壇の高さ　4尺前後（1.2m前後）
e．塔の高さ　105.85尺（31m前後）三重塔

2．伽藍配置について

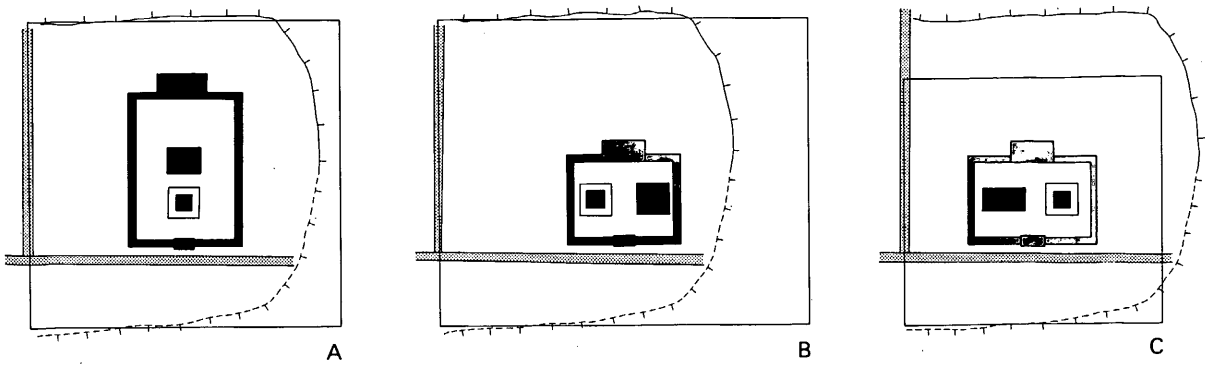
大分廃寺の伽藍配置について、ある程度具体的に述べたのは児島隆人氏である。氏は塔の出土瓦の分布状況と、礎石が発見された場所等から伽藍の推定を試みられている。それによれば、塔の後方（北側）に密な瓦の出土があることから、この場所を講堂に考えている。そして、塔跡より南方の俗称「大門」あるいは「森の下」と称される地点が南大門の地に推定され、さらに、塔の西側の田から掘り出された礎石らしきものから金堂の位置をこの場所に考え、金堂を左に、塔を右に配する「法起寺式」或いは「観世音寺式」伽藍配置を想定されている。

今回の調査も、児島氏が想定された「法起寺式」「観世音寺式」の伽藍配置を中心とし、また金堂を東に配する「法隆寺式」、さらに塔・金堂・講堂を南北に配する「四天王寺式」等の配置をも考慮に入れながら進めてきた。その結果、塔の他の主要な伽藍についてはその痕跡が残っておらず、その位置を確定することはできなかった。しかしながら、寺域およびそれと重要な関連があると思われる南北溝と東西溝を検出したことにより、これまで全く不明であった廃寺の伽藍配置の復原を考える有力な手掛かりを得ることが出来たといえよう。ここで、今回検出した2条の溝と塔との位置関係から一つの復原案を提示したい。

復原案（第36図）

伽藍配置を復原するにあたって、調査の成果を含めて明かな事実として確認されているのは、

1．「塔」の位置と規模
2．南北溝・東西溝の位置と規模



第36図　大分廃寺伽藍配置復原案

3．現状の地形がほぼ旧地形を残しており（早い時期に上面は削平を受けたとみられ、南辺部は基盤整備により若干の改変がある）、その地形的制約からみて寺域がある程度決められる。この3点である。

以上の3点をもとに、先述の代表的な伽藍配置を図上で検討してみると、第36図のようになる。この復原案の内、3点の条件を満たしているものは第36図のCであろう。すなわち、Aの「四天王寺式」とBの「法隆寺式」は南北溝と東側の段落ちからみて位置的に東側に寄り過ぎる。また、ここでは図示しなかったが、この3つの想定伽藍を東向きにした場合は、いずれも南側に寄りすぎ、さらに道路（通路）を想定した時、現状からみて考えにくく、このような諸条件を考慮すると、Cの復原案が最も妥当で、ここではCの案について若干の検討を試みた。第37図はいわゆる「法起寺式」伽藍配置である。復原にあたっては石田茂作氏の『飛島時代寺院址の研究』を参考にした。

今、決定している塔心礎と東西溝（SD060）の心との距離は21.20mである。溝の幅が4.0m前後あり、もし南面の回廊を設定すると、少なくとも東西溝より3.0m北側（内側）に寄った距離が必要である。すなわち、塔の心からの距離が最低18m前後の所に南面回廊を設定せざるを得ない。そこで、石田氏の「法起寺式」の伽藍と地割り復原を援用すると、法起寺の回廊の南北の長さは16.5×2＝33m前後である。すなわち、中門から塔の中心まで16.5mであり、この2倍の距離に講堂がくることになる。大分廃寺の場合、南方に東西溝があり、最大18mの距離しかとれないが、この法起寺の16.5mは妥当な距離と言え、そのまま当てはめることが出来る。ゆえに、大分廃寺の回廊の南北長は法起寺と同じに復原できる。また、回廊の東西の長さは法起寺では塔と金堂の距離の2分の1の距離、22.8÷2＝11.4m（伽藍の中心線）、すなわち塔の心からの距離の4倍11.4×4＝45.6mとなっている。塔と金堂の距離22.8m×2＝45.6mが回廊の東西長である。大分廃寺の場合もそのままこれを当てはめることが可能であり、第37図に示した伽藍復原がそれである。回廊は南北長33m、東西長45.6m前後の回廊が復原想定される。大分廃寺の場合は金堂の位置と規模が不明であり、塔の位置は動かすことは出来ないから、金堂の規模と方向によって回廊の長さは若干変わってくる。

次に寺域については、法起寺の場合、回廊の東西長の2分1、すなわち45.6m÷2＝22.8mが単位となり、この22.8mの4倍、22.8×4＝91.2mが寺域の東西長となる。しかしながら、大分廃寺の場合、西を限る南北溝（SD050）と塔の位置が確定しているため、この数値とは必ずしも一致しない。いま大分廃寺の復原伽藍の中軸線と南北溝の心の距離を求めると約51mとなる。すなわち、復原伽藍の中心線から南北溝の距離の2倍、51×2＝102mで、これが、寺域の東西長として復原できる。法起寺の寺域とは約11mの差がみられるが、ほぼ近似した数値となる。寺域の南北長については法起寺の場合、南門と中門の距離が約29mであり、大分廃寺の場合、中門想定位置からその距離をとると、南

側の段落ち付近にくる。大分廃寺の場合、南門跡については、児島氏の想定では段落ちのさらに南側の「大門」の地がそれに当てられている。今回の調査でもその確認は出来てないが、この段落ちは境界を示すものとして理解でき、法起寺と同じ南門の場所を設定するならばこの付近は妥当な位置といえる。北方で検出した東西方向の柵列状遺構を北限とすると、寺域の南北長は約94mである。法起寺の場合は33＋28.8×２＝90.6mであり、東西長と同じく南北長は大分廃寺の方が４mほど長い。

A．大分廃寺の伽藍配置は「法起寺式」もしくは「観世音寺式」

B．回廊の東西長　45m

　　南北長　33m

C．寺域

　東西長102m

　南北長 94m

上記のような想定復原が出来る。

以上、塔および塔を中心として今回検出した南北溝と東西溝の関係から大分廃寺の伽藍の想定復原を検討し試案の一つを提示した。

当廃寺を全国的に著名な古代寺院として知らしめたのは、なんと言っても、塔跡に残る精巧かつ丁寧に造られた心礎とまれにみる塔基壇の保存状況の良好さであろう。そして、ここから出土する華麗な文様をもつ新羅系の軒瓦は豊前地方に所在する天台寺跡・垂水廃寺・椿市廃寺などとの関連を含めて、北九州すなわち大宰府の古代寺院の在り方と半島との関係を考える上で重要なものとして、早くから関係者の間で注目されていた。

調査の結果、予想に反して塔の残存状況とは異なり、他の主要堂宇については、顕著な遺構の検出確認は出来なかった。しかしながら、寺域または重要な関連を示すと思われる南北溝と東西溝を確認できたことは今回の調査の大きな成果といえるだろう。この２条の溝を検出したことにより、幾つかの伽藍配置の復原を検討してみた。その結果、先に児島隆人氏が想定されていた塔を東側に、金堂を西側に配置する「法起寺式」の伽藍配置が現状の地形・塔・溝との関係を考慮すると、最も自然で妥当な想定復原案との結論を得るに至った。しかも、位置関係が数値的に法起寺の伽藍・寺域に非常に近似していることも、この想定復原案を提示する有力な根拠ともなった。

当廃寺の創建については、従来から言われている天台寺跡を代表をする新羅系軒瓦が創建期のものとしてほぼ確定出来るのではないかとの結論を得ることが出来た。中門の想定地の前面に設けられた東西溝から出土した土器は７世紀後半代（末頃）８世紀初頃のもので、その創建の時期を示している。ここで疑問として残るのは、先述したように８世紀代の遺物が他の遺物に比較して極めて少ないことである。若干の土器と丸・平瓦においては僅かに認められるが、軒瓦については空白の時期ともいえる。そして９世紀代の初めになると、また、豊富な出土状況がみられる。断定はできないが、創建後、何らかの理由で８世紀代の一時期には衰退し、また９世紀代になって盛期を迎えたとも考えられる。児島氏が台地の南方の「大門」と瓦の散布状況から南門跡に想定されているが、この時期に南門もしくは山門的なものが、この場所に設けられたと考えることもあながち否定できないであろう。

５次にわたる調査によって結論的なものは得られず、むしろ残された課題が多い。主要堂宇について、その痕跡を検出できなかった理由として、ある時期に削平された可能性をあげることができ

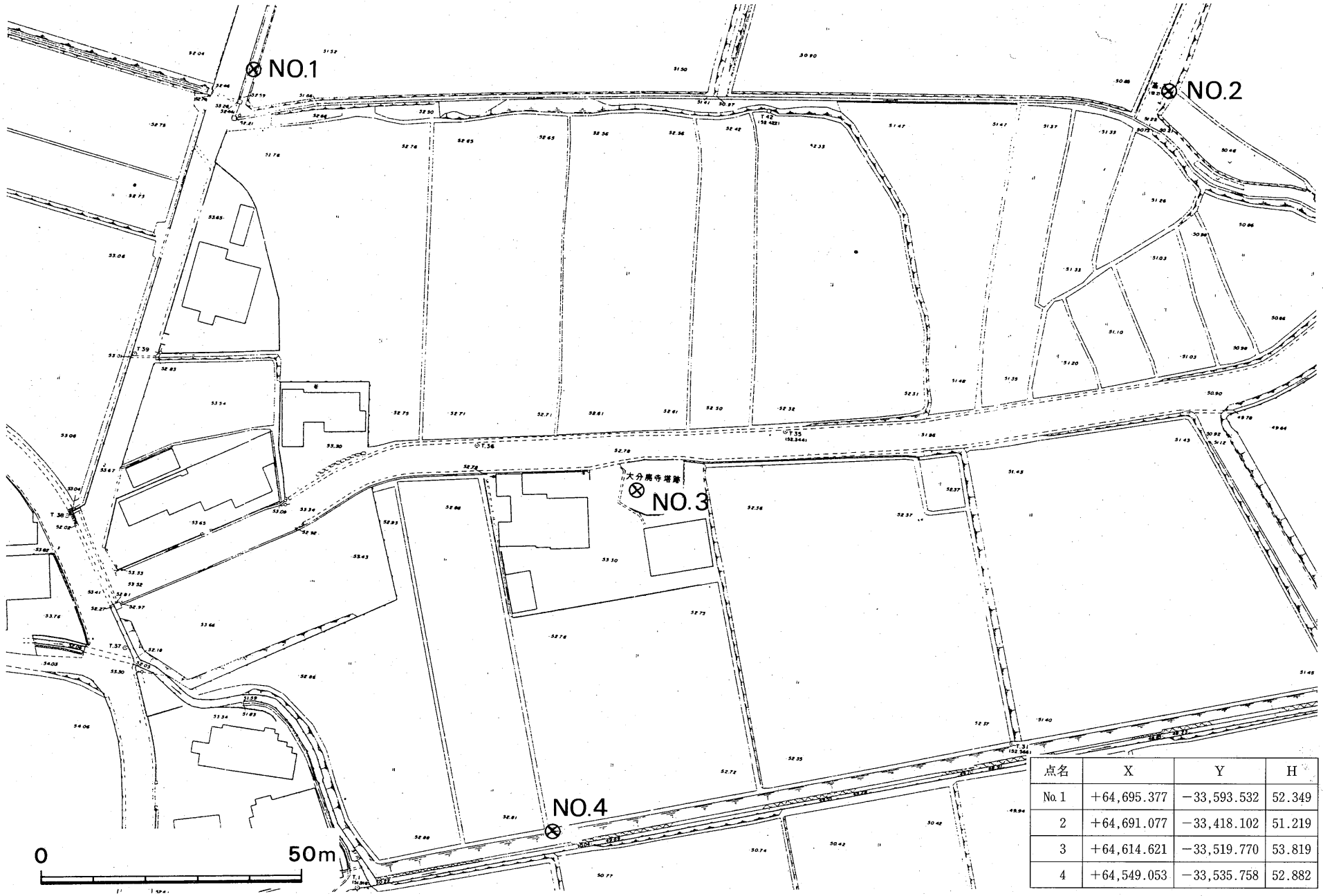
る（瓦の散布状況が低地を含めた広範囲にわたっているのは、台地部分を削平して、盛土した可能性があり、遺構面上に遺物の包含層があまりみられない）。しかしながら、今後の調査でその手掛かりを摑むことが出来ない訳ではなく、将来、全面的調査によってより明確な事実の確認が可能であり、その必要性を指摘しておきたい。いずれにしても、この台地一帯が当時の政治・社会体制のなかで、権力なり地位を象徴する寺院建立の地に選定された歴史的事実は否定出来ない。

参考文献

石田　茂作　『総説飛鳥時代寺院址の研究』　第一書房　1977.5
石松　好雄　「九州における古代寺院の塔について」『古代化談叢』　第30集（上）
　　九州古代文化研究会　1993.8
児島　隆人　「筑前國大分廃寺創立に関する一考察」『考古学雑誌』　10巻12号　1939.11
小田富士雄　『九州考古学研究—歴史時代編』　学生社　1977.1



第37図　大分廃寺伽藍配置推定復原図



点名	X	Y	H
No.1	+64,695.377	−33,593.532	52.349
2	+64,691.077	−33,418.102	51.219
3	+64,614.621	−33,519.770	53.819
4	+64,549.053	−33,535.758	52.882

第38図　大分廃寺実測基準点配置図

図　　版

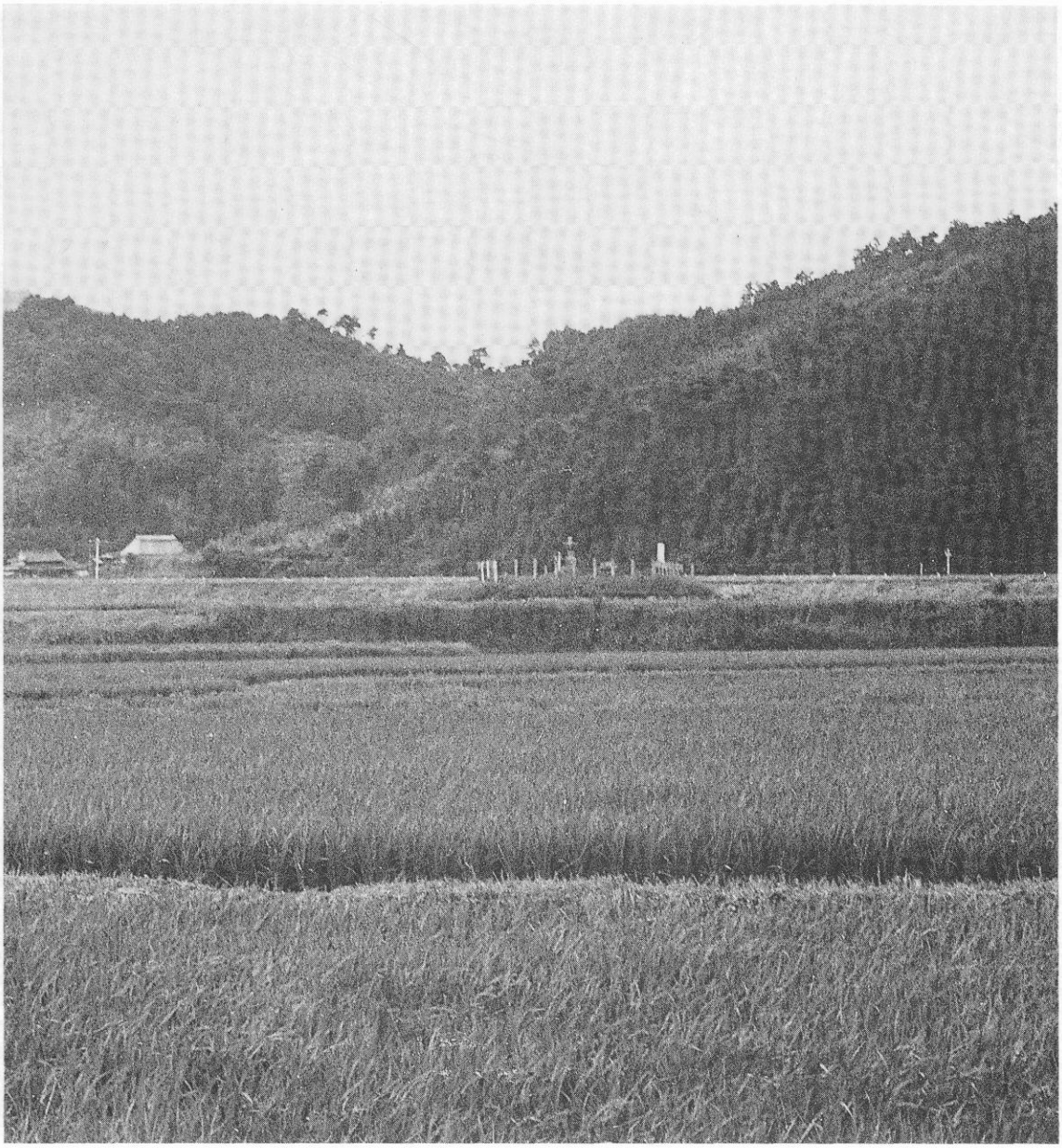


大分廃寺周辺航空写真（平成 5 年撮影）

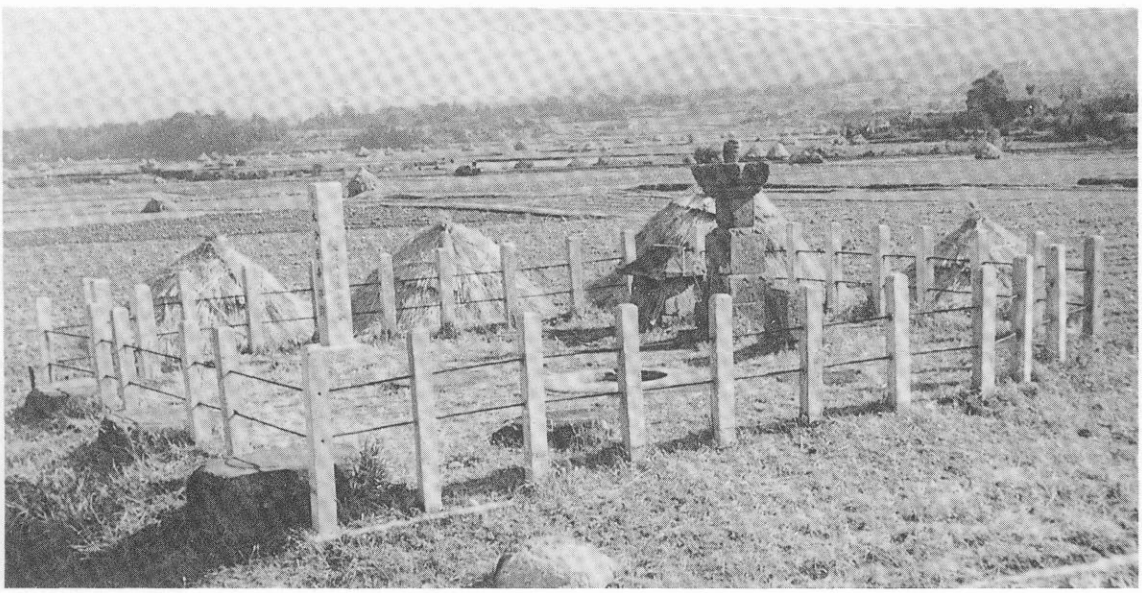


塔跡整備状況（西から）平成 4 年撮影

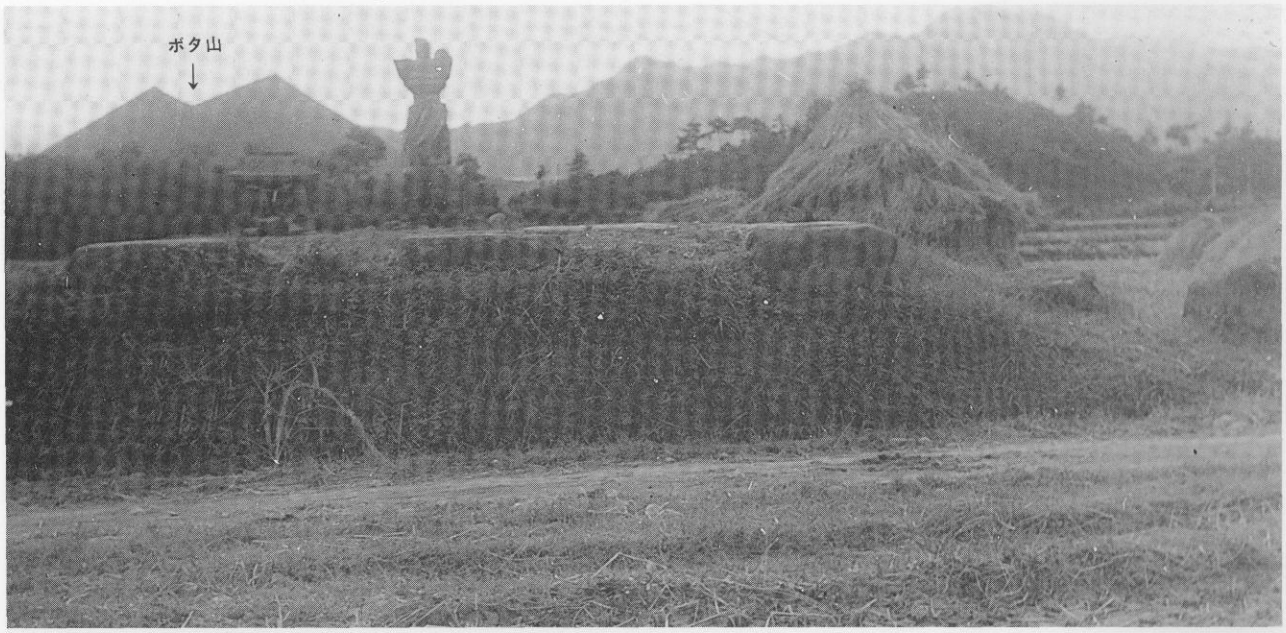
図版 2

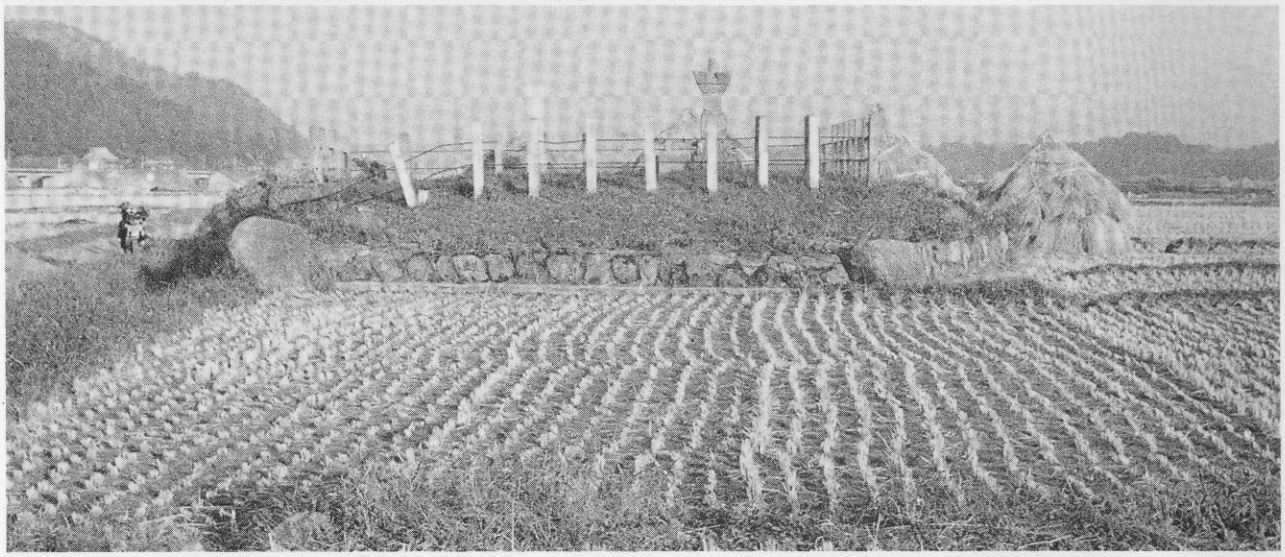


大分廃寺全景（南東から）昭和30年代後半頃撮影



大分廃寺塔跡（北西から）昭和35年頃撮影





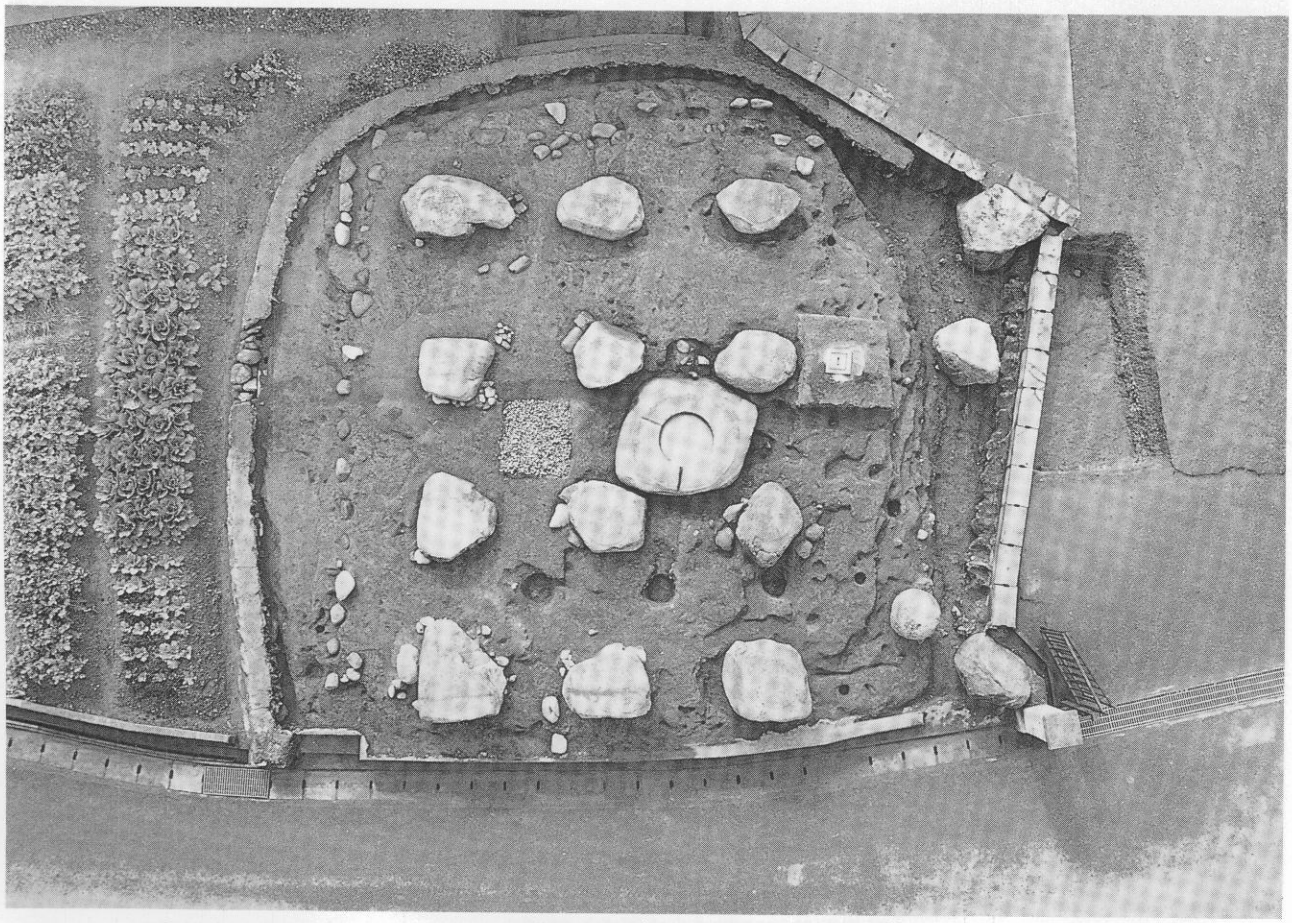


(上)塔跡（北西から）昭和30年畠中大三郎氏撮影（中)塔跡全景（西から）昭和44年石丸洋撮影
(下)塔跡心礎（昭和44年石丸洋撮影）

図版 4



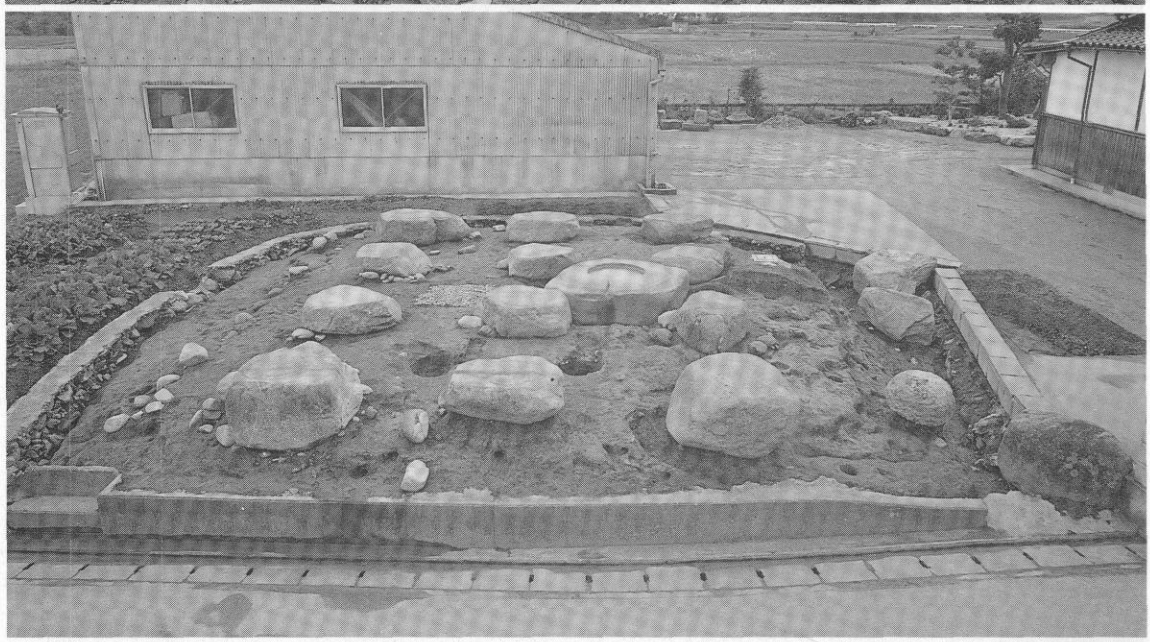
大分廃寺全景（空中写真）



塔跡全景（空中写真）



塔跡全景
（東から）



塔跡全景
（北から）

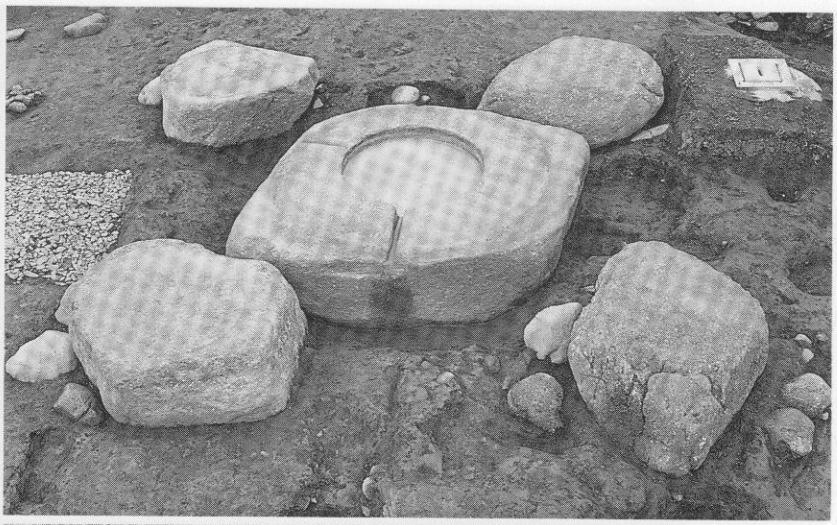


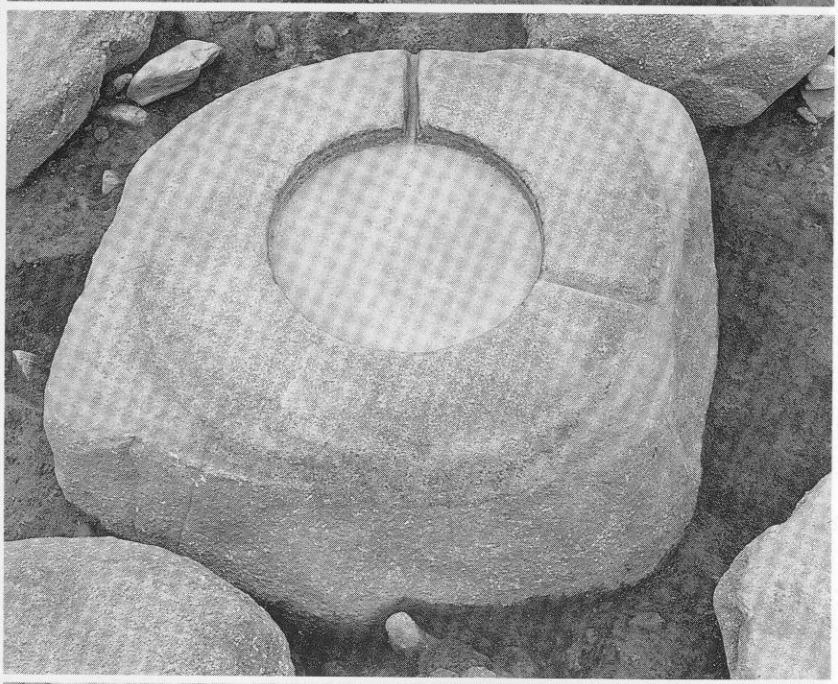
塔跡全景
（西から）

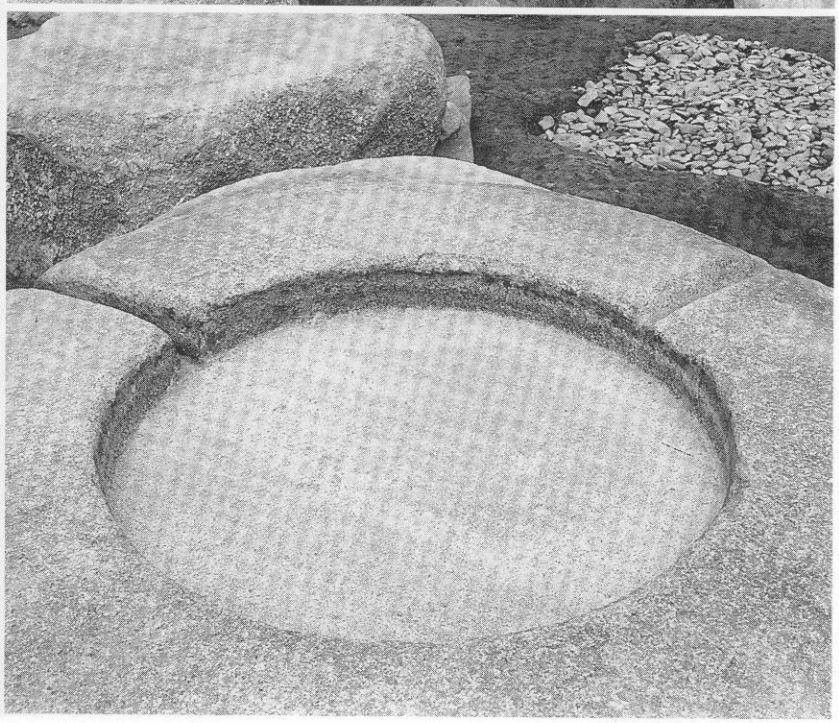


▲
塔心礎側面の線刻
▼





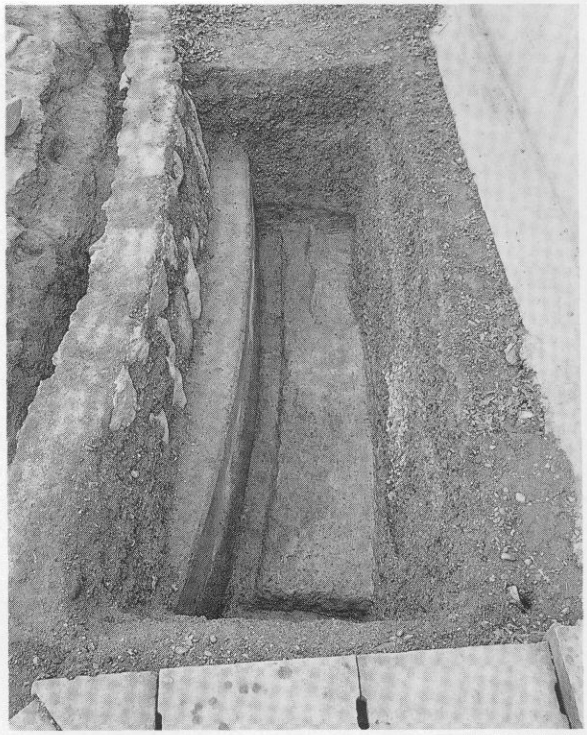




(上)塔心礎・四天柱礎石 (中)塔心礎全景 (下)塔心礎細部



▲塔跡西側階段部調査区全景（北から）
中央に掘り込み線がみえる



▶
塔跡
南側階段部
調査区全景
（西から）

▼塔跡基壇版築状況（断面）

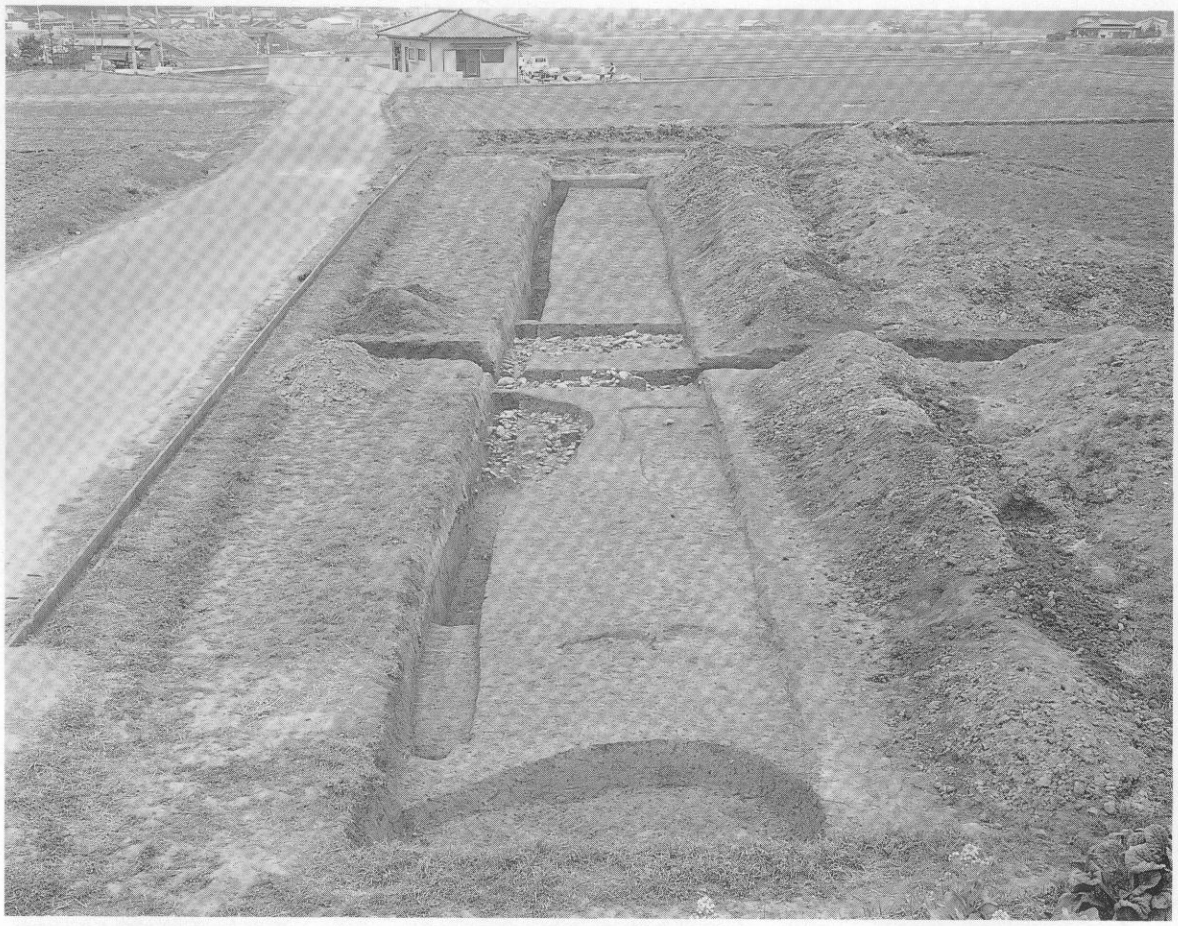






（中）柱穴と掘り込み地業断面　（下）塔跡掘り込み地業と版築状況

図版 8



Aトレンチ全景（西から）



Aトレンチ部分（北から）



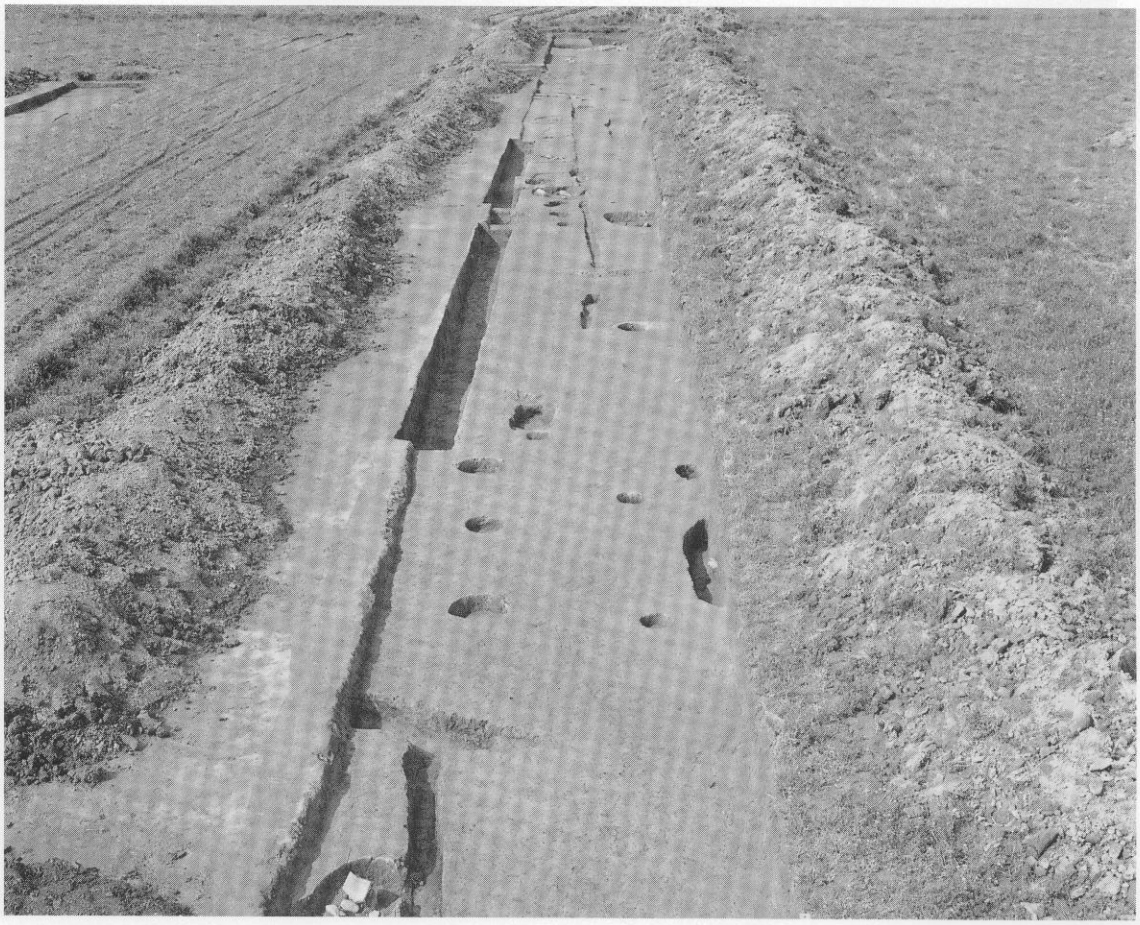
Aトレンチ部分（南から）



Bトレンチ全景（北から）



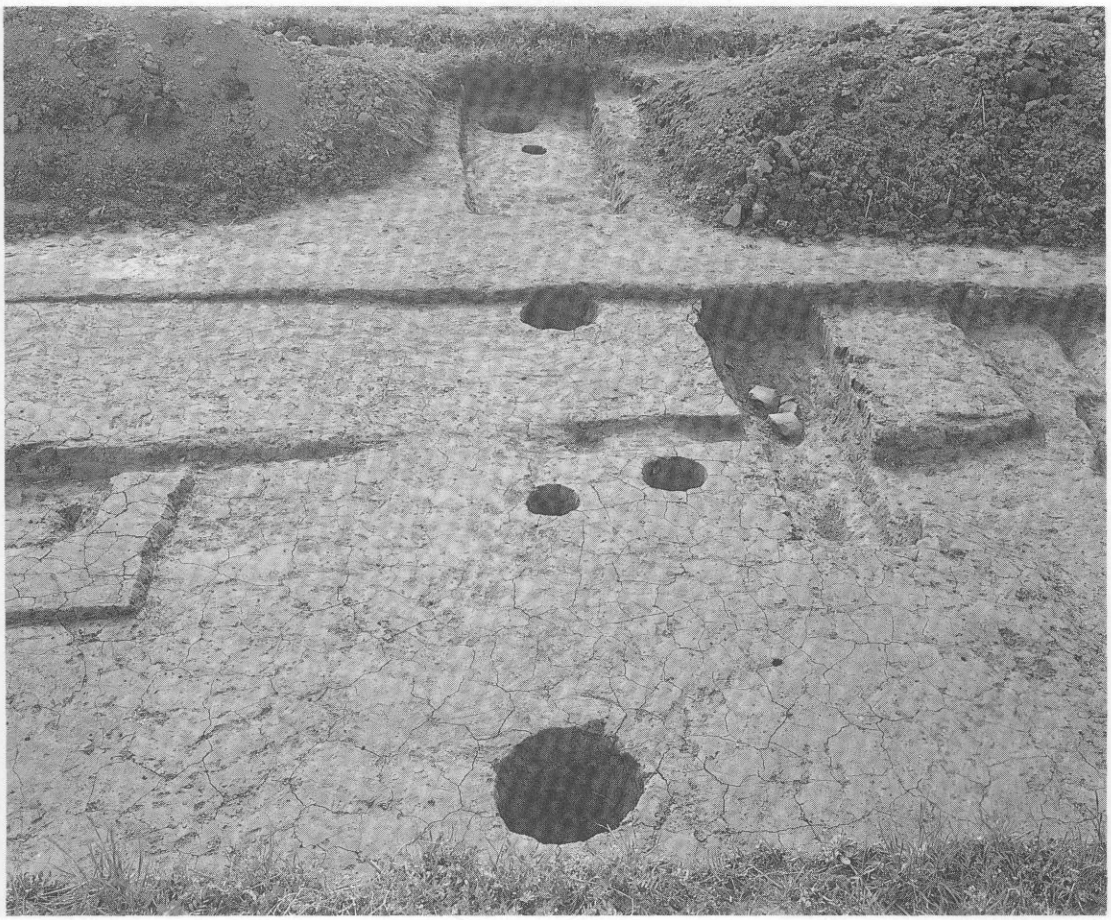
Cトレンチ全景（西から）



Dトレンチ全景
（南から）



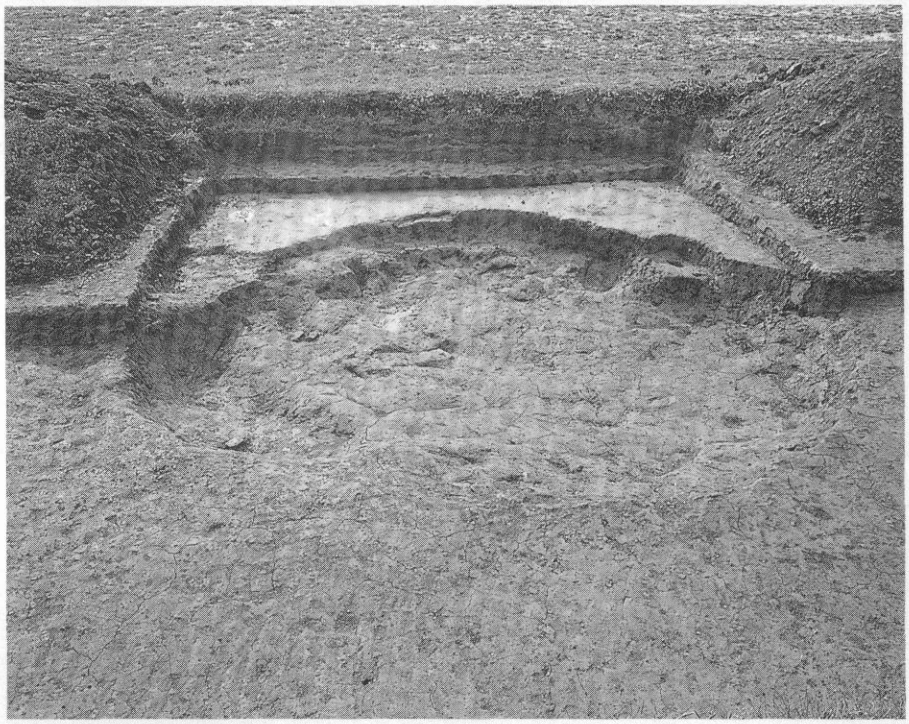
Dトレンチ北半部（南から）



Dトレンチ柵状遺構SA030（東から）



▲Dトレンチ瓦溜りSK025
瓦出土状況（西から）



Dトレンチ瓦溜りSK025
完掘状況（東から）



Dトレンチ鋳造関連遺構
SX035（南から）

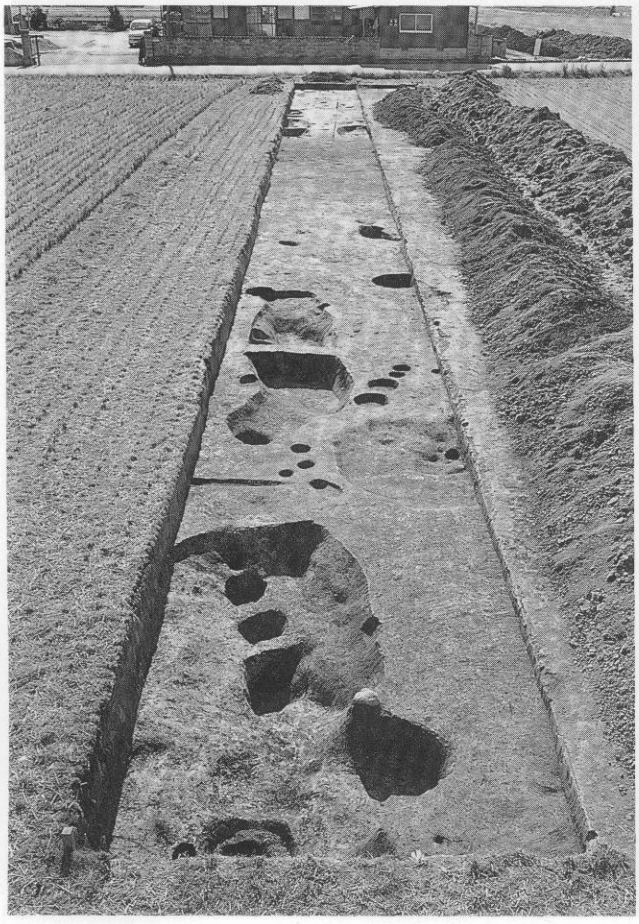
図版12



Eトレンチ全景（西から）



Fトレンチ全景（南から）



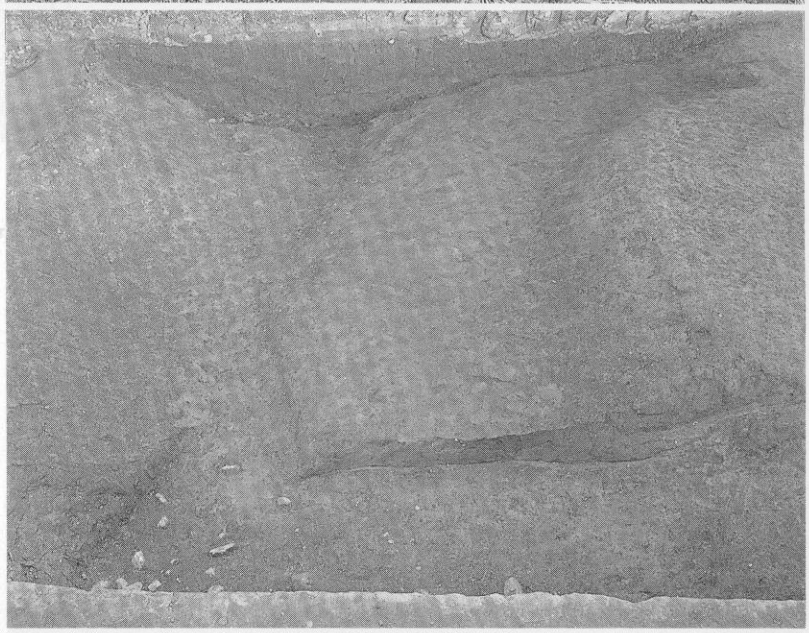
Gトレンチ全景（北から）



Hトレンチ全景（西から）



Hトレンチ南北溝SD050
（南から）



Jトレンチ東西溝SD060
（東から）



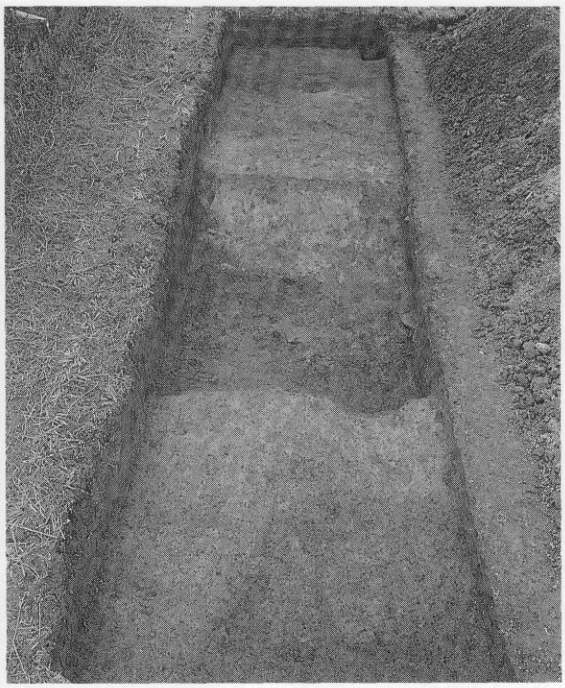
Jトレンチ全景（北から）



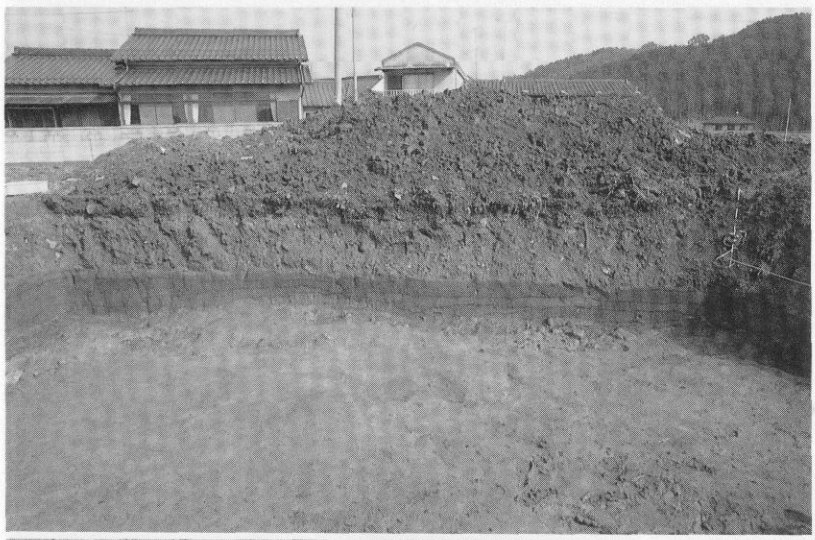
Iトレンチ全景（南から）



Kトレンチ（西から）



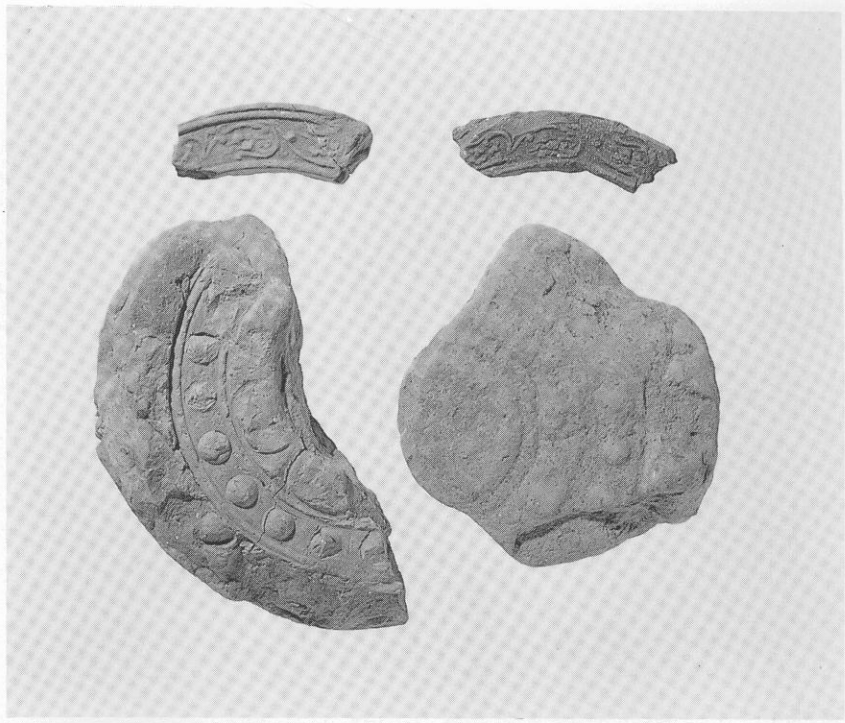
Lトレンチ（東から）中央に南北溝SD050



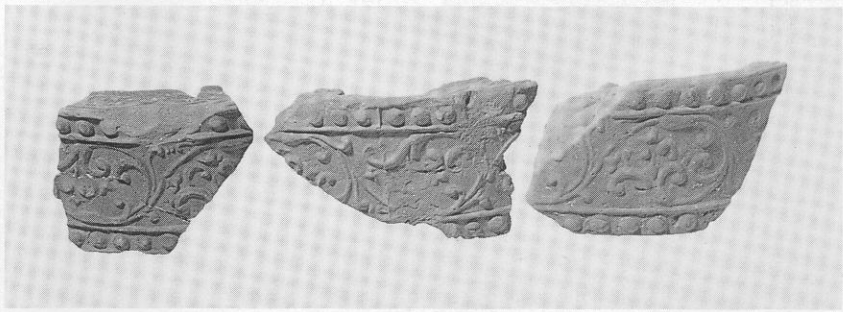
Mトレンチ東西溝SD060
（西から）



Oトレンチ東西溝SD060
（北東から）



軒丸瓦II類



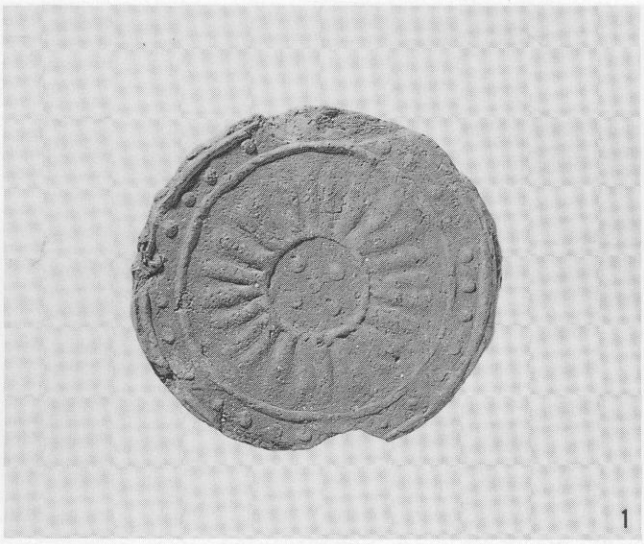
同顎面文様

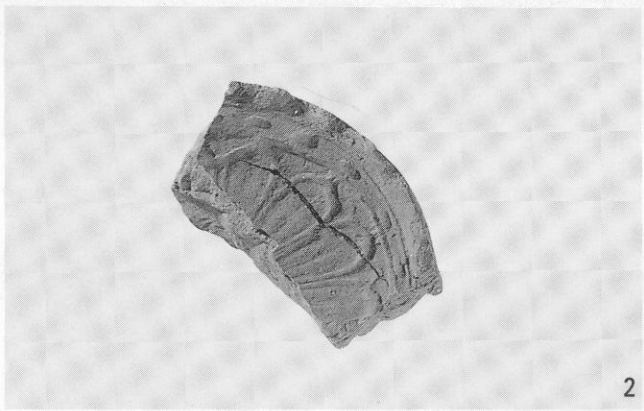


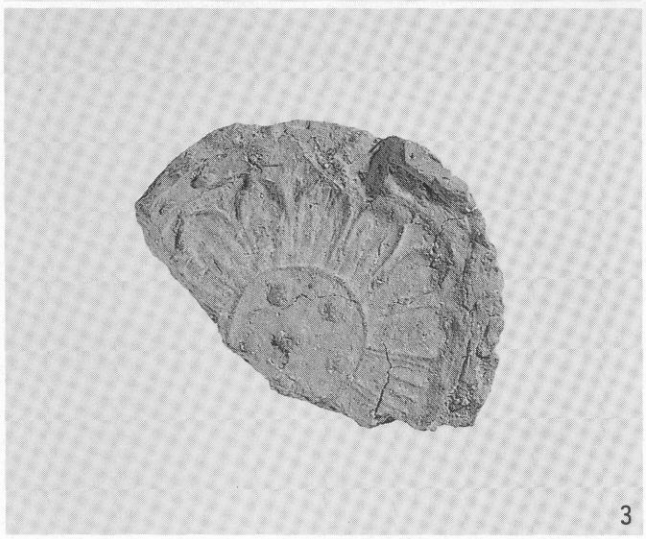
軒丸瓦IIIA類

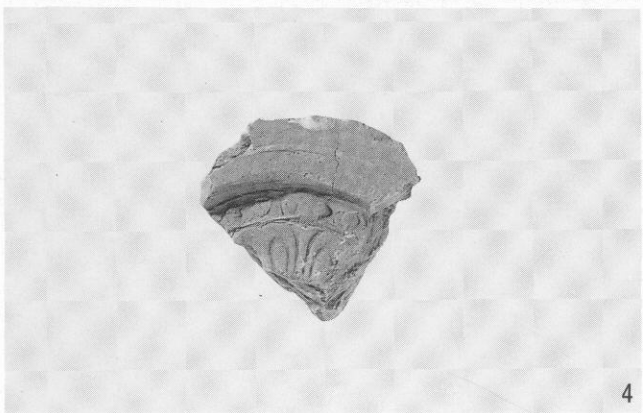
出土軒丸瓦

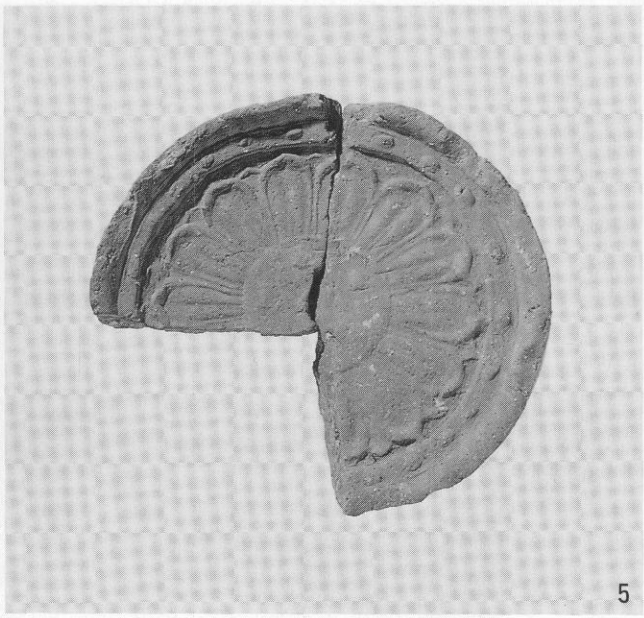
図版16

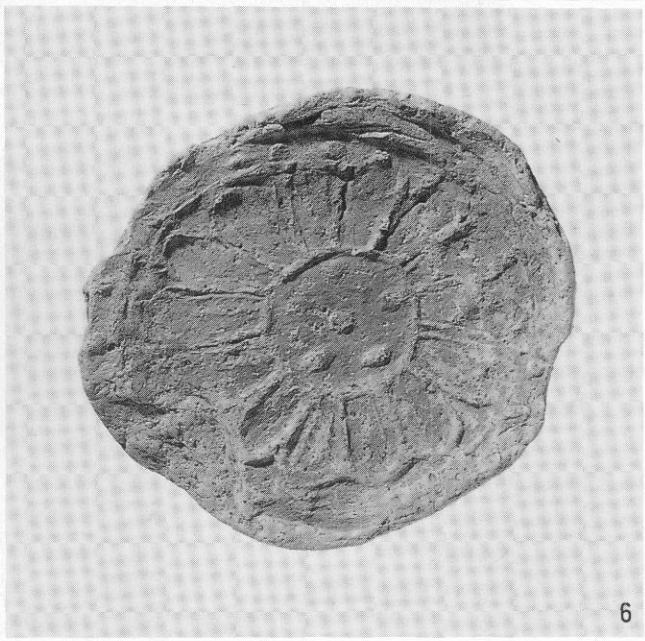

1


2


3

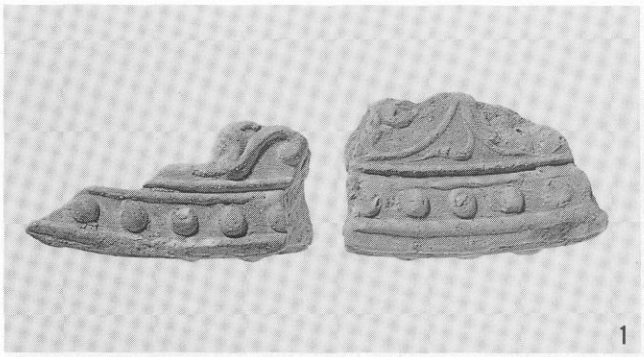

4

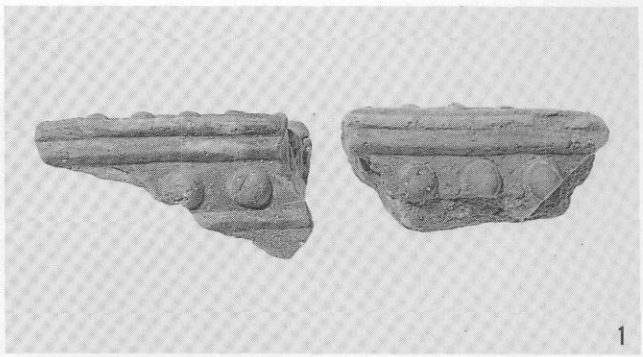

5

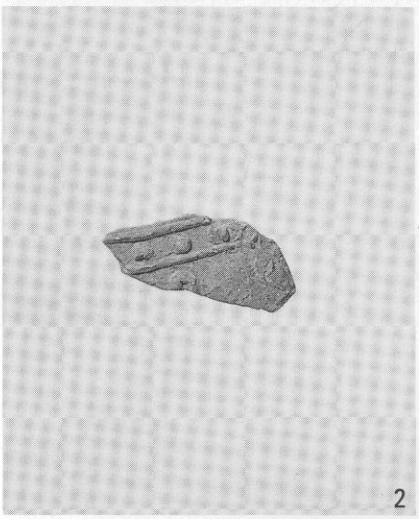

6

1．軒丸瓦　ⅢB類
2．軒丸瓦　Ⅳa類
3．軒丸瓦　Ⅳb類
4．軒丸瓦　Ⅴ類
5．大宰府政庁出土Ⅳ類同笵例
6．筑前国分寺跡出土Ⅳ類同笵例

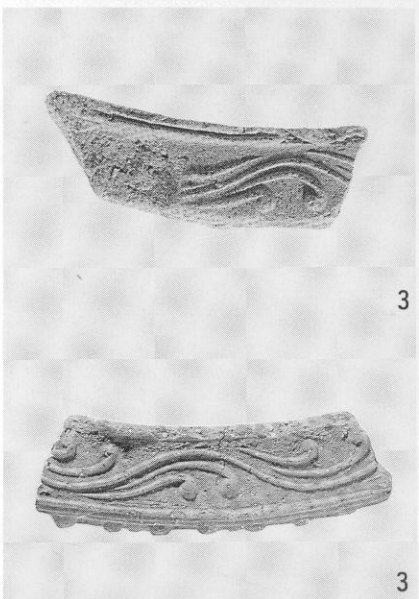
出土軒丸瓦および参考資料



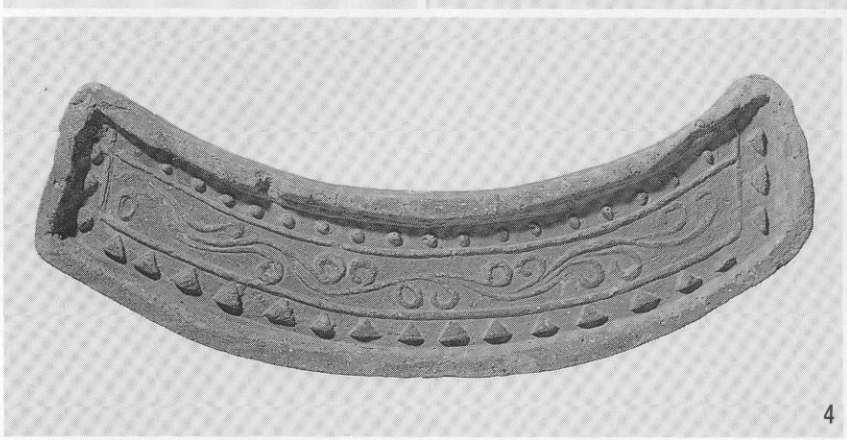












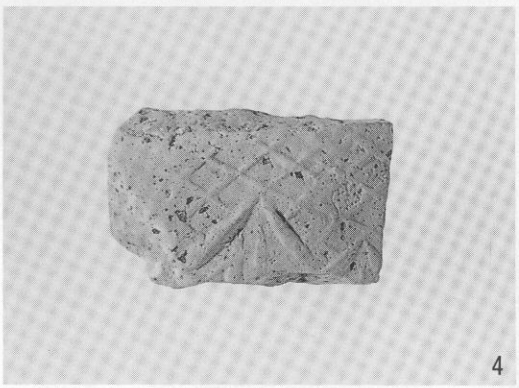


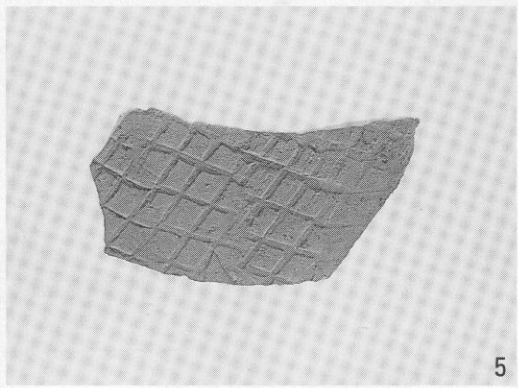
出土軒平瓦　1．Ⅰ類　2．Ⅱ類　3．Ⅲ類　4．Ⅳa類　5．Ⅵb類（Ⅵb類は大分八幡宮所蔵）



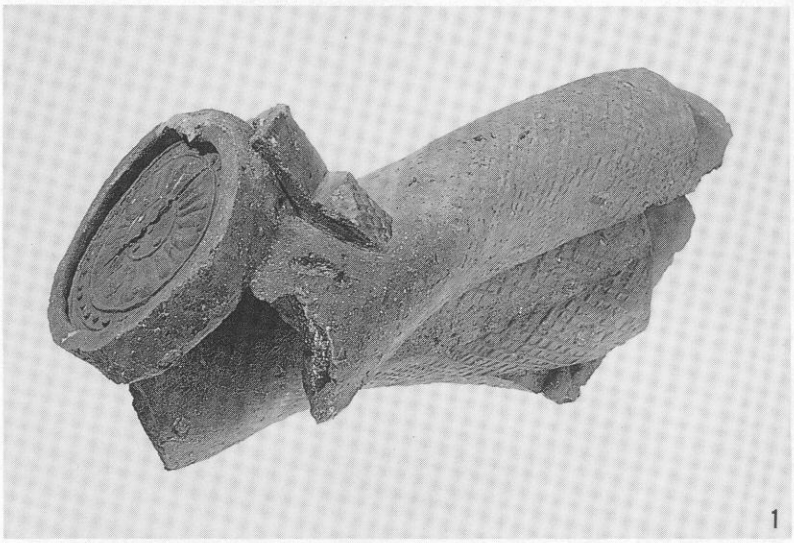






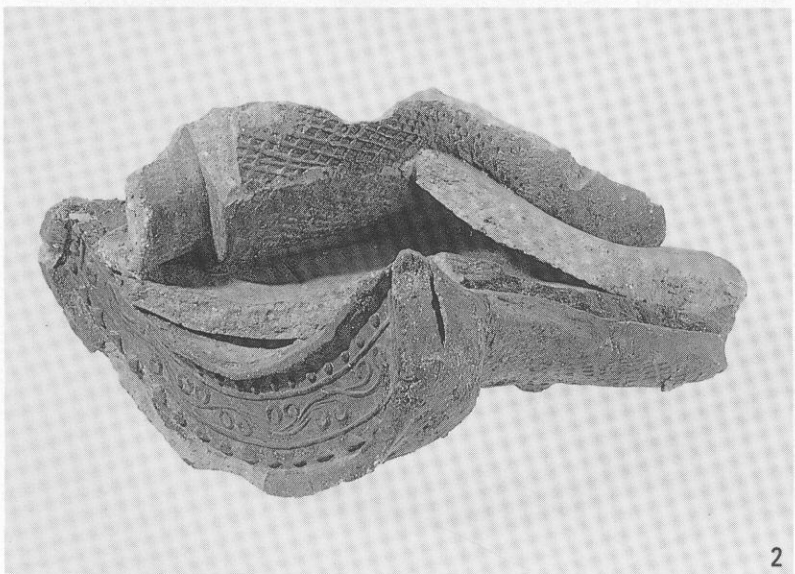


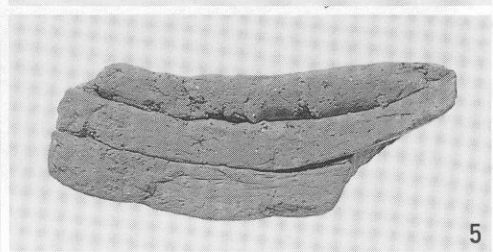
出土軒平瓦と文字瓦
1．Ⅴa類
2．Ⅴb類
3．Ⅵ類
4．文字瓦
5．文字瓦
（Ⅴb類は
大分八幡宮所蔵）



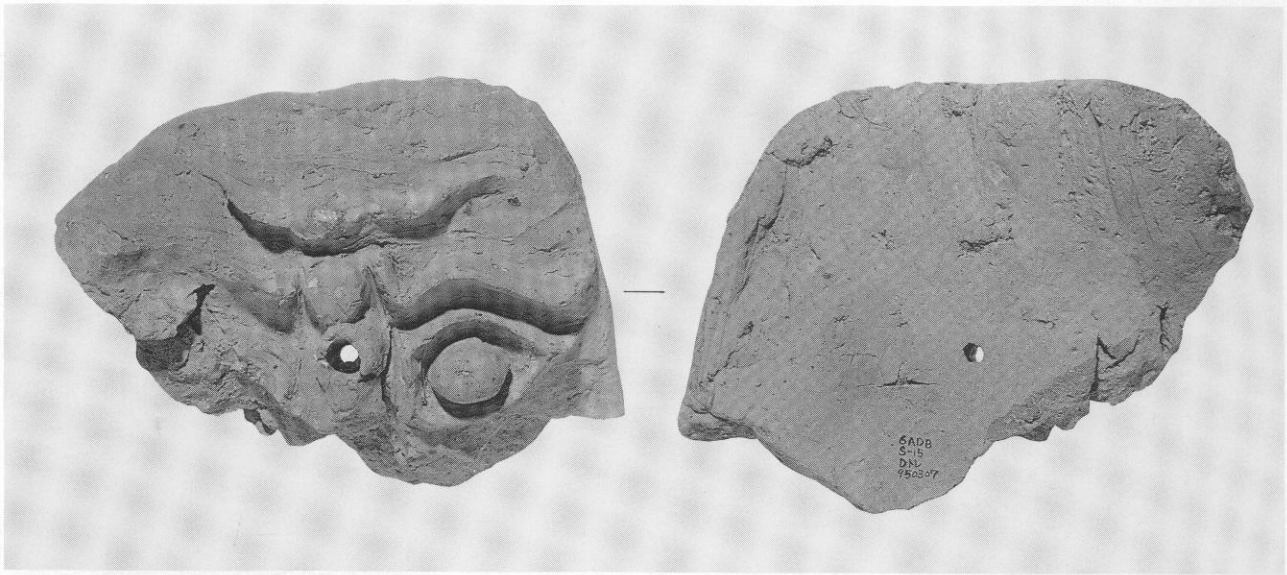




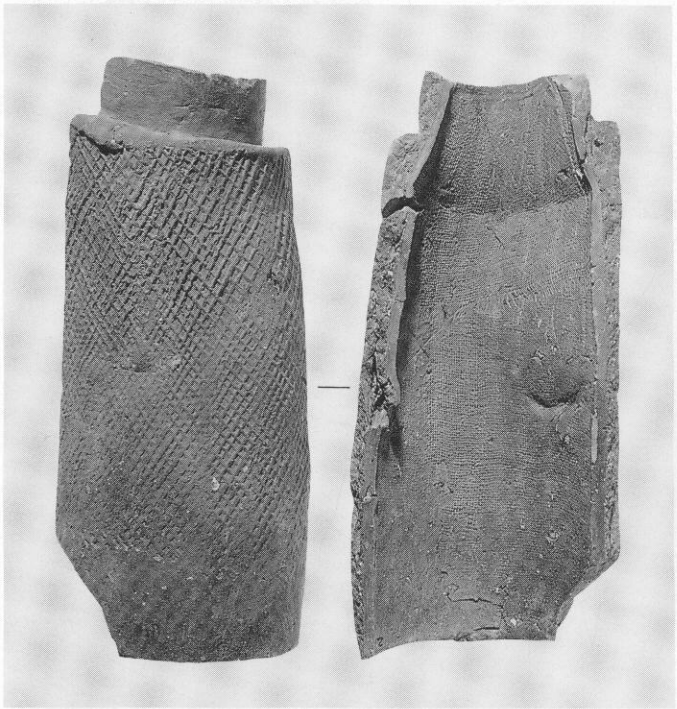




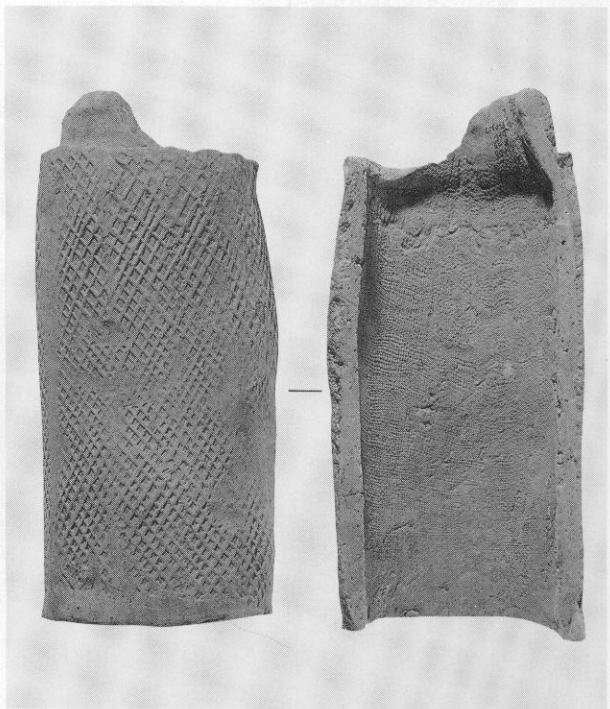
瓦溜りSK025出土瓦(1)　1．軒丸瓦ⅢA類　2．軒平瓦Ⅳa類　3．軒丸瓦ⅢA類剝離面　4.5　軒平瓦Ⅳd類と剝離面



鬼瓦

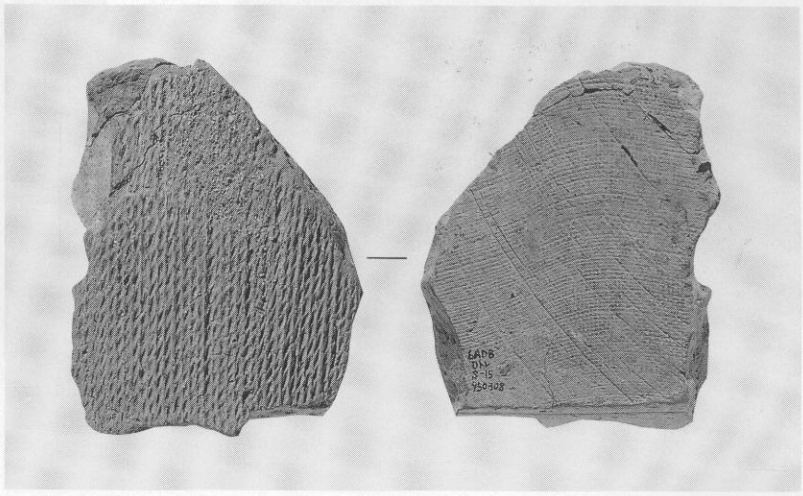


丸瓦 1

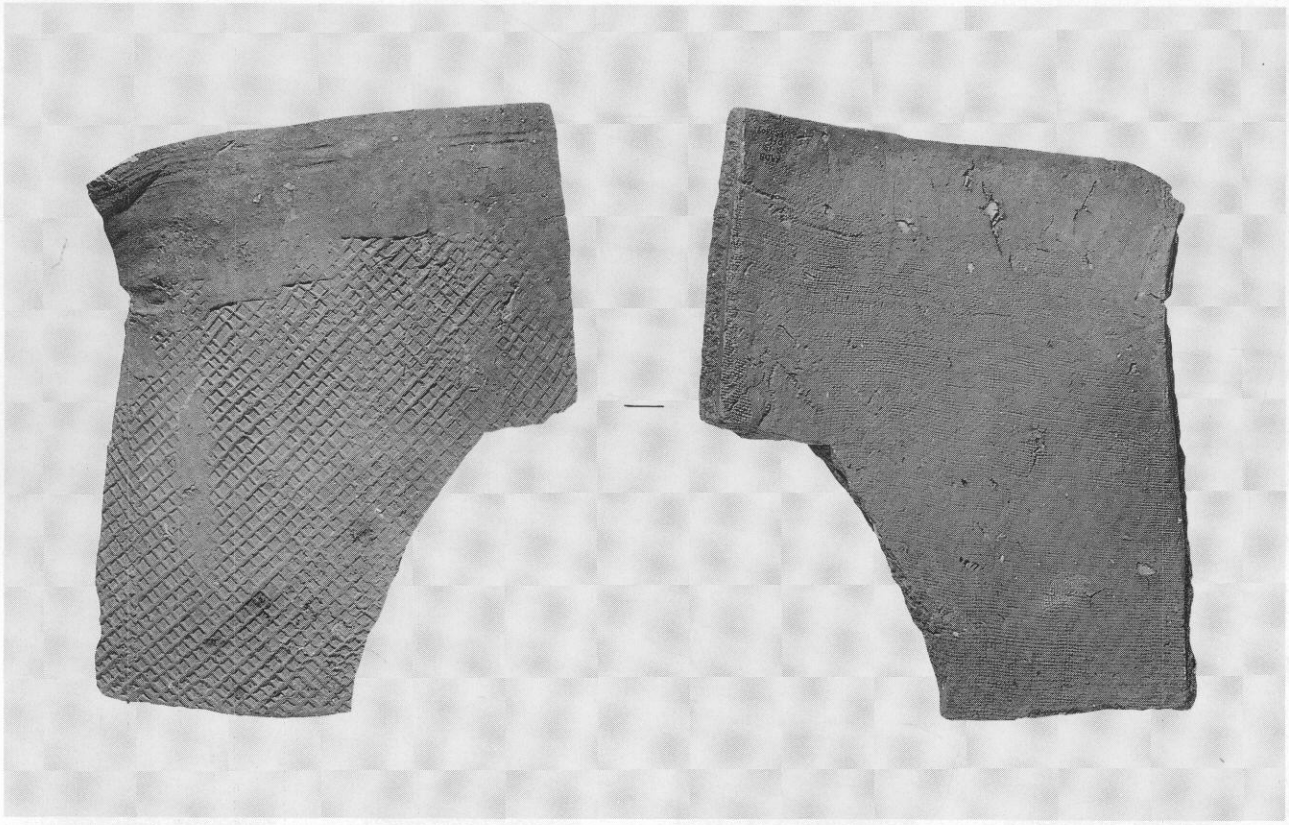


丸瓦 2

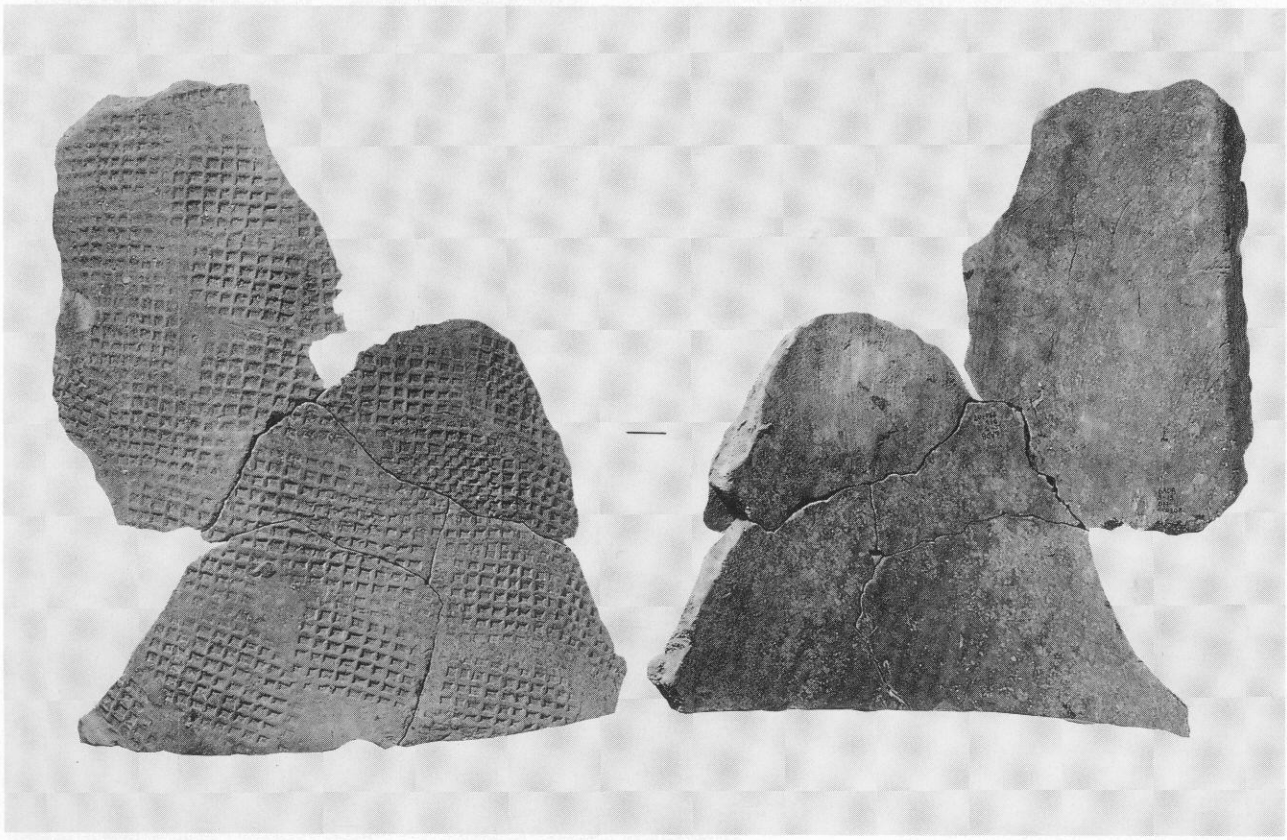
瓦溜りSK025出土瓦(2)



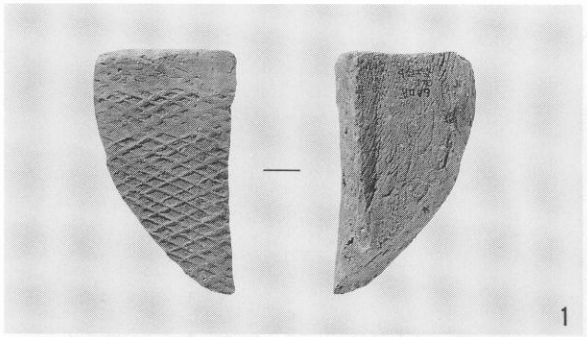
平瓦 2

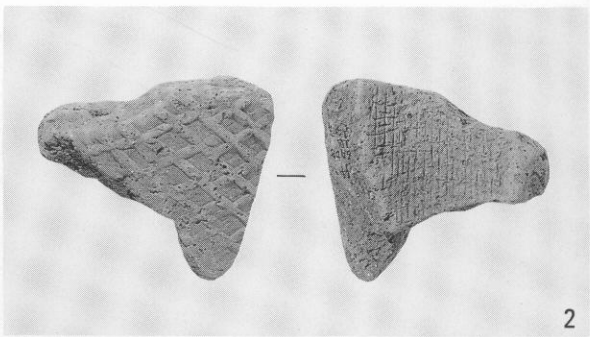


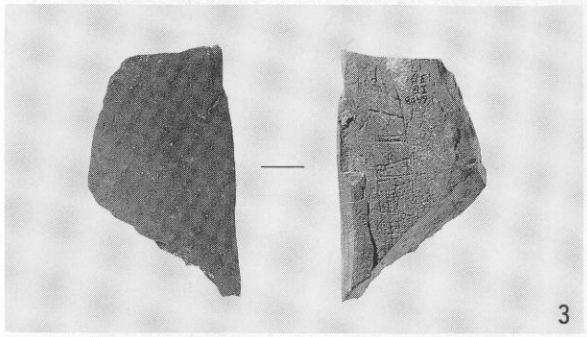
平瓦 1

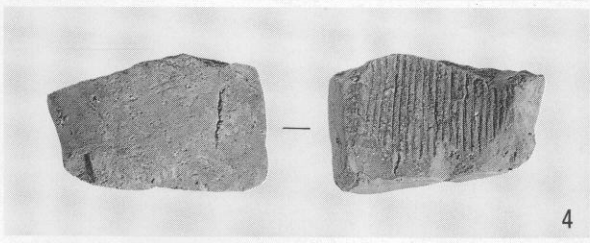


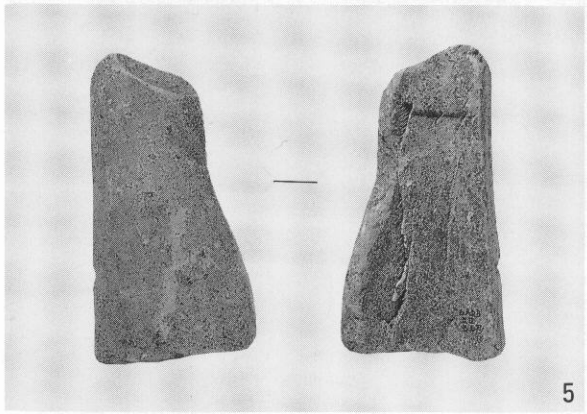
平瓦 3
瓦溜りSK025出土瓦(3)

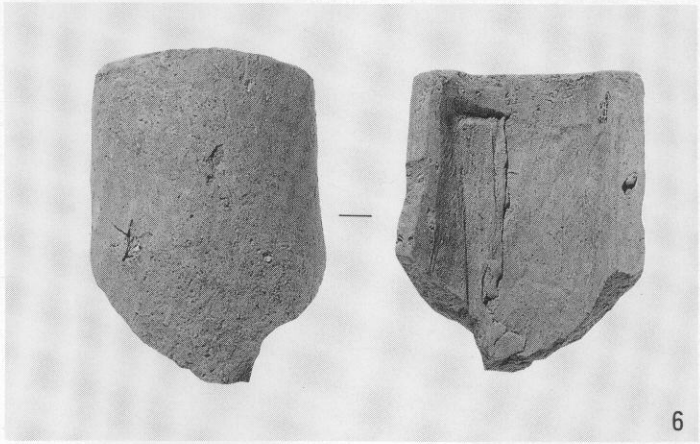

1

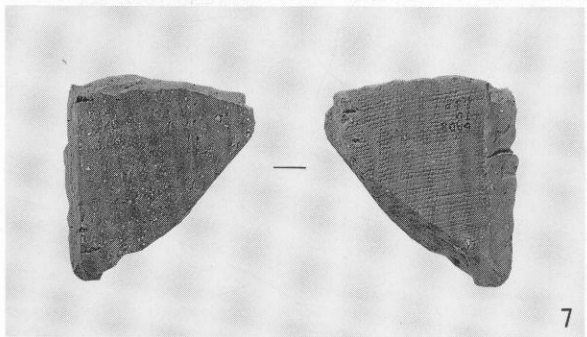

2

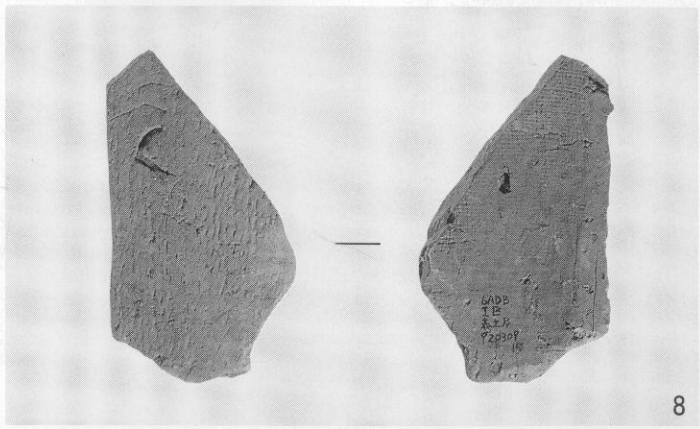

3

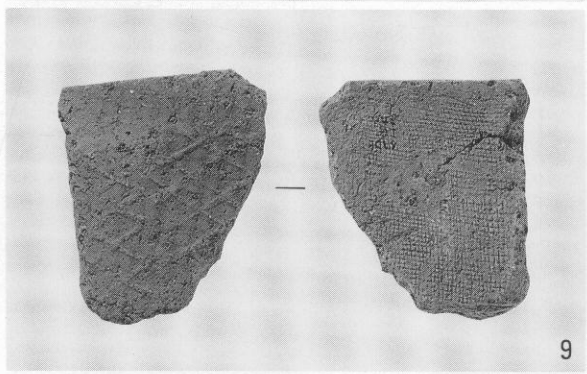

4

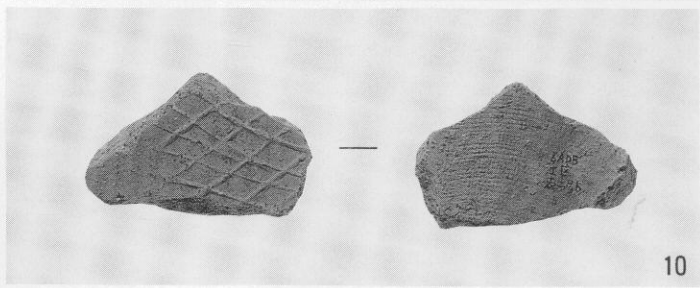

5


6


7

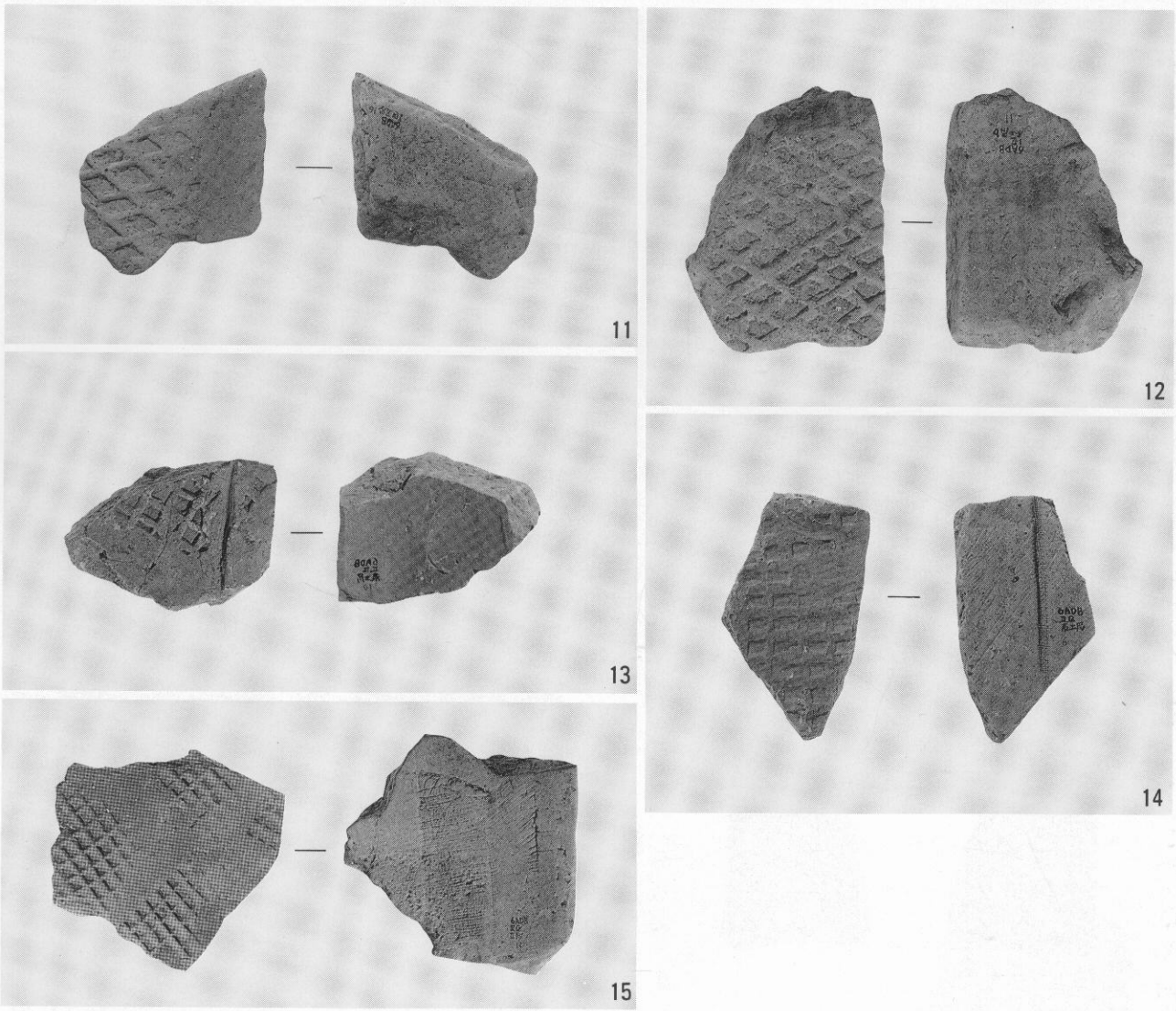

8


9

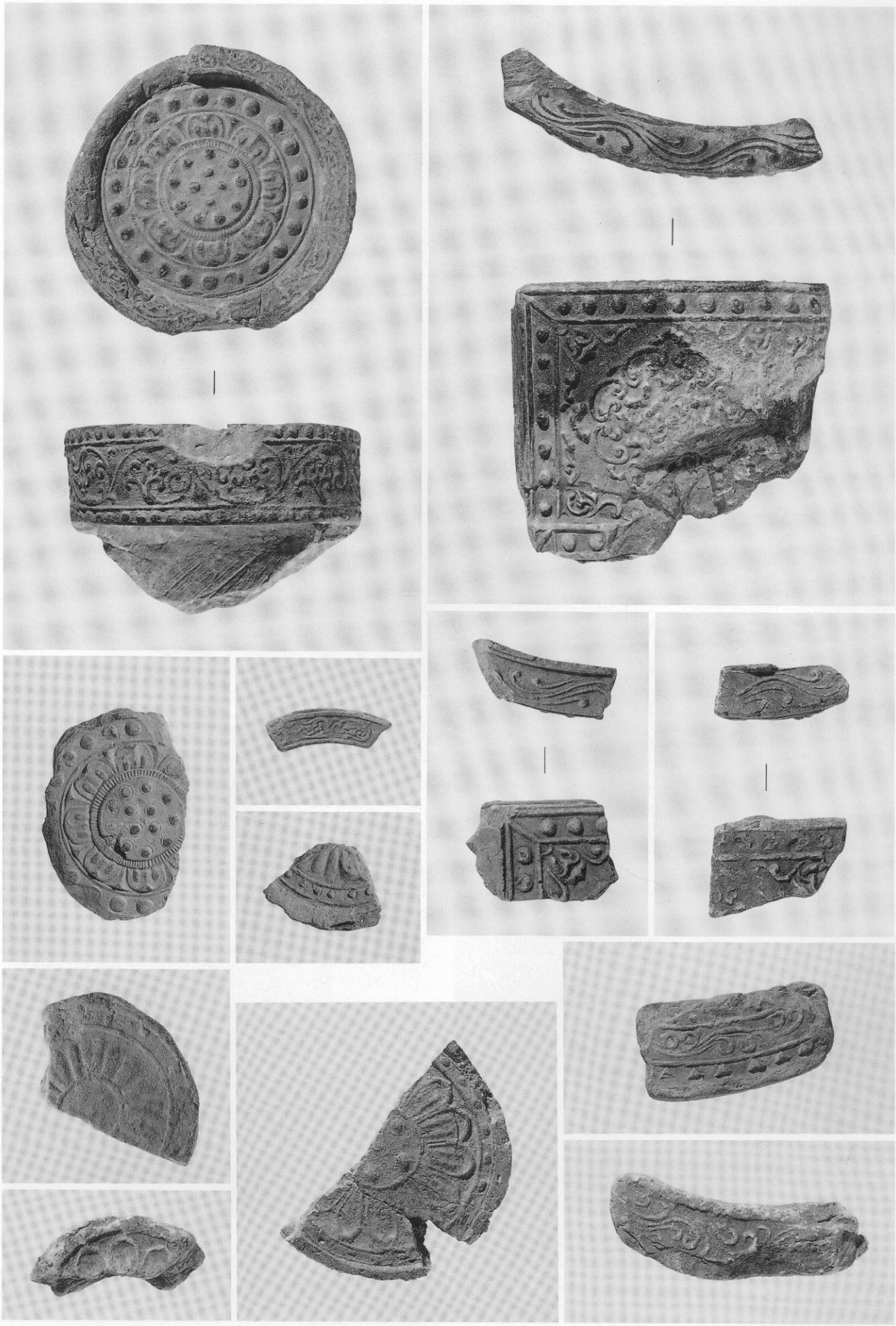

10

出土丸瓦・平瓦片(1)

図版22

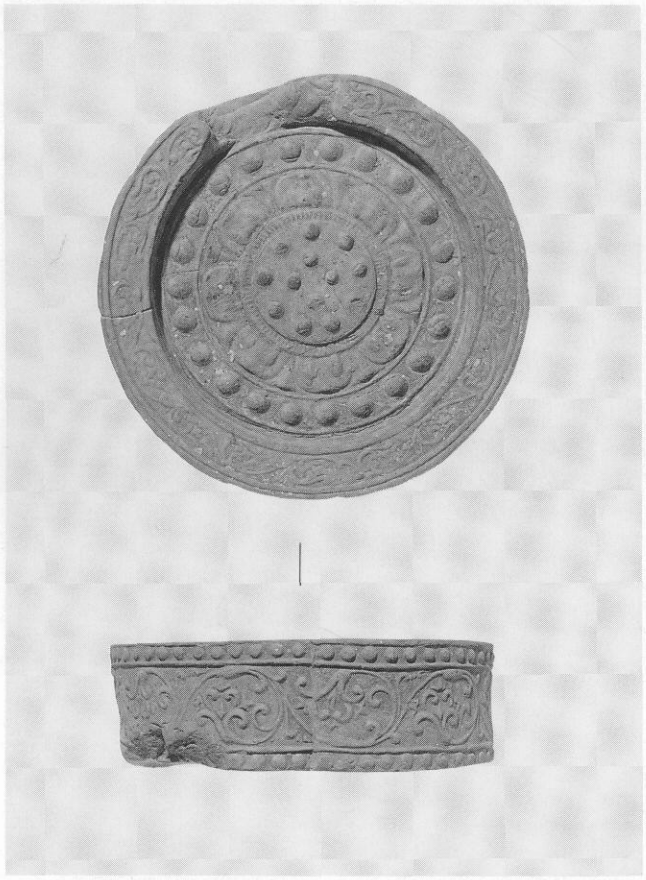


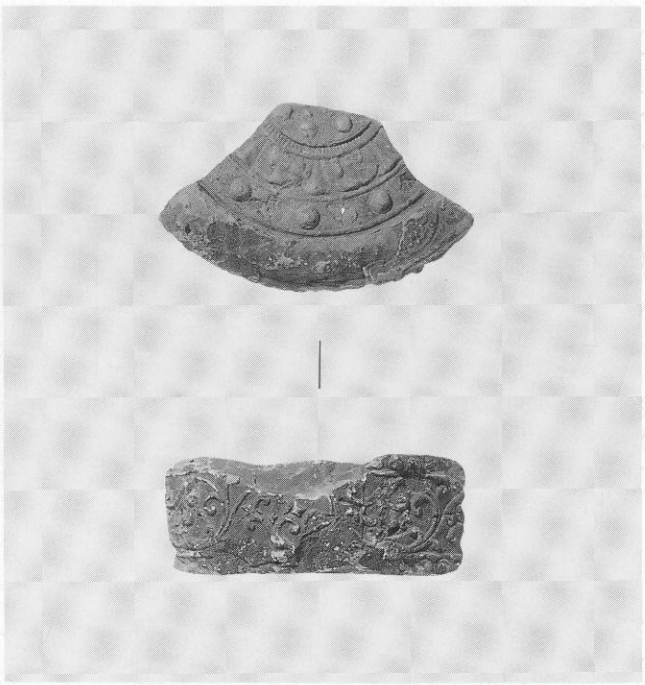
出土平瓦片(2)



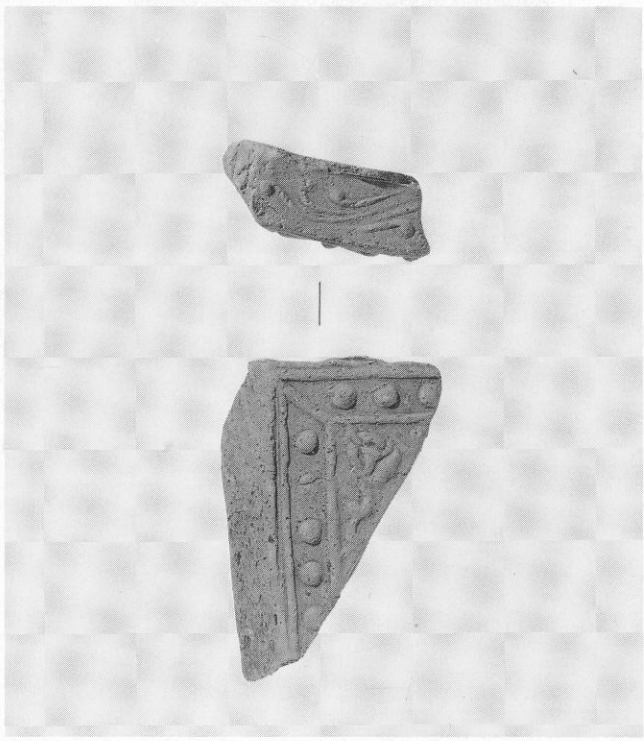
大分廃寺出土軒瓦（大分八幡宮所蔵主要資料）

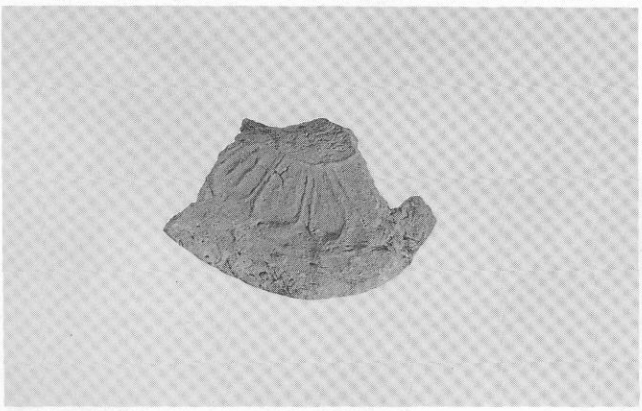
図版24

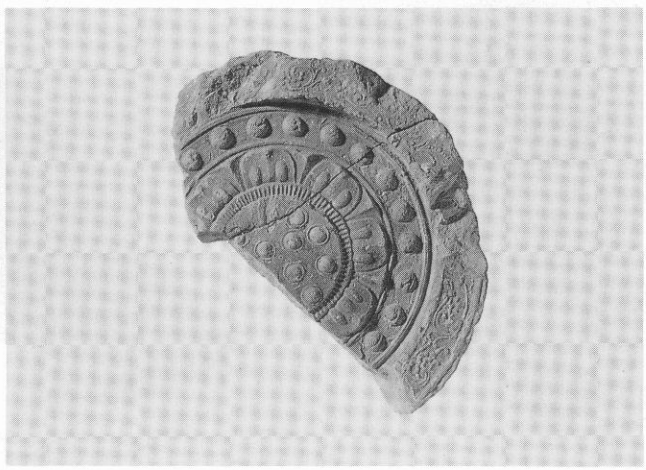




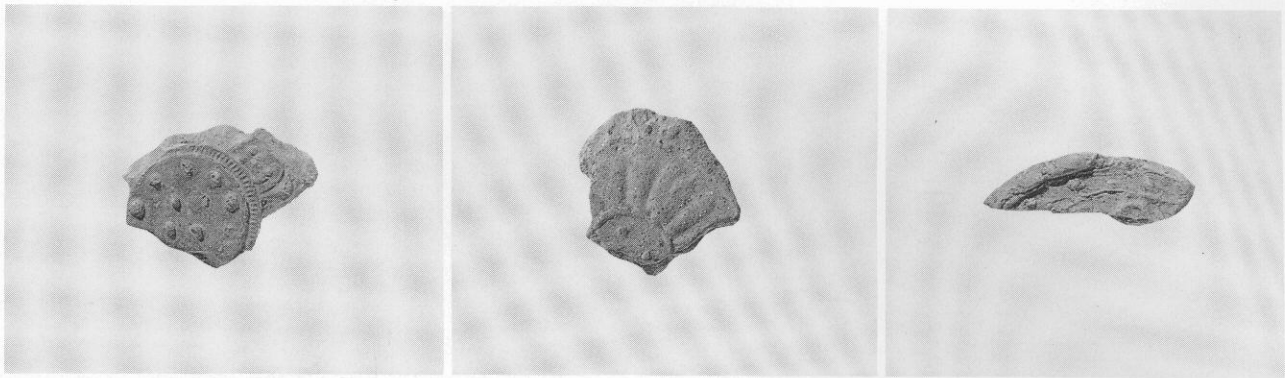




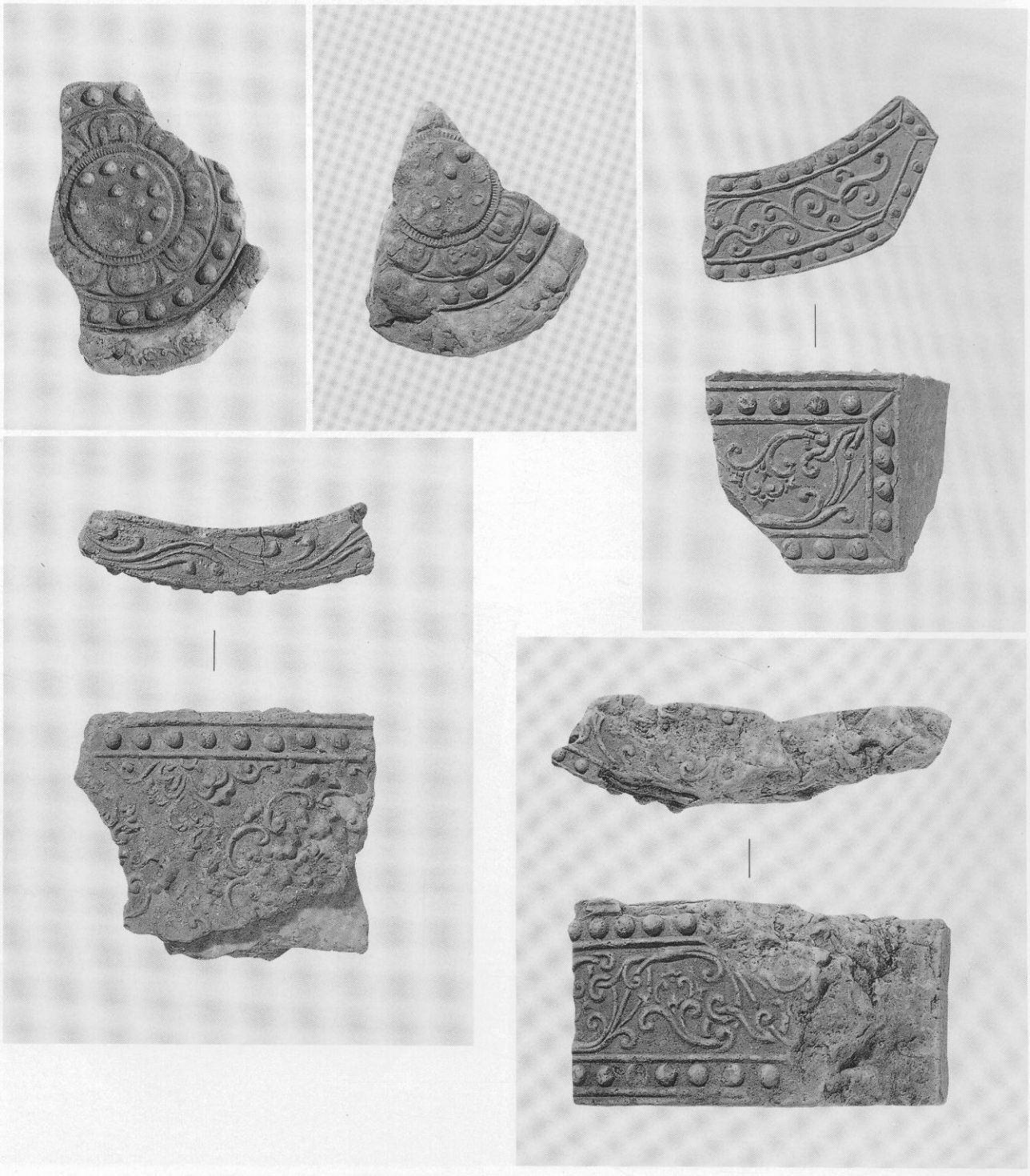




大分廃寺出土軒瓦（養源寺所蔵資料、塚本権一氏所蔵資料〔右下〕）



大分廃寺出土軒瓦（畠中大三郎氏所蔵資料）



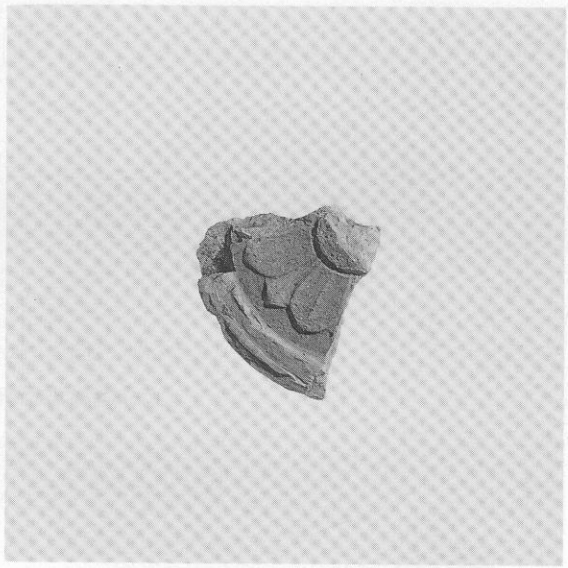
大分廃寺出土軒瓦（筑穂町教育委員会保管資料、穂波町教育委員会所蔵〔左下〕）

図版26





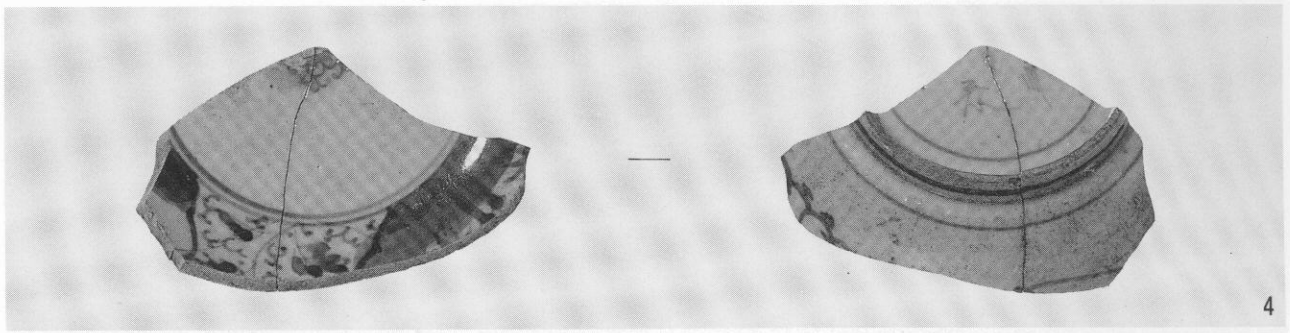
大分廃寺出土軒瓦（筑穂町教育委員会保管資料）

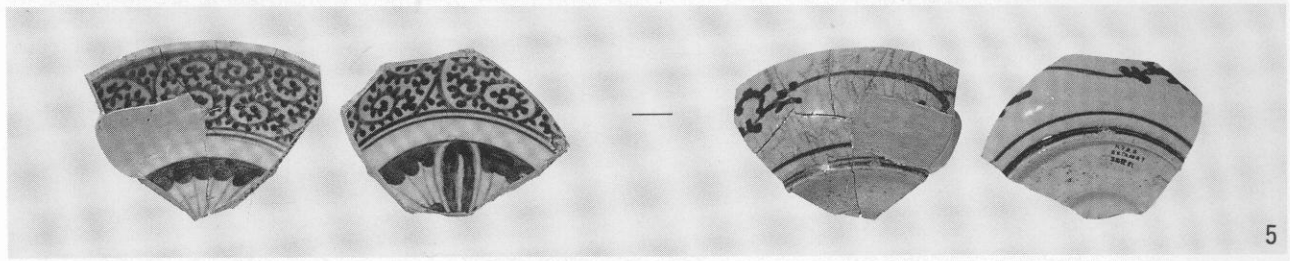


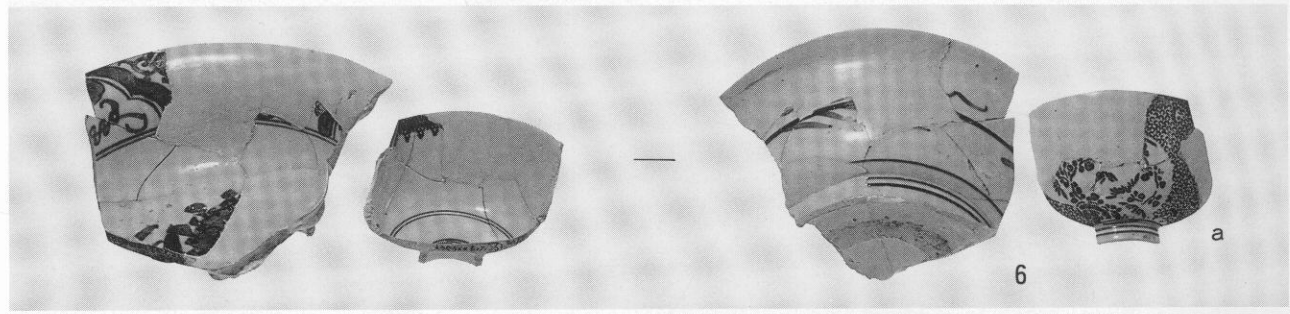
大分廃寺出土軒瓦（九州大学所蔵資料）



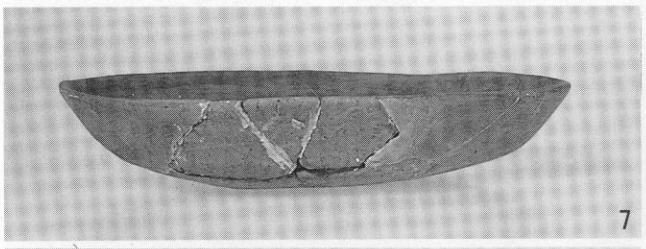
（右）参考資料
天台寺跡出土軒平瓦
（奈良国立博物館所蔵資料）

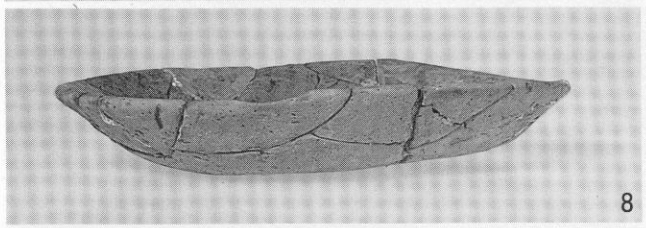

4

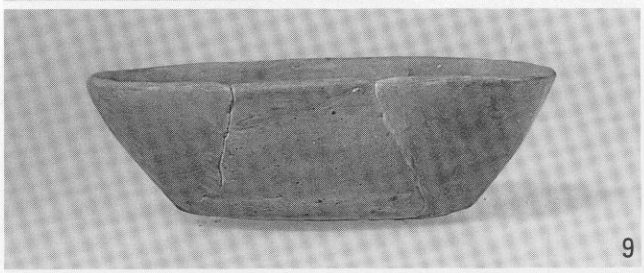

5


6

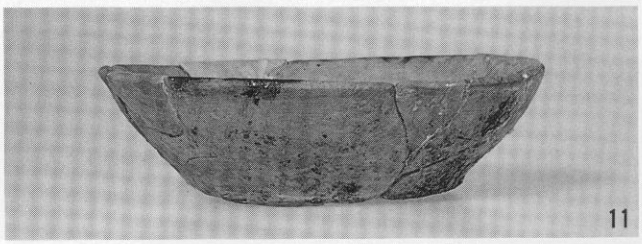
a

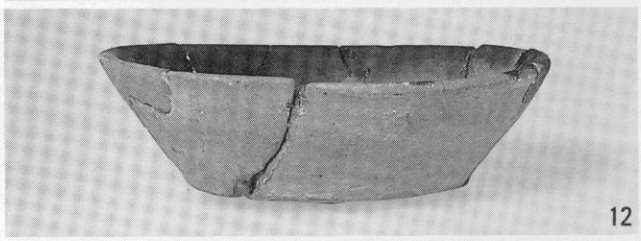

7


8

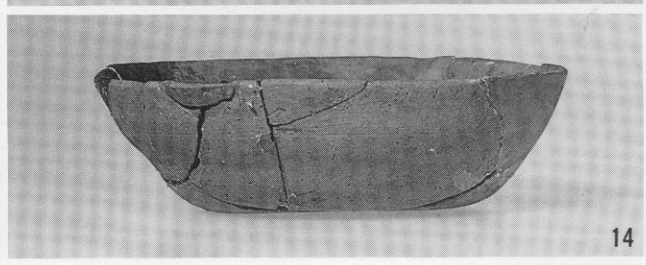

9


10

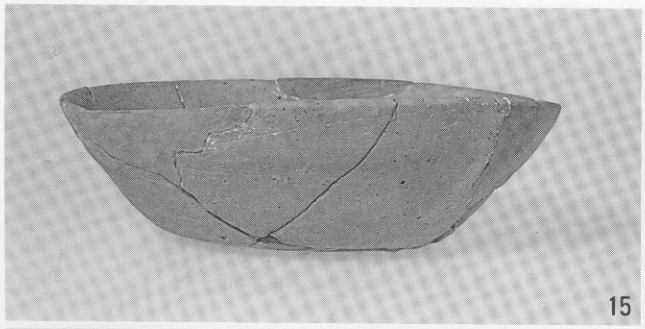

11

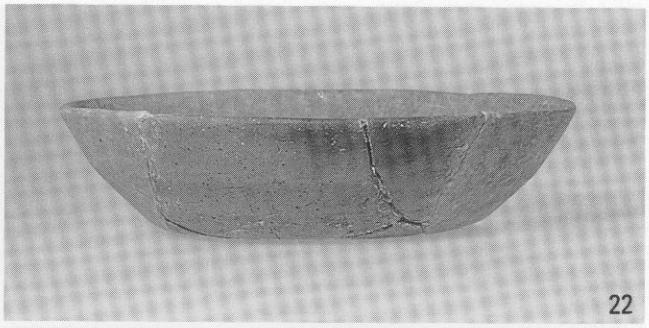

12


13


14

塔跡SB001・瓦溜りSK025出土土器・陶磁器


15


22


17


23


18


25


19


26

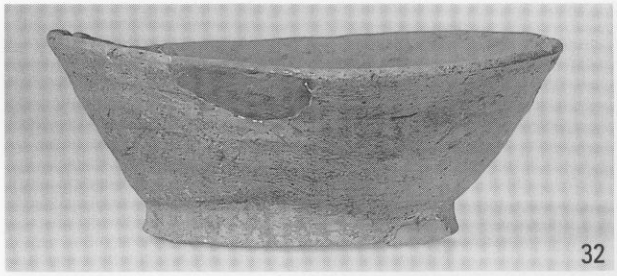

20


27

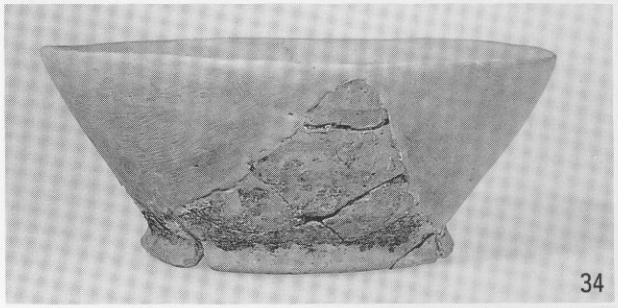

21

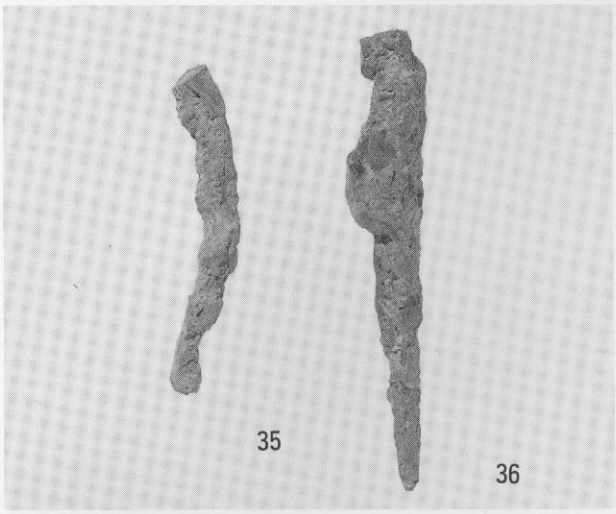

28

瓦溜りSK025出土土器


32

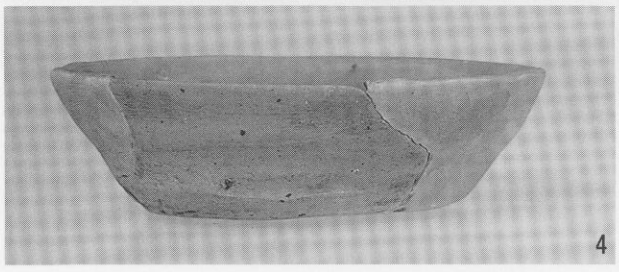

33

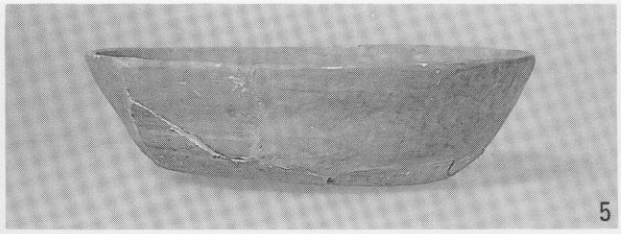

34

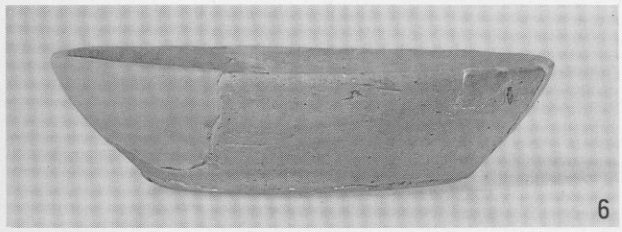

35

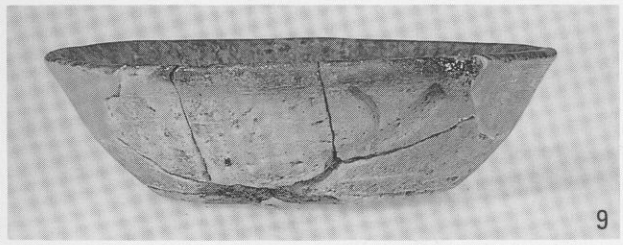
36

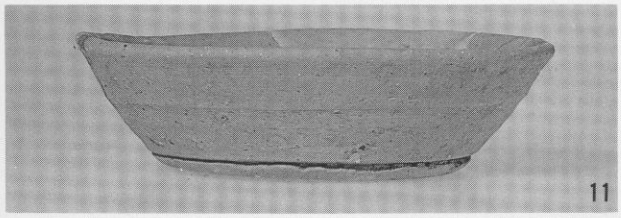

2

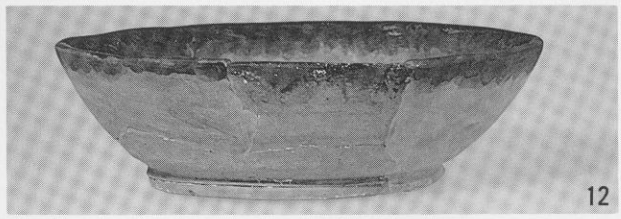

4

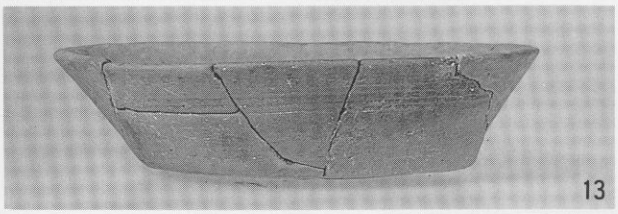

5

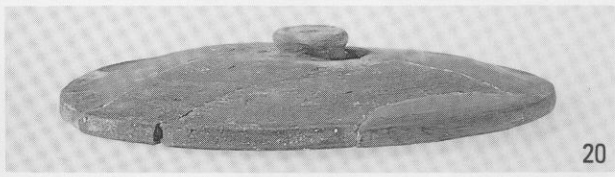

6

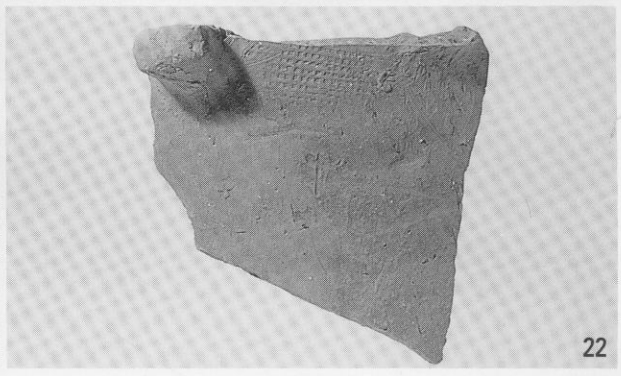

9


11


12

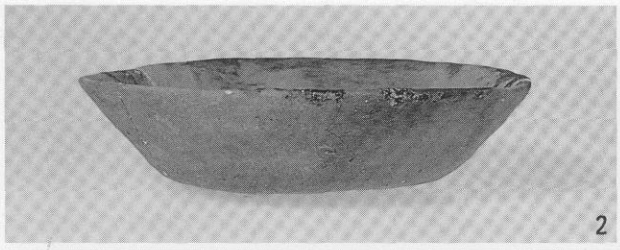

13

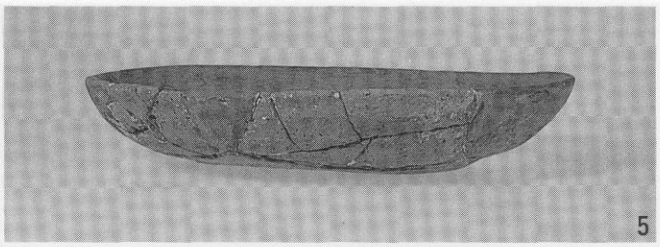

20

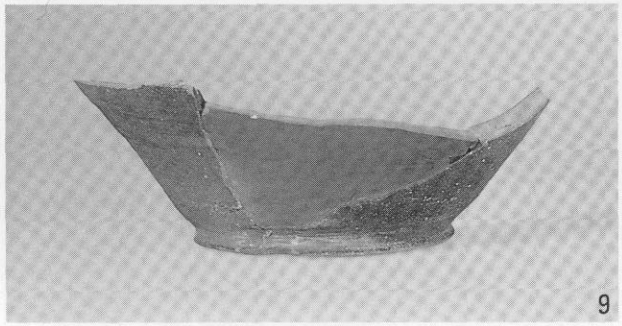

22

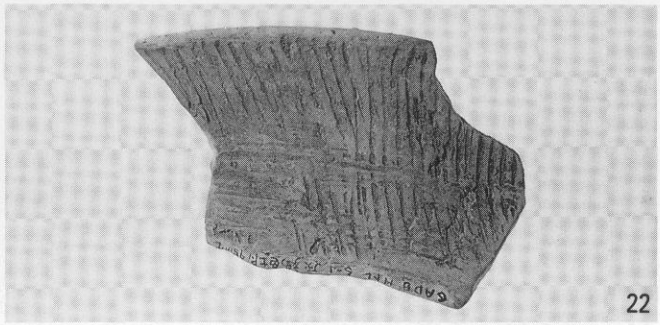
瓦溜りSK025・Fトレンチ出土土器・鉄製品

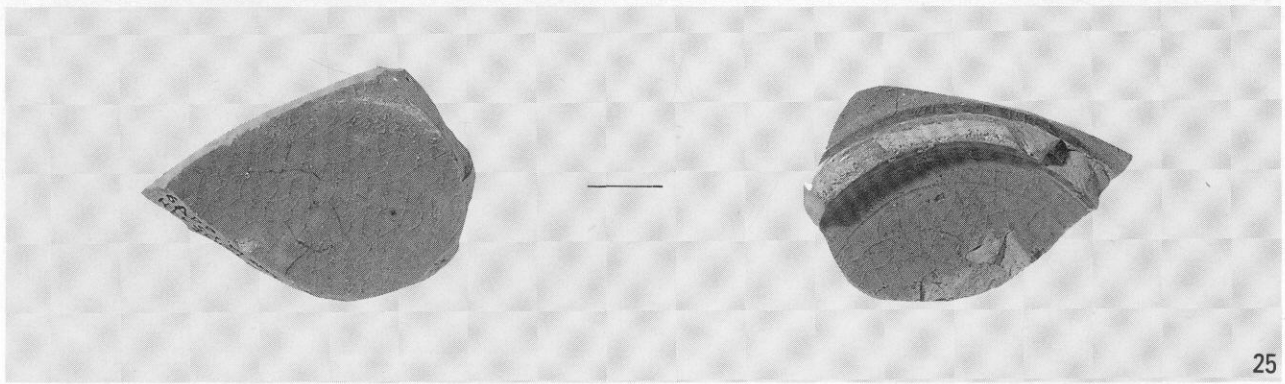
図版30

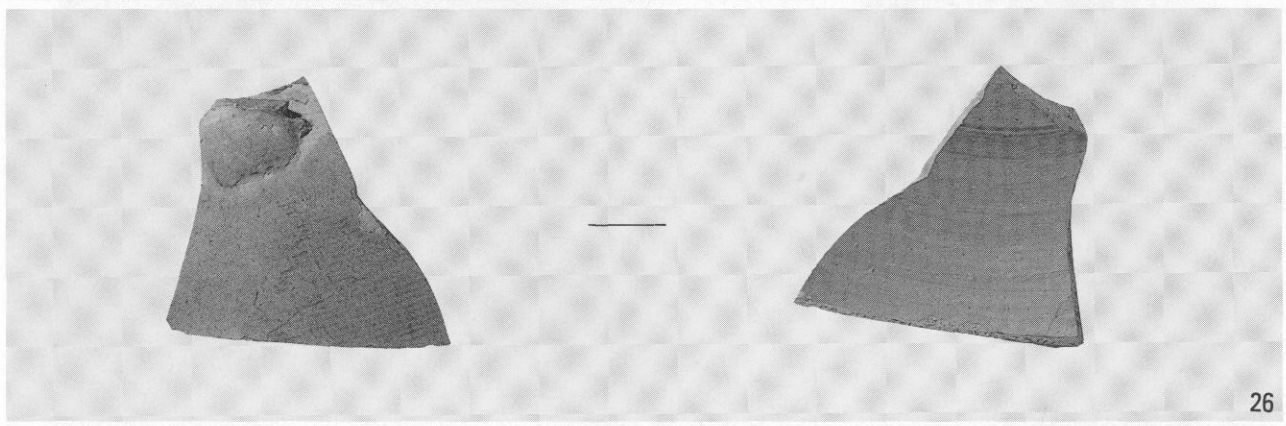


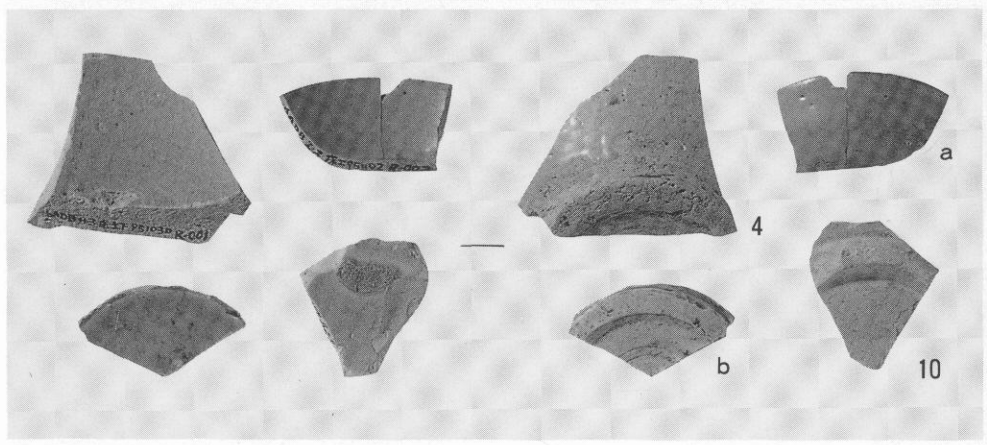


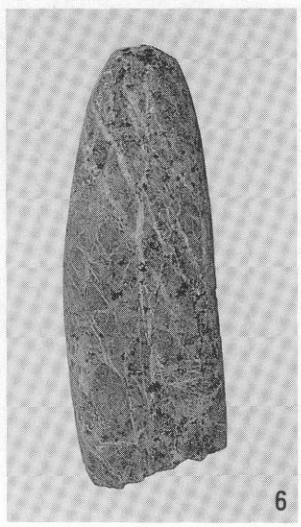




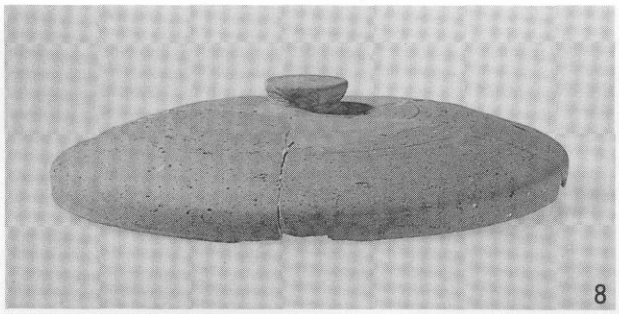






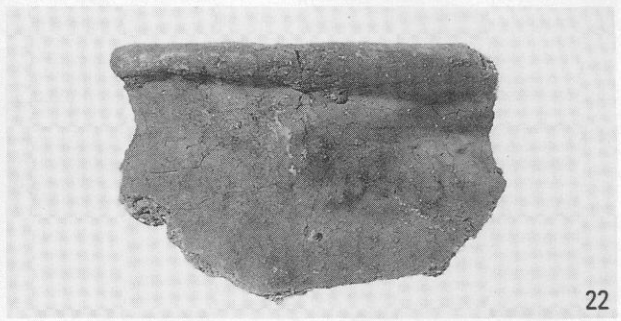


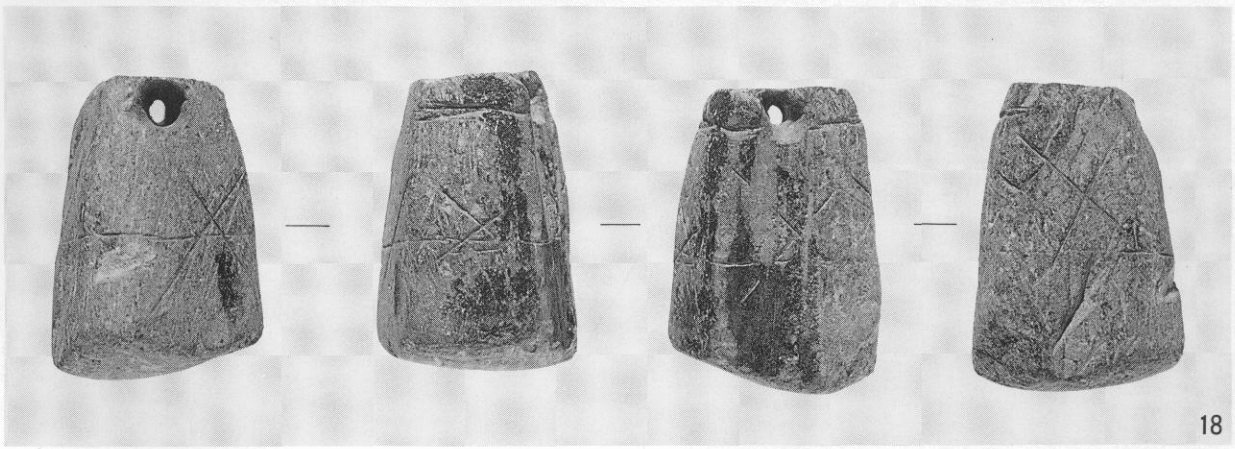
Gトレンチ・Hトレンチ出土土器・陶磁器・石製品



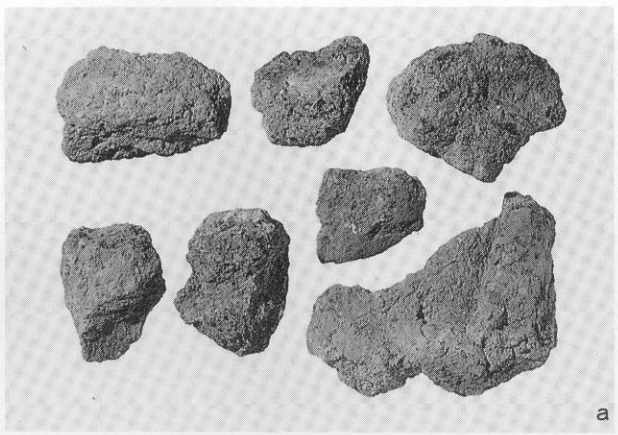


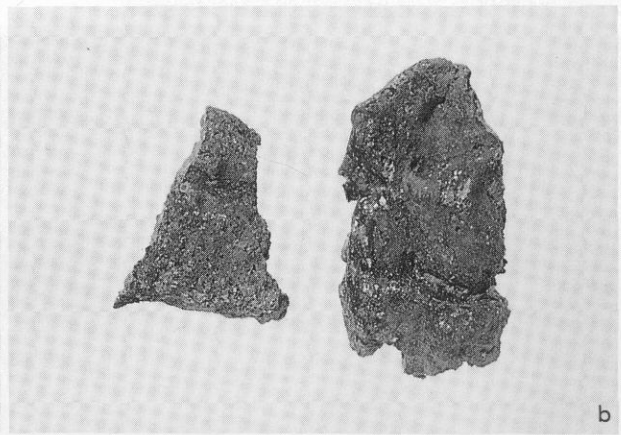






Jトレンチ・Lトレンチ出土土器・石製品

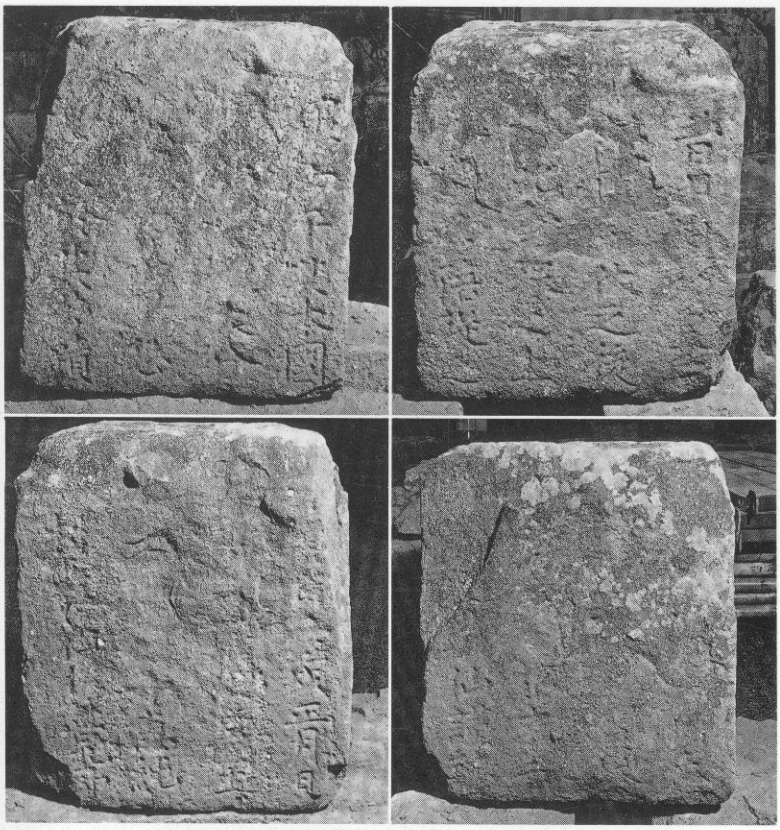


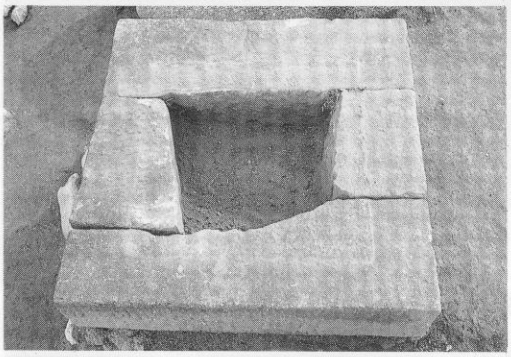


鋳造関連遺構SX035出土鋳造関連遺物

図版32

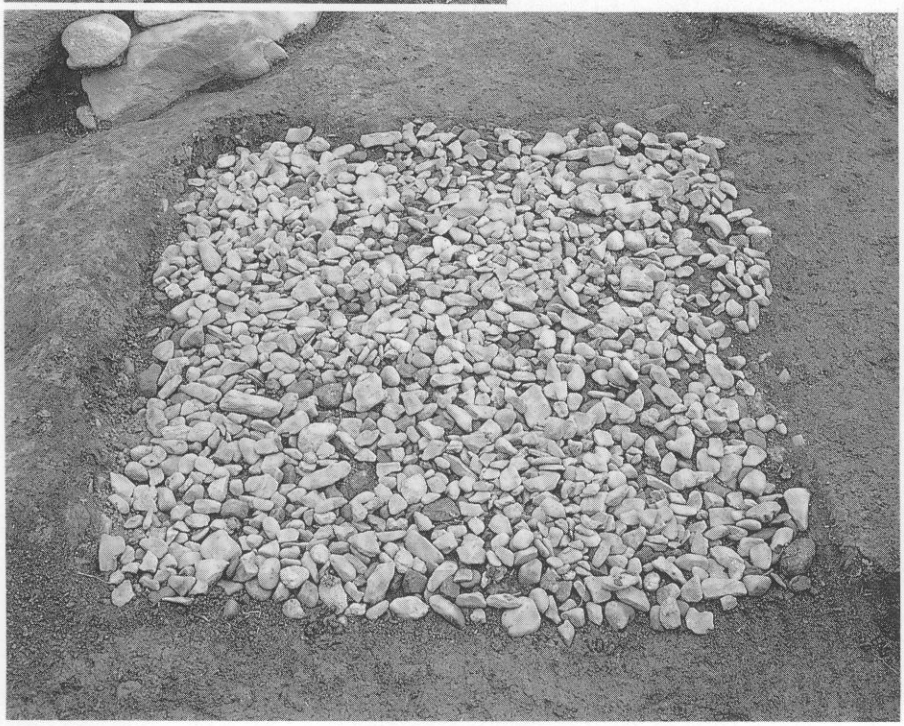






(左上)宝篋印塔全景
(右上)宝篋印塔部分
(左下)宝篋印塔の基礎部

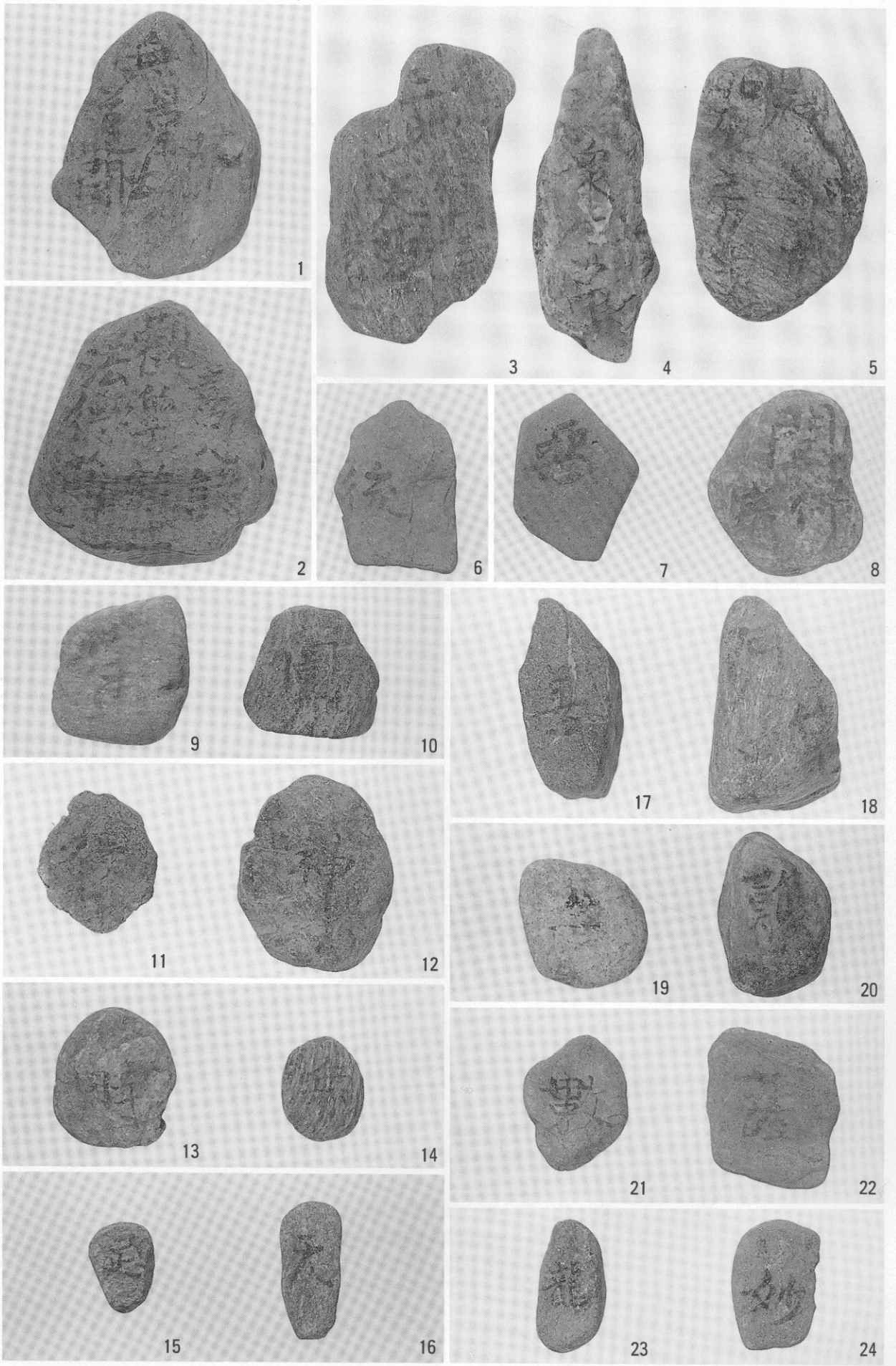
◀宝篋印塔基礎部



一字一石経 出土状況



宝篋印塔部分


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24

報告書抄録

ふりがな	だいぶはいじ
書名	大分廃寺
副書名	
巻次	
シリーズ名	筑穂町文化財調査報告書
シリーズ番号	第3集
編著者名	栗原和彦・横田賢次郎・新原正典・緒方泉・水ノ江和同・山田誠
編集機関	筑穂町教育委員会
所在地	福岡県嘉穂郡筑穂町大字長尾1340番地
発行月年月日	平成9年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大分廃寺	福岡県嘉穂郡 筑穂町大字大分 字塔床718番	404250	490023	33度 34分 55秒	130度 38分 20秒	1991 ～ 1996	1,300㎡	①塔跡の環境整備 ②寺域の確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大分廃寺	寺院跡	奈良時代 平安時代	塔跡、溝	軒丸瓦 軒平瓦 須恵器 土師器 陶磁器 権 一字一石経	掘り込み地業による塔基壇規模を確認 寺域に関連する溝を確認

大分廃寺

筑穂町文化財調査報告書　第3集

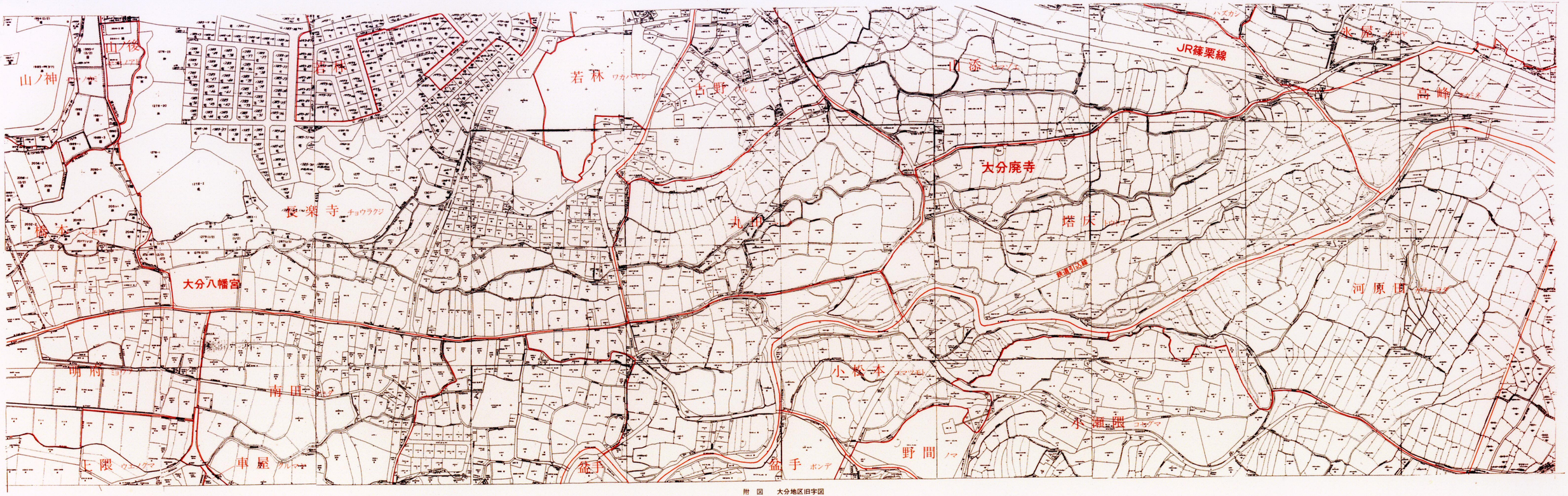
平成9年3月31日

発行　筑穂町教育委員会

福岡県嘉穂郡筑穂町大字長尾1340番地

印刷　赤坂印刷株式会社

福岡市中央区大手門1丁目8－34


山ノ後
山ノ神
若林
古野
JR篠栗線
水焼
高峰
大分廃寺
塔床
丸山
長楽寺
橋本
大分八幡宮
河原田
小松本
南田
車屋
盃手
野間
水源隈

附　図　　大分地区旧字図